

● 記録全集 4

機動戦士
ガンダム
UNDAM

本書の制作スタッフ

●編集制作	(株)銀英社
●編集	浜松克樹
●フィルム編集	蛭田 徹
●取材・記事執筆	小牧雅伸
●レイアウト	山下幸雄
●写真・撮影	飯野 恵
●執筆・編集協力	富野喜幸 安彦良和 松崎健一 星山博之 山本 優 荒木芳久
●取材協力	近藤一夫 斉藤 泉 丹波良治 高柳 誠 飯塚正夫 伊藤秀明 雙木信子 布川由美子
●写植・版下制作	荻原 敬
●製版担当	矢板 担 高味寿雄
●製作コーディネイト	平田昭吾
●印刷・製本	小宮山印刷(株)

Title : GUNDAM

Author : NIPPON SUNRISE CO.,LTD.

Copyright : ©1980 by NIPPON SUNRISE CO., LTD.
SOTSU AGENCY CO., LTD.

printed in Japan

●ビジュアルストーリー編

1.....27・28・29・30・31・32・33・34・35・36.....43



VISUAL STORY

MOBILE SUIT GUNDAM

機動戦士ガンダム記録全集 4

目次

★安彦良和オリジナル・ポスター(巻末)

第27話 女スパイ潜入!

第28話 大西洋・血に染めて

第29話 ジャブローに散る

第30話 小さな防衛線

第31話 ザンジバル追撃

第32話 強行突破作戦

第33話 コンスコン強襲

第34話 宿命の出会い

第35話 ソロモン攻略戦

第36話 恐怖・機動ビグザム

★キャラクター・シート

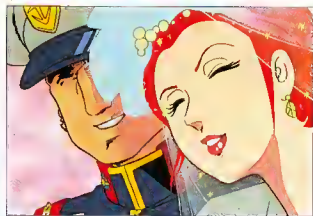
128 115 102 89 76 65 54 42 30 19 8



第27話



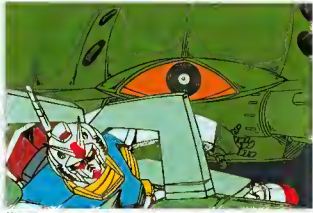
第28話



第29話



第30話



第31話

ゲストキャラクター



第34話
テム・レイ



第34話
ララー・スン



第29話
ウッディ大尉

★設定資料編

- 人物設定
- 美術設定
- メカニック
- キャスト&声優リスト
- ★ 総監督コメント
- メカ原図公開
- 声優コメント
- 5巻予告

★ガンダムミニ百科

松崎健一

★脚本家VS総監督

★安彦良和作画ノート



第32話



第33話



第34話



第35話



第36話

211 203

195 194 190

181 180 163 147 132 131

第33話
コンスコン少将

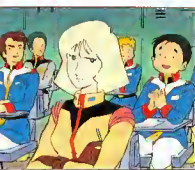
第4巻 メイン

第33話
カムラン・ブルーム

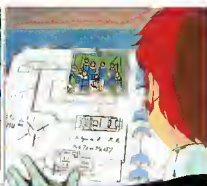
第33話
シムス・アル



27話 女スパイ潜入!



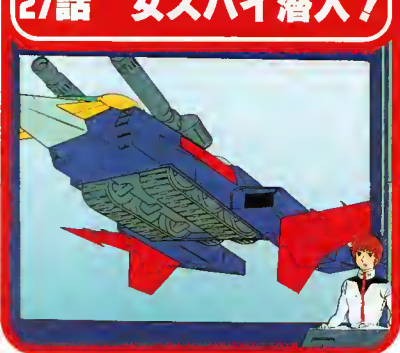
「驚かったわね」



「使い方の問題点は、次にあります」



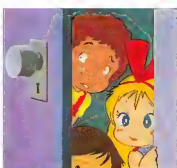
「すまない、トイレ」



「これはガンダムの新しいパーツだけで構成されたGファイターです」



「俺は限界を越えたのよね」



「シデンさん、おりの気かな」



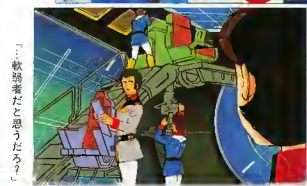
「なるべく早く手をうたせよう」



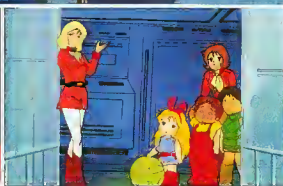
「冗談じゃねえよ」



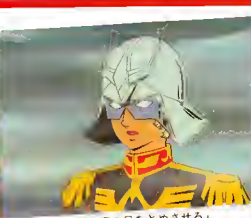
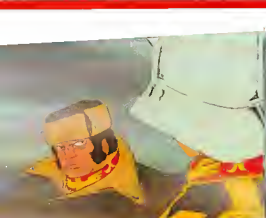
「売ればいくらになります」 「俺だって、おまえの全部が好きってわけじゃないけど、思いきらせ」



「...軟弱者だと思っただろ?」



「...でないと一機のガンダムも充分に出動できません」



「はっ／＼さぐりは入れさせてあります」

「木馬の足をとめさせろ」



「電気屋でも開くか……え？アムロ」



「泊まるとこないんだろ？ウチへおいでよ」



「姉ちゃんお帰り」



27話 女スパイ潜入！

「ニibelファスト基地の作戦室では、連邦軍の将校やホワイトベイスの仲間達を前に、アムロがGパーツの使用法を解説していた。ベルファストにもアムロ達の充分な休息の時間はなかった。船体の修理が終り次第、南米の連邦軍本部へ向わなければならない。すでにホワイトベイスは連邦軍の雷車に組み込まれているのだった。そんな中、カイ、シデンは艦を降りようとしていた。軍隊生活はどうしてもカイの肌に合わないのだ。

「カイさん、ほくはあなたの全部が好きというわけじゃありません。でも、今日まで一緒にやって来た仲間じゃないですか」

アムロの呼びかけも、カイの気持ちを変えすることはできなかった。アムロは自分の工作用具を彼に手渡すのだった。

モビルスーツの攻撃で荒廃した街をカイはあてもなく歩く。そんな彼に声をかけた少女があった。

「その様子じゃ、軍艦を追い出されたのかい？」

「ま、そんな処だ」

その娘とは何度か街で顔を会わせたことがある。貧しい物売りの娘だ。ミハル……少女は名のり、カイは彼女の家へ招待されることになった。



「いや……俺の悪いすしさ」



「あいつが外に出たら、すぐ姉ちゃんに知らせんだよ」

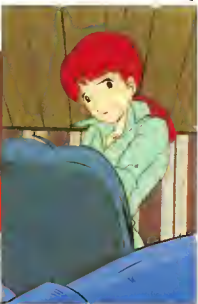


「本当……いやだね」



ミハルの家では幼い弟と妹が、姉のかせいでくるパンをじっと待っていた。貧しい食卓でミハルはホワイトベースに話題を向けた。
「すごいんだろ」
「まあな。船好きなのか？」
「浜育ちだからね」
下手な芝居だ……軍艦と宇宙船の区別もつきはしないのに……。
食事を終えて姉弟が出て行った際に、カイはミハルのかごを探ってみた。思った通り底にはペレットが隠されていた。ジオンのスパイだが、孤児のミハルが妹弟を育てる為にはやむをえない行為なのかも知れない。毛布を持って入ってきたミハルにカイはホワイトベースの情報をもらした。

「弟や妹の面倒をみているあなたの気持はよく分るぜ」



「ホワイトベースな、夜にはここのエンジンが手間とてららしいんだ。あそこを狙われたらまた足止めだらうけどさ」
この程度の情報なら……アムロ達にも危険はおよぶまい、とカイは考えたのだった。
海上のユニコンにミハルからの情報がとどいた。ブーン艦長のもとを訪れていたシャアは、攻撃をしかけるかたわら、ミハルをホワイトベースにもぐりこませるよう命じる。常に一手先を見通す男だ。ユニコンからは、水陸両用モビルスーツ、ズゴックが発進。ペルファスト基地の機雷網を突破した。



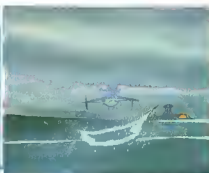
「107号はどこにいるのだ?」「木馬のいる港です」



「やってみせます」



「たのむ、あてにしているぞ」



「エリア29の反応がきました」

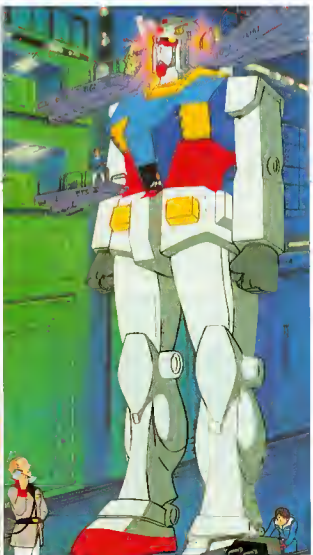
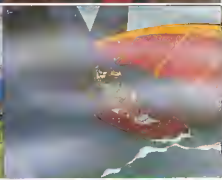


「マッド・アングラ」に操縦
の用意を急がせい」



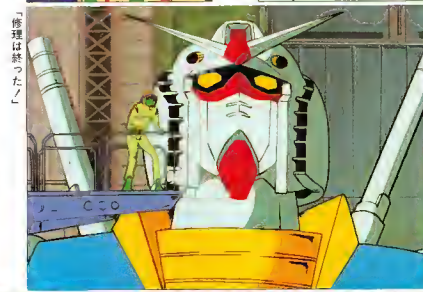
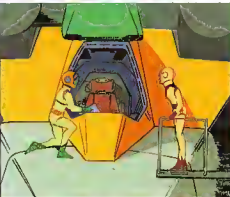


「緊急出動!? 二つはもう少しかかる。ガンキャノンとガンタンクをまわしとけ。GファイターかGスカイはどうなんだ?」

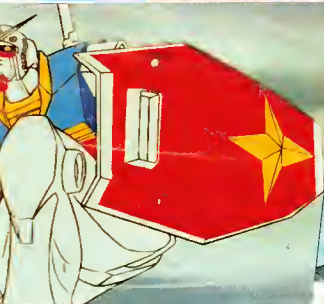


「気やすく言うのね」

「ドックのかこいは大丈夫ですか?」「ぶち破って下さい」



「修理は終わった!」



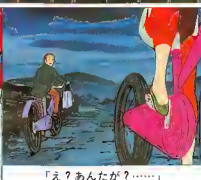
「ガンダムを乗せさせていただきます」

「了解!」

「自転車返してくれノ」



「空襲か？」



「偉いな、俺は帰るから…」

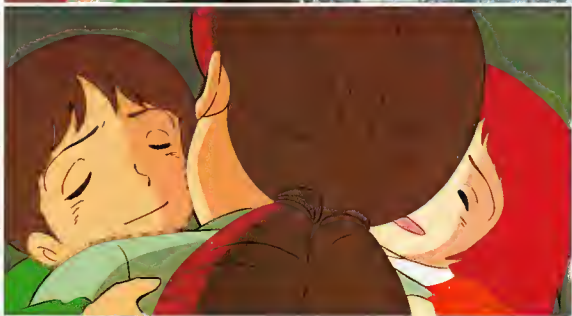
「え？あんたが？……」

「こんにちは？…お急ぎですか？」

「お姉ちゃん仕事に行ってくる」



「姉ちゃん…姉ちゃん、母ちゃんの匂いするんだね」



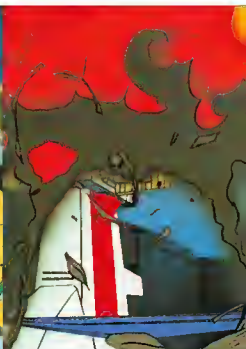
「ズゴックが上陸地点につくと同時に我々も攻撃をかける。その間にコノリー、おまえは上陸しろ！」
ブーンは副官のコノリーをミハルと接触させるべく、濃霧の海にボートを降した。
ユーコから発射されたミサイルがベルファストの街をゆるがす。アムロのガンダムは、セイラのGファイターの背に飛び乗り、海上に敵をもとめた。
その頃ミハルは海岸辺りの道に自転車を走らせていた。民間人に変装したコノリーと連絡をとるためだった。
「いや、慣れてなくてな。あんたみたいな人だとは思わなかった。これ金だつてよ。命令は、木馬にもぐり込んで行く先を知らせろということだ。」
コノリーは連邦軍の制服まで調達してきていた。重い心で帰宅するミハルをむかえたのは、幼い弟妹だけだった。カイは荷物を持って出ていったという。今度の仕事はいい金になる。しかし、この子達を残して行くのは……。
「この仕事が終わったら戦争のないところに行こうな、三人で……」
爆撃の照り返しの中、三人はお互いを確かめ合うかのように、固く抱き合い続けていた。



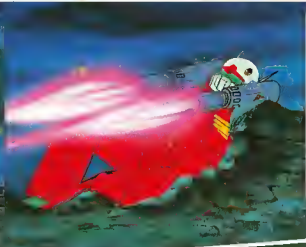
「俺はもう関係ねえんだよな。ドンパチなんか……」



「ハヤト、ガンキヤノン出ます」



「これがあのガンダムかいノハハハ」
「噂ほどのものじゃないぜ」



ホワイトベースのドックを直撃が襲った。ズゴックが迫っている。ハヤトのガンキヤノンが迎撃に出るが、ズゴックの性能の前に大苦戦を演じていた。そして小高い丘の上に、その光景を見つめるカイの姿があった。

「関係ねえよ……しかしよ……畜生ノなんでいまさらホワイトベースが気になるんだ……」

カイの頭の中に仲間達との日々が渦巻いていた。あんな運中のことがなげふつきれないのだろうか？

カイはセイラの声の響きを思い出していた。軟弱者。

「ほんと……軟弱者かもね」

その目に光っているのは涙だったのだろうか？





「止まれ——ノ軍のものだ！」



「とにかく連中ときたら……」



「ガンタンクは……」



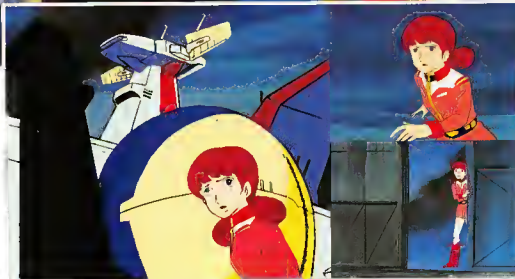
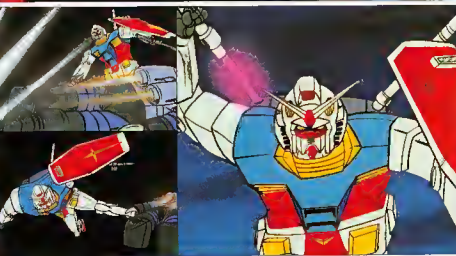
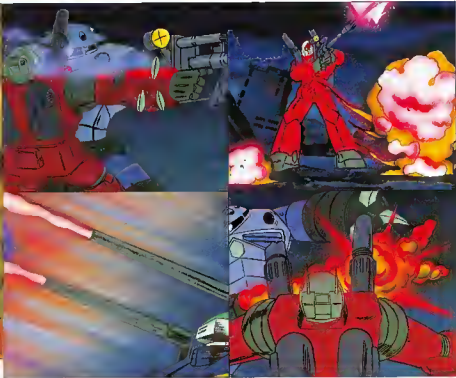
ガンダムは援護のゴックと海中で戦闘を繰り返していた。ゴックの鉤爪が伸びる。しかし、アムロはすでにその動きを見切っていた。走るチームがゴックを貫き、水柱が上った。

一方、ズゴックと相対したハヤトは窮地に追い込まれてきた。いたたまれずに、カイは基地へ駆け込んだ。おりしもシャフトの修理を終えたガンタンクが彼を待っていた。

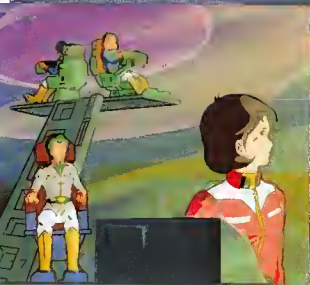
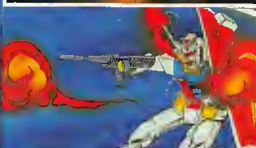
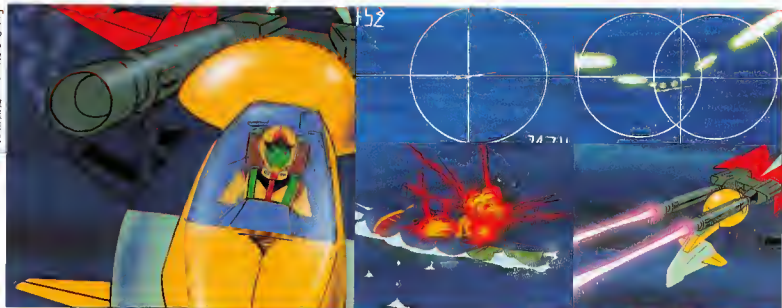
「あるじゃねえかノどうしたんだよノ」



「これ以上好きにやあさせねぞォ!」



「んとノレやあねえなァ!」
 コックピットに飛び込むカイ。
 タンクの砲撃は、ズゴックに胸を
 もがれる寸前のキャンを救った。
 アムロのガンダムも駆けつける。
 このままでは不利…と判断したズ
 ゴックのパイロットは、一気に結
 着をつけようと、ガンダムを海中
 に引きずり込んだ。
 その激戦のさ中、ミハルは連邦
 軍の制服に身を包み、ホワイトベ
 ースに潜入することに成功した。



「くるな!!」

セイラのGフアイトーがユーコン一隻を撃沈した。残るはズゴック一機のみ。しかし、水中での戦闘でガンタムの勝機は薄い。アムロはバーニアを噴かして空中にのがれる。

「くるな!!」

追いかけようと海上におどリ上ったズゴックに、カイのタンク砲が炸裂した。吹っ飛ばズゴックのボディを、アムロはとめとばかりバーニアで切り裂いた。

「アムロのこの工具一銭にもならねえってよ」

「あら、お帰らないかいカイ」



「まあ、そんな娘だな」



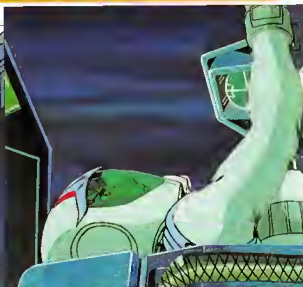
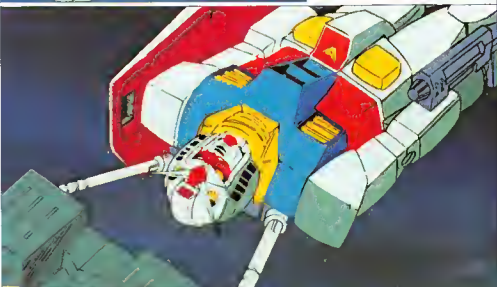
「どうせそうでしょうよ」



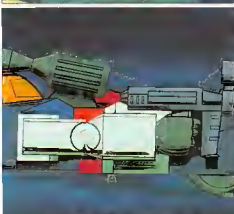
「よつノアムロのこの工具 一銭にもならねえってよ」
 タンクのコックピットから降りて来たカイは、相変らずの糸目つ氣ぶりをホワイトベースの面々にみせた。
 「みなさんの見てるのつらくってねノヘヘ……なノハヤト」
 マッドアングラーのブリッジでは、シャアがカップ片手に部下の報告を聞いていた。シャアはブーンにスパイとの接触を急ぐように命じるのだった。
 その真夜中。ホワイトベースは破壊された町をあとに密かに出港した。一人のスパイを乗せて……



28話 大西洋・血に染めて

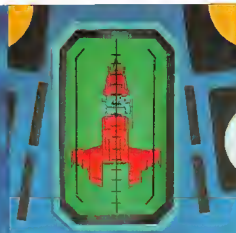


「失速しますノ 急いで下さい」



この部分がGアーマーの弱点だ

ドッキング完了



28話 大西洋・血に染めて

ホワイトベースは、ブーンのエーコン隊の攻撃を退けて、北アイランドを後にした。

しかし、その艦内にシヤアの密命をうけた少女が潜んでいることを誰も知らない。ミハル・ラトキエ。かつて、スパイを職業とする少女ではなかった……。

「アムロノいいわノ」

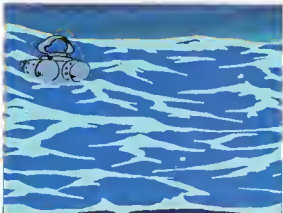
「了解ですノセイラさんノいきます」

大西洋上。アムロとセイラは初めて、ガンダムからGアーマーへのドッキング訓練を行なっていた。Gメカの変型の中でも、最も高度なパターンだ。しかし、アムロもセイラも見事なコンビネーションで、この課題をこなしてゆく。ガンダムからGアーマーにドッキングする際には、盾でカバーされない左側面ががらあきになつてしまふ。この装甲の弱さをいかにカバーするかが、今後のガンダムシステムの最重要課題といえるだろう。

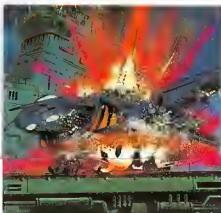


大西洋上を飛ぶホワイトベース

アムロノいいわノ



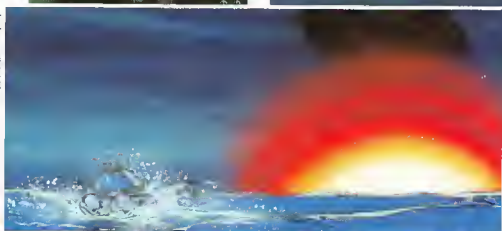
ミサイルで吹き飛ばしマラヤ甲板上の
ドン・エスカルゴ



対潜ミサイルを発射する空母マラヤ



マッド・アングラー



浮上する潜望鏡



「スパイを本馬にもぐりこませたか……」



「思ったより連邦軍のクジラは、大きかったようだな」



「何が破れたんだろう？」



「おどかしこなしたぜエ。だ、誰ちゃん？」



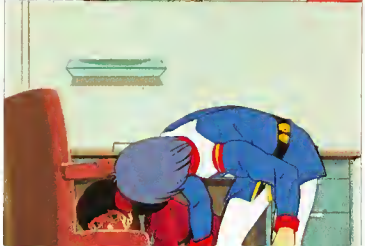
シャアのマッドアングラー隊の任務は、大西洋における連邦軍の補給路を断つことにあった。今の彼は、活発化するアフリカ戦線から目を離せない。ホワイトベースの処置はブーンにまかせるしかないさそうだった。

ミハルはブライトの私室に忍び込んでいた。ブーンの指示の内容を一つ一つ噛みしめる。行く先をつきとめること、本馬の性能に関する資料を手に入れること……。

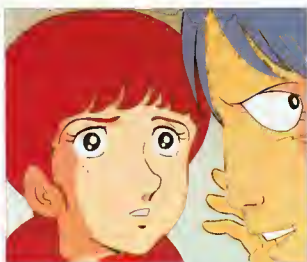
その時ブライトを呼ぶ声が。ミハルは机の下に身を隠し、ピストルを構えた。

「あれ、もう上ってんの？」

ドアを開けて入ってきたのはカイだった。服の破れる音を耳にしたカイががんでみると……



「シッノ
俺についてきな」



「じゃ……そのユニホームどうしたんだよ」



「あたし、あんたについてきたかったんだ
よっ。それでこの船に乗ったんだけど…」

「南米で下ろすからさ、みんなに
や内緒だぜ」、「ええ。僕は何も
見てませんから……」



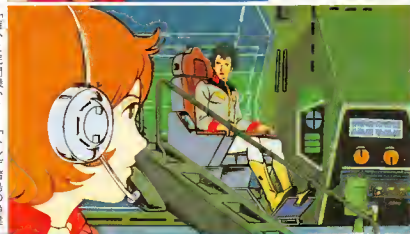
「これ以上の情報は、教えられねえ
よ。」「うん、そりやせうさ。」



「誰です？」



「確かに民間機か?」「ヘルデ諸島の漁業
組合の飛行機です」



「四時の方向に民間機です……」

後部第四デッキに収容される組合機



「に、ごめんよ。お、おどかして」
「ウン? あつノミハルじゃねえか
なんで……?」
「あたし、あんたについてきたか
つたんだよ。それでこの船に乗っ
ただけど……」
カイにはミハルの悲しい嘘が分
つていた。カイは彼女を自分の部
屋にかくまおうとする。おり悪く
そこにアムロが。
「恐人さんですか?」
「ハハノノそんなところかね。南
米で下ろすからさ。みんなにや内
緒だぜ」
南米……ミハルはしっかりとそ
の言葉を胸にききとらした。
ホワイトベースに民間機のSO
Sが入った。ヘルデ諸島の漁業組
合のものに間違いない。ブライト
は滴瀝を許可した。



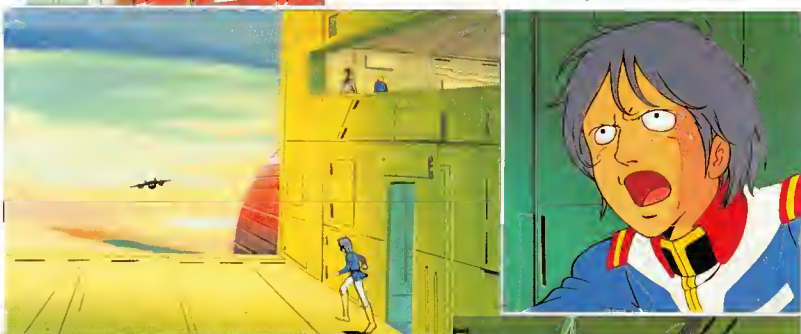
「応急修理して帰れるだけの燃料は貸す。しかし、その部屋以外の立ち入りは禁止します」



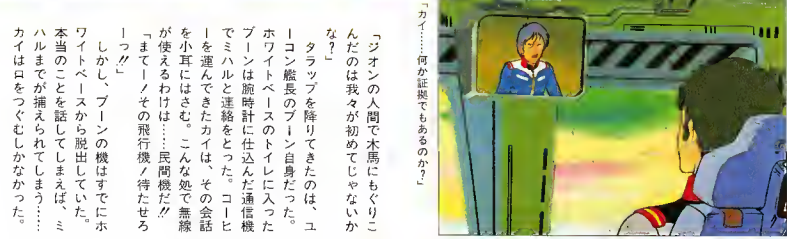
「連絡をつけたのか?」「うん」

「木馬の目的地?」「南米の宇宙船用ドック」

トイレから通信を送るブーン



「あれはスパイダノ 撃ちおとせノ」



「カイ……何か証拠でもあるのか?」

「ジオンの人間で木馬にもぐりこんだのは我々が初めてじゃないかな?」
「ラッ」
「タラップを降りてきたのは、ユニコン艦長のブーン自身だった。ホワイトベースのトイレに入ったブーンは腕時計に仕込んだ通信機でミハルと連絡をとった。コーヒーを運んできたカイは、その会話を小耳にはさむ。こんな処で無線が使えるわけは……民間機だ!」
「まてーノその飛行機ノ待たせろーッ!」
しかし、ブーンの機はすでにホワイトベースから脱出してた。本当のことを話してしまえば、ミハルまでが捕えられてしまう……カイは口をつぐむしかなかった。



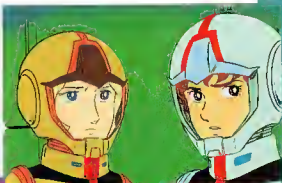
「ハツノ 間違いない、南米の宇宙船用ドックへ向います」



クラブロとスゴックが発進した



「アムロ、どう思ってます?」「敵の様子が判らないと、なんで出動するか問題ですね」



「はれませんが、七時の方向にあらわれています」

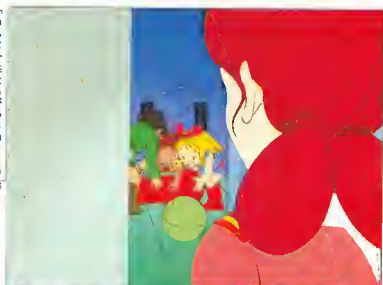


「アフリカ戦線ではないのだな?」
「ハツノ間違いない、南米の宇宙船用ドックへ向います」
マッドアングラーに潜艦したブリンは、シャアにモビルアーマーの部下がホワイトベースに沈められているのだ。モビルアーマーのスピードなら海中からでもホワイトベースを捕えることができる。シャアの許可を得たブリンは、二機のズゴックと共に出撃した。
「潜水艦が追いつくわけないだろう。ミサイルだけ気をつけて!」
「きましたノミサイルです」
ホワイトベースは思いもかけぬ海中からの攻撃に身をさらすことになった。直撃が艦をゆさぶる。

「空中でホルトアウトしましょう」



「あんな子供たちがいるの? この国に」



「つかまえたぞ木馬め」

「アムロノホワイトベースがやられたの?」
「大丈夫ですノハッチを少しやられただけ
ですから」



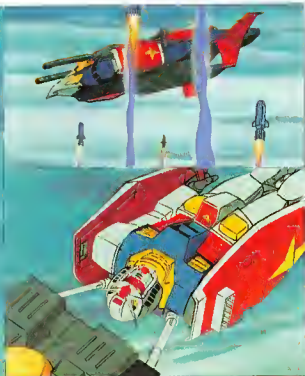
「ごめんノカ、カイノあたしが、
あたしがあんなたちをノ……」

衝撃で転がるチビちゃん達を見て
ミハルは青ざめた。私は…何てこ
とをしてしまったんだろう。救命
具を着けるよう命じるカイに、ミ
ハルは自分も戦いたいとすがりつ
いた。傾く座に、重なるように倒
れる二人。

「あたしにもやらせて」

「救命具をつけていろノ」

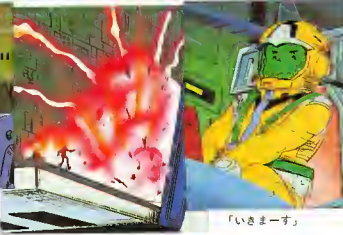
「いけー」



「来たなガンダムめ。水中戦によほどの自信がついたのか？ それとも、我々をなめているのかな？」



「カタバルトやられて、コアファイターが
出ません」「ガンベリーはどうした？」



「いきまーす」

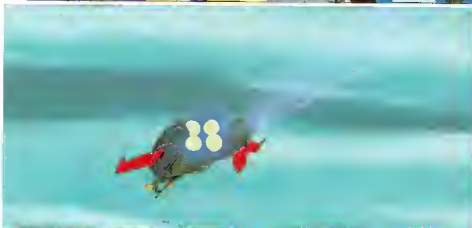
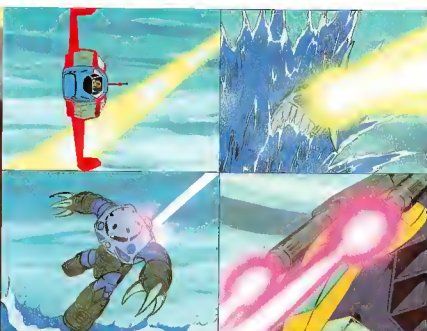


「お前は、逃げやすい她にかくれていろ」

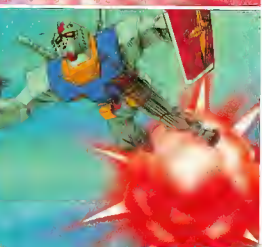
「お前は逃げやすい処に隠れていろ」

「みんな戦ってんだろ？あたしにも何かやらしてよ。できるからさ」

アムロとセイラはGアーマーで出撃していた。空中でポルトアウトし、ガンダムは海中に飛び込む。海中ではガンキャノン、タンクは不利だ。ハヤトはコアファイターで出たが、その直後格納庫は直撃をうけ、カイのコアファイターは使用不能になってしまった。



トラプロのツメがガンダムを……



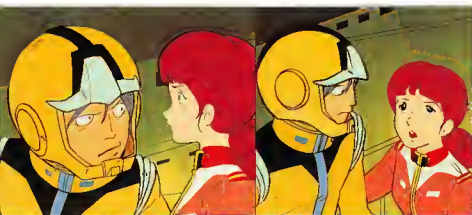
「うっ！だめだ！海の上におびき出さないかぎりガンダムに勝ち目はないぞ」

Gファイターとコアファイターは、巧みなコンビネーションで一機のズゴックを撃沈した。反撃するトラプロ。ブーメラン状のミサイルがGファイターのエンジンをかすめて飛ぶ。水中戦用の武器を持たないガンダムも、巨大なモビルアーマー相手に苦戦していた。ビームライフルのパワーは、水中では半分も発揮されないのだ。ついにガンダムの足はトラプロに抑えられてしまった。

「カイ！あたしにも聞かせて！弟達が救かって、あの子達が死んでいいなんてこと、ないもん！」
ガンベリーに乗り込もうとするカイにミハルはなおも食いついた。どちらにしろ爆撃手は必要なのだ。ミハルの情熱に負けて、彼女の搭乗を許すカイであった。

「スコープの大字に敵の光があったらミサイルを射つんだ。いいな」

「う、うん／分るよ」



「ミサイルうつくらいできんだろうが」

爆風で吹っ飛ばす三人……

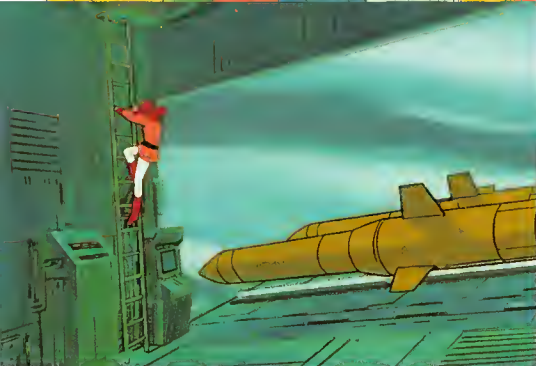


不時着したらファイターの上をガンベリーが飛ぶ

ガンダムは苦戦していた



「レバーは一つずつ押すんだ」

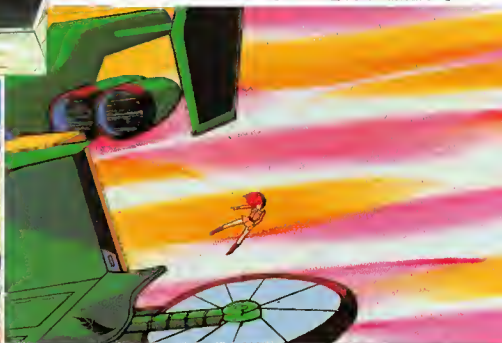
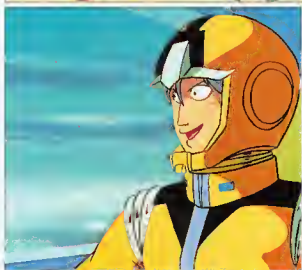


ザパッノ水柱を上げて海中から飛び出すスゴックに向けてミサイルが走る。一発目、はずれノ二発目も。そしてガンベリーは敵の反撃を受けて、ミサイルの発射回路を破壊してしまった。カタバルト脇の手動発射装置を使うしかない。ミハルは危険を覚悟でむき出しのカタバルトに降りて行った。水面下を黒い影が走ってくる。



「アハッ！ カイ、向うから来てくれたよ」

「当るように飛行機を！」



「ミハルっ！ やったぞオー！」

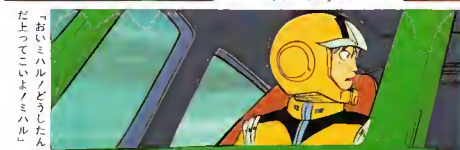
ミサイルの噴射！ そのショックでミハルの身体は大空に……



「うわっ！」



ガンダムは足を千切れられ自由になった



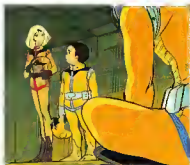
「おいミハル！ どうしたんだ上ってこいよ！ ミハル！」



海面に出るガンダム

「アハッ！ カイ！ 向うから来てくれたよ！」
のり出してレバーを引くミハル。三基のミサイルが同時に発射された。そしてそのアフターバーナーはミハルの体をすくい上げ、吹き飛ばした。木の葉のようにミハルは大空に舞い、落ちて行った。悲鳴すらあがる間もなく……
「やったアー！ ミハルっ！ やったぞオー！」
三斉射されたミサイルが、ズゴックを撃沈したのだった。海中でのガンタムの戦いにも好機がおとずれていた。グラブロが片足を引きちぎってくれたおかげで、動きが楽になったのだった。チームサーベルがグラブロに突き刺さる。無念の叫びと共に、ブーンは大西洋のもくずと消え去った。

「知りません……ね？」
「ええ」



「ミハルがいなくなった？」
「ええ……ガンベリでカイと一緒に出撃したらしいんですけど……」



「イさんの部屋に女の人が入るのを見たんですけど……すげ、敵がきたもので……」



「航者だったんです」



「うっ……ミハル……いなくなっちゃまって……」

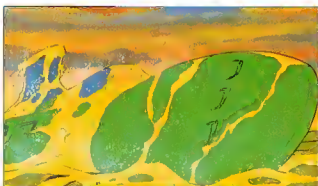


「なんで死んじゃったんだ！」

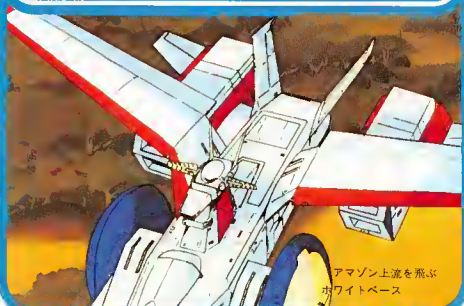


「ミハルがいなくなった？」
ブライト以下ホワイトベースの乗員は、打ちひしがれるカイを前に戸惑いを隠せなかった。密航者の存在を知っていたのはアムロだけだったからだ。
ミ、ミハル……い、いなくなっちゃまって……カイの脳裏にミハルの姿が去来した。どこからともなく彼女の声が響いてくる……あんたと会えてよかったと思うよ……ハハ……あの子達なら大丈夫さ……いつまでもこんな世の中じゃないだろう？ ねえ、カイ……
「なんで死んじゃったんだ！」
カイの絶叫を大空がのみ込む。

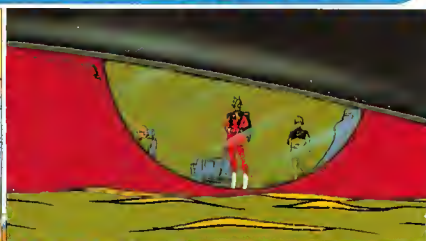
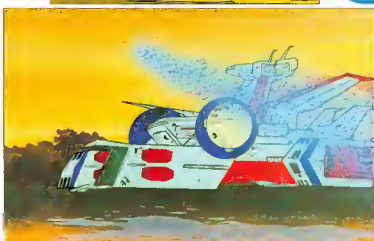
29話 ジャブローに散る!



ユーコンとマッドアングラーが浮上した。



アマゾン上流を飛ぶ
ホワイトベース



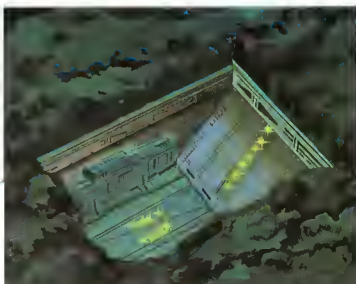
「チヨウチヨ チヨウチヨ
チヨチヨ チヨチヨ」



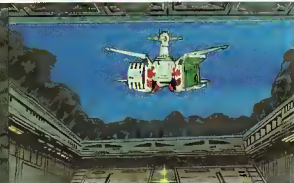
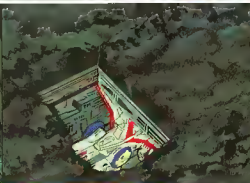
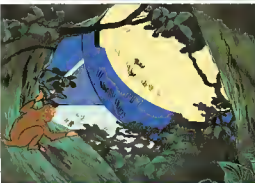
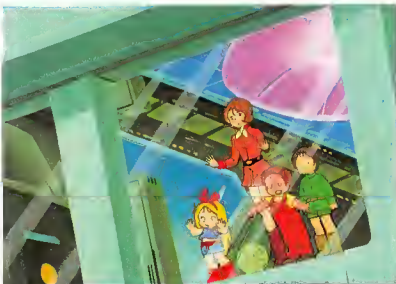
29話 ジャブローに散る!
「間違いないですね。木馬はジャブローに向っています。」
シャアのマッドアングラーはホワイトベースを追って、アマゾン川下流に浮上した。スパイ・一号、ミハルの情報通りだ。ホワイトベースの目的地はジャブロー、地球連邦軍本部だった。アマゾン支流を逆昇るホワイトベース。美しい羽をひらめかせたモルフォ蝶の群れがブリッジをかすめて飛び去って行く。心を洗われる思いでその光景をながめるアムロ達。そして、その美しさもカイ・シデンの深い悲しみをまぎらすことはできなかった。



ジャングルがスライドして、ハッチが……



「あつ／あれ……」



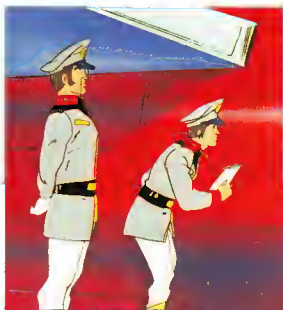
「ホ…… 薄陸完了」



「ついにジャブローの最大の出入口をつきとめたというわけか」

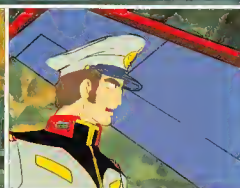


「ジャブローだったって、何も見えないじゃん……」
 チビちゃん達の目がくらませられたのも無理はない。ジャブローの基地は、巧妙にカムフラージュされた、ジャングルの地下の大空洞にあった。
 「フフフ……ついにジャブローの最大の出入口をつきとめたというわけか」
 光点の消えたレーダースクリーンを背に、手ぐすねを引くシャアであった。
 「消えた地点を中心に徹底調査しろノジャブローの基地もろともたきつぶしてやるノ」



「点検かかれーっ！」

「かなり痛んでますね。報告以上だ」



「彼がアムロ？」



「マチルダさんから？」

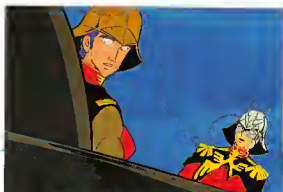


ホワイトベースは宇宙船用ドックにその身を横たえていた。ジャブローの技術陣の手で本格的な整備が始まるのだ。アムロは主任のウッディ大尉に呼び出される。

「君がガンダムのパイロットなのか……」

アムロを前にウッディ大尉は感慨深げにつぶやくのだった。

シャアは新型の水陸両用モビルスーツ・ゾックと、二機のゴッグを先発隊として出動させた。北米キャラフォルニアからの援軍が着



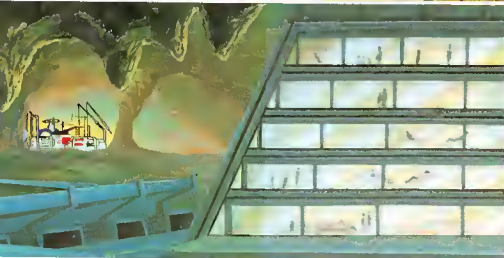
「見かけ倒しでなければいいが」



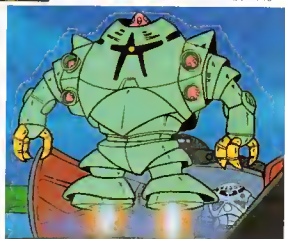
「使えるのか?」



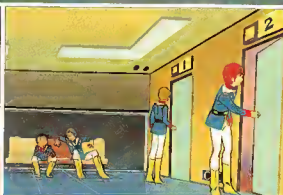
マッド・アングラーにソックが届いた。



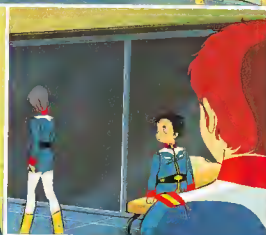
ジャブロー内の病院



「アムロのは特別長かったけど」



「オレは、身体強健、精神に異常なしだよ」



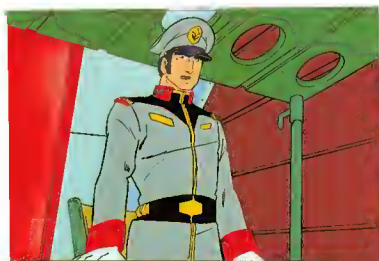
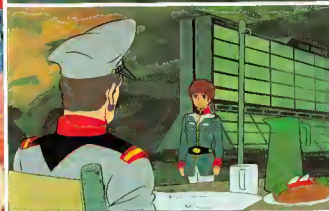
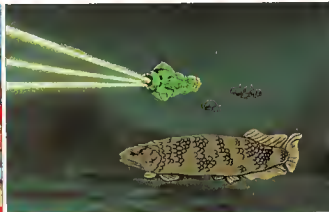
「カイさん……」



き次第、総攻撃が開始されるのだ。
さすがにジャブローの施設は立派だ。アムロ達は綿密な身体検査を受ける。アムロの検査はその中でも最も念入りに行われたようだった。身体強健、精神に異常なし……ミハルがああなったというに……カイは自分の体をうらめしく思った。



「その時は、ホワイトベースもジャブローにいらるだろうから式には出てもらおうと、マチルダは言っていた……」



「うぬぼれちんじやないノアムロ君!」



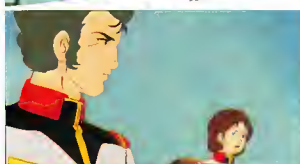
僕がもつと……



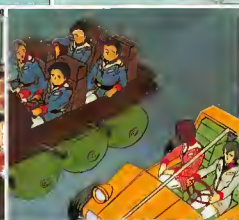
その夜ふけ、アムロはウッディを訪ねていた。ウッディはマチルダを知っているようだったのだ。「彼女とは……オデッサ作戦が終わったら結婚する予定だったんだ」ウッディは二人の夢を語る。マチルダを守りきれなかった自責の念がアムロを捕えた。「私はマチルダが手をかけたこのホワイトベースを愛している。だからこの修理に全力をかけている」ウッディの瞳は熱く燃えていた。ブライトとミライは、ジャブローの將軍達から今後の任務についての指示を受けていた。その時、基地に警報が響いた。ジャブローの入口が発見されたのだった。こちらから攻撃をしかけては、正確な位置を敵に知らせることになる。ジャブローの基地は沈黙して、敵の動きを待つしかないのだ。アムロ達は宿舎からホワイトベースへ向っていた。基地内には第2戦隊配置がしかれているが、自分達にできることは他にないのだ。



「見つけたぞ。ジャブローの入口だ…」



「気にするな少佐」「しかし」

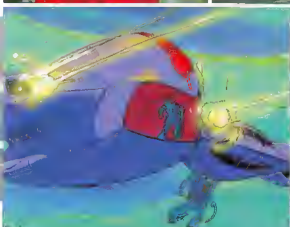
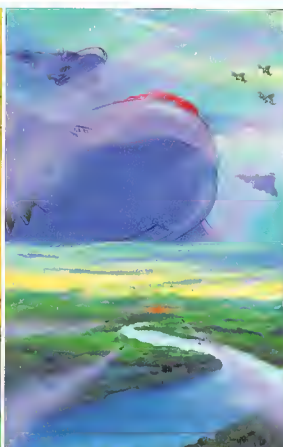


ジャブローに近づく

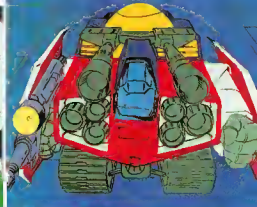




「ミハル、もう俺は悲しまないぜ…」



「あれはジムです。ガンダムの生産タイプです」



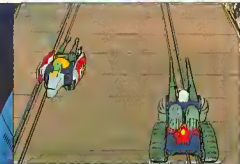
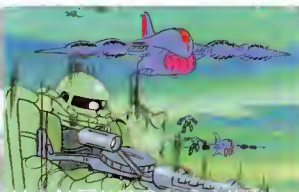
シャアはキャルフォルニア基地からの援軍を率いて、ジャブロー上空に現われた。ガウ攻撃空母の編隊だ。第一波の攻撃としては少なすぎるが、今日のところは基地に穴をあけることだけでいい。それと…ホワイトベースだ。

「発光信号確認！」

ガウの機体からミサイルが連射され、ジャングルに突き刺さる。すかさず迎撃するフライマンタ。ブライト以下ホワイトベースに戻った少年達も臨戦体制に入った。Gフル、タンク、キャノンが出動する。カイの心にも、もう弱さは

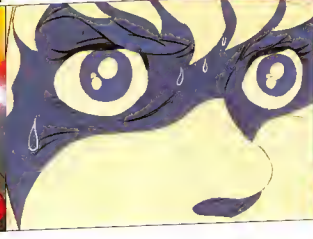
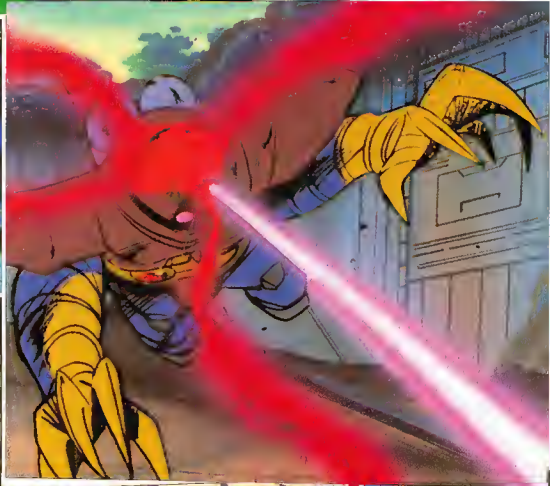
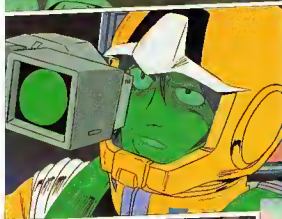
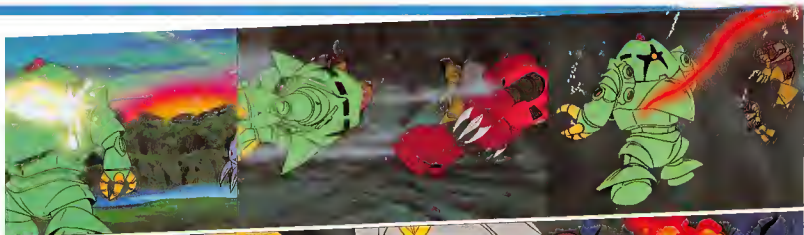


降下するモビルスーツ部隊



ない。ミハルのような子をふやさせないためにジオンを叩く、彼の心を静かな怒りが支配していた。ガンダムの量産タイプ、GMも実用段階に入り、侵入する敵を待つ。ガウのハッチが開いた。次々とジオンのモビルスーツ隊が降下を開始する。シヤアも自ら赤いズゴックに乗り込んでいた。ジャブロー基地からの対空砲火も厳しい。モビルスーツの大半は降下中に撃ち落されていった。弾幕をくぐり抜けたシヤアのズゴックは、潜水後先発隊と合流すべく川を逆上る。ホワイトベースは一向に作戦本部からの情報が入らない。宇宙船ドックの入口で敵を待ちかまえるアムロ達にも手の打ちようがなかった。

「ミハルのかたきも討てねえのかよ…」





シャアは先発隊と合流、ドックの二つの入口から両面攻撃をかけた。アムロ達の前から二機のゴックが。上流の入口からはシャアのズゴックとソックだ。怒りにまかせたカイのビームライフルが一機のゴックを撃破した。アムロとセイラのGプルは、その場をカイ、ハヤトに任せて、上流から侵入した敵に対するため、ガンダムにチェンジした。通路に降り立つガンダム。間の向うの敵に攻撃をかけているホバークラフトがある。無茶な。そのコクビットにウッディの姿を認めたアムロは直感した。マチルタの後を追う気が？

しかし、それ以上にアムロは敵のモビルスーツにど胆を抜かれていた。その色：赤いモビルスーツ。ザクではないものの、あの男以外に赤いモビルスーツを使うものなど：シャアじゃないのか？二台の戦車をたちどころに料理した。そのズゴックは、接近してきたGMに躍りかかった。早い！一撃でGMは倒れる。アムロの全身に鳥肌が立った。

「ま、間違いない…や、奴だ！奴が来たんだ」

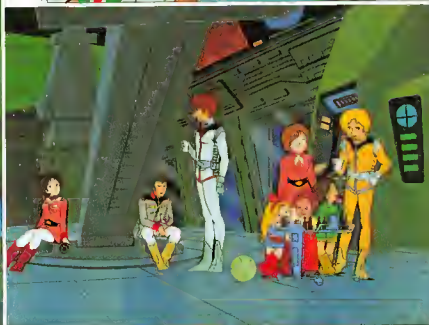
赤い彗星とガンダムは、今ここに再び対峙していた。ガンダムのビームライフルが火を吹く。ズゴックの爪が風を切る。今やアムロは、シャアと互角の戦闘を行っていた。その時、ウッディのホバークラフトが、二つのモビルスーツを分けて、突っ込んできた。



「冗談ではない」
 ズゴックの腕の一振り、ホバークラフトのcockピットは打ち砕かれていた。しかし、ウッディの捨身の攻撃により、ズゴックはモニターを潰された。唇を噛んで退却するシャア。シャアの退却を防ぐゾックを、ガンダムは一撃で射ち落した。シャアの動きに慣れた目には、ゾックのビーム砲をかわすことさえ易く思われた。シャアは逃したものの、敵は殲滅された。ジャブローの損害も大きかった。



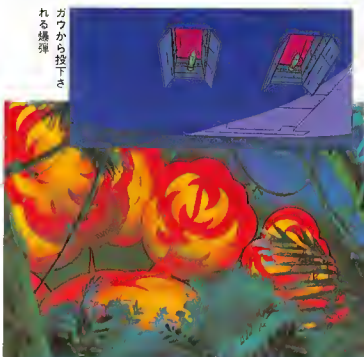
「ジャブローまで追いかけてくるのか、
シャアは……」



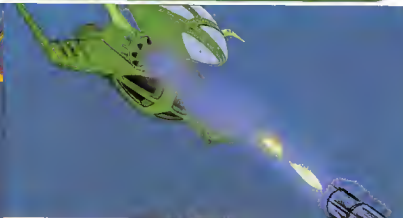
「ウッディ大尉が死んだのか」
「はい……僕ら以上にホワイトベ
ースに愛着があったようです。」
戦いが終わったホワイトベースの
ブリッジで、アムロは静かに語っ
た。シャアが帰ってきたと、セイ
ラの手からすべり落ちたグラスが、
床ではじけていた。

30話 小さな防衛線

ガワから投下される爆弾



ジュン・4・4の反撃



ドップの攻撃



アツガイにつぶされるトーチカ



「まったく異常なし！」

「あー」

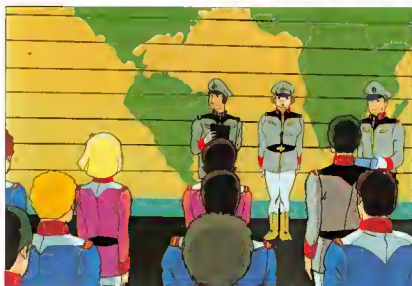


ジャブローのトーチカ



30話 小さな防衛線

ジャブローに対するジオンの定期攻撃は、今日も行われていた。連邦軍の警備兵もすっかり慣れたもので、少々の爆撃では焦らない。しかしポイントD1-3では、それが災いした。ジオンのモビルスーツ5機が密かにこの哨戒所を破壊し、宇宙船ドックへ通じる空洞へと潜入したのだ。モビルスーツ隊を率るのはシャアであった。ジャブロー基地内の一室では、アムロ達に階級章が渡されていた。ブライト・ノア中尉、ミライ・ヤシマ少尉、セイラ・マス軍曹……「僕らはいつの間にか、軍人にさせられてしまつて……」



連邦軍基地

「定期攻撃か……ま、心配する必要はない」



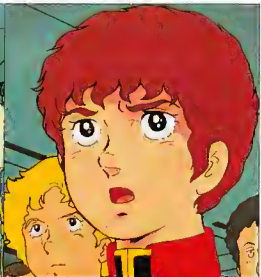
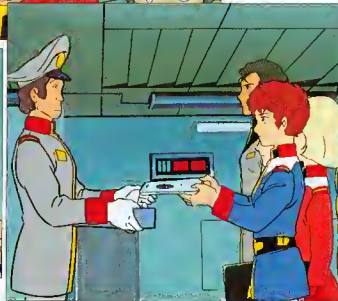
ホワイトベースの編成は現行のままで、所属はデアンム陸隊の第13独立部隊と決まった。



辞令を受け取るブライト



「何の役に立つんだろう？」



「アムロ・レイ曹長ノ」「はい」



「あの子たち、育児センターへいくのどうしてもしやだといっ……」

「やだもん、どこもいかないもん!!」



リュウの最後の姿が浮かぶ



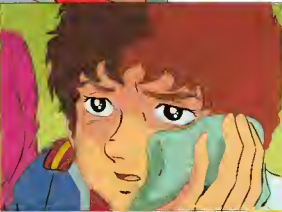
「二階級特進？」



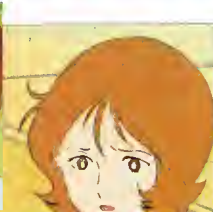
「よけたら独房入りだぞー!!」



「そうかよね」



「小さい子が人の顔し合いみるのいけないよ」



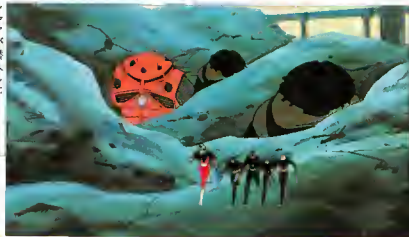
アムロの心は重い。その想いを逆なでするように文官の声が響く。名譽の戦死をとげたリュウ、その他には二階級特進が与えられる。それだけ？アムロは、我知らず文官につめ寄っていた。

「戦ってる時は何もしてくれないで、階級章だけで……リュウさんや他の人にありがたの一言ぐらい」

ブライトが止めに入ろうとした時には、アムロの頬を文官の拳が捕えていた。そして、ホワイトベースは、チビちゃん達の問題も抱えていた。ジャブローに残りたくない、と言う。チビ達と別れるつらさに、フラウは沈んでいた。



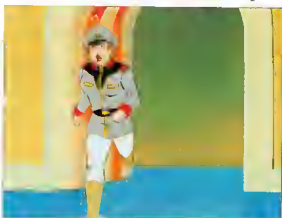
シャアが潜入した



育児室で遊ぶ三人



「無邪気なもんだなみんなノ」



「お姉ちゃん。あたい帰る。船に帰るーノ」



「今ね、戦争だよノ」



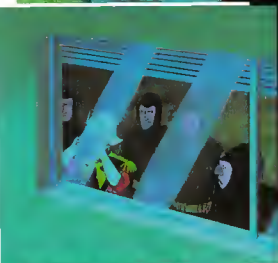
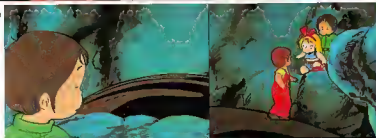
「あつ来た」逃げよう」



シャアのモビルスーツ隊は、ゲリラ戦法をとうとうしていた。爆発物専門の特殊工作隊だ。モビルスーツから降りた彼等は黒装束を絡い、地下へと消えて行った。カッ、レッツ、キッカの三人は、ジャブローの育児室で楽しい一時を過ごしていた。遊ぶものは何でもある。しかし、育児室に入っている他の子達は、みんな淋し気な顔をしていた。この子供達も、誰もが父や母に会いたがっているのだ。とうとうキッカが泣きだした。船に帰る！ノ彼等にとつては、すでにホワイトベースが家となり、家族となっていたのだ。三人は育児官の目をかすめて逃亡を開始した。ホワイトベースへ。育児官はあわてて追いかけたものの、すでに三人の姿は闇にまぎれていた。「もどつてらっしゃいノきこえないの?!お返事してくださいノキッカちゃんノカッ君ノレッツ君ノ」

「あつ来た」逃げよう」

「待て、子供のようだ」



「連邦軍もここまでこぎつけたか……」



「あつ、足人とニッ」



「しまったあ」



崖をすべり降りる三人組。ホワイトベースへ。三人の目標はそれだけだった。崖影に身を潜めているモビルスーツ・アツガイを橋がわりに谷を越えた三人は、休憩をとろうとGMの工場に入ってしまった。その時、間の中に動く人影がノチビちゃん達の前に立ちちはだかったのは、ジオンの工作員だった。「気持ちにはわかるけど、つらくなるわよ、フラウ」

もう一度チビちゃん達の顔を見たい！ミライとフラウは青児室に車を走らせた。と、行き会ったのは青児官。三人が脱走したと言うのだ。



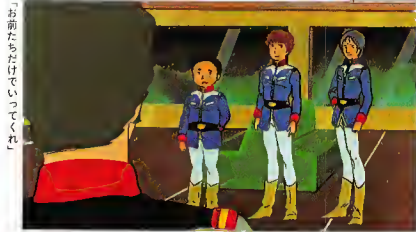
「悪く思わんでくれよ坊や」



「ブライト中尉、作戦会議室へ至急集合だ」



「やっと許可がおりたよ」



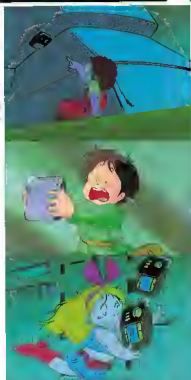
「お前たちだけでいいってくれ」

「悪く思わんでくれよ坊や達」
三人は縛り上げられ、工場の隅に放り出された。爆弾は30分後に爆発するという。さるぐつわをはずそうともかくカツ、レッツ、キツカ。キツカの足がレッツのさるぐつわを取った。
「ば、爆弾がーッ」
レッツはカツのローブを歯でくいちぎろうと、かぶりつく。
アムロ達は、GMの工場の見学許可をとって、出発しようとしていた。作戦会議室に呼び出されたブライトは居残りをくい、アムロカイ、ハヤトの三人がバギーに乗っていた。

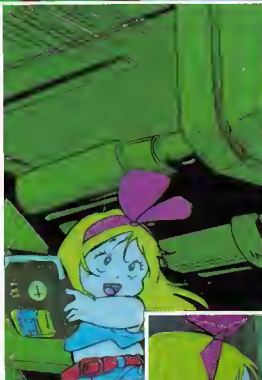
「早く爆弾をはずすんだ」



次々に発見される爆弾



「これでしょ爆弾でッ」



「ためだよ、どこにもないよ」



「やった。かかったぞ」



「ぼー早く爆弾を探すんだ」
カツ、レッツ、キッカは、ロープ
をほどくと大車輪で爆弾を探し始
めた。

「あつたー」

「あーッ、どこにもあつたー」

爆弾をとりはずす小さな手。三
人の活躍で、たちまちバギーに爆
弾が山積みされた。レッツの運転で
爆弾を乗せたバギーは、工場のシ
ヤッターをぶち破って走り出す。
アムロ達のバギーがそれと行き違
った。なんでカツ達がこんなところ
に？アムロ達は後を追う。



「アムロ、本当らしいぜ、超弾だ！」



「ようし、上出来だ!! アムロいいぞ」



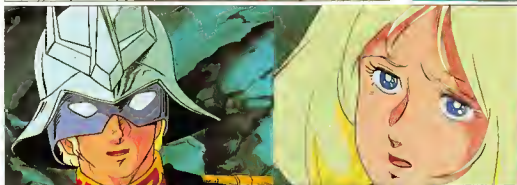
失敗したシヤアは説出する



「ジオンが、ば、爆弾をしかけたの、すてに行くの!」
本当らしい。アムロは走るバギーからバギーへと飛び移った。カイがチビちゃん達を、一人ずつ自分達の車に引っぱり込む。アムロは絶壁にバギーを疾走させた。寸前で飛び降りる。崖から落下してゆくバギーは、谷に着く前に大爆発を起していた。ホワイトベースが危いノ直感がアムロにそう教えた。アムロの連絡により、シヤアの工作隊の動きは事前に阻止された。シヤアは待機させてあるアツガイを呼び出し、追手の注意をそらす。岩影を走り抜けようとしたシヤアは、子供の名を呼びながら走ってくる連邦軍の女兵士に出くわした。



「……
やはり」



「軍から身を引いてくれないか？」

「まさか、ジオン軍に入っているなんて」



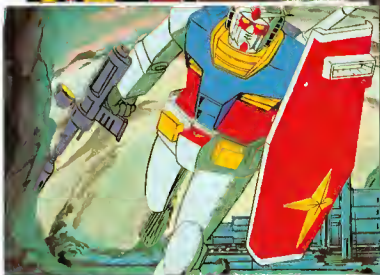
「……アノアルティシア……」
立ち止ってふり向くセイラ。岩の上に立っているのは、いつかサイド7で遭遇したジオンの兵士……そう、彼女の兄であった。
「ま、まさかジオン軍に入っているなんてノやさしいキャスバル兄さんなら……」
「軍から身を引いてくれないか？ アルティシア」
その時、シャアの姿を見た、ミライの拳銃の音が。身をひるがえしてシャアは去って行った。駆けつけたミライに対し、セイラはジオン兵に気付かなかったふりをし通すのだった。

「この岩の上にジオンの士官が……」

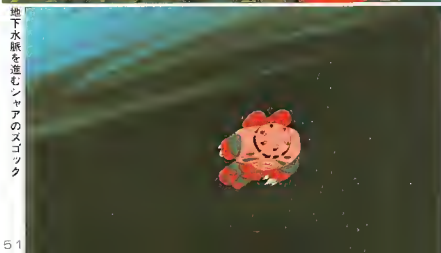
「シャア大佐」
「かまうな全員脱出する」



追いかけるガンダム

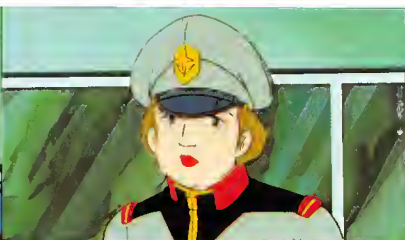


スゴックの右腕が……



シャアのズゴック以下、四機のアッガイは急ぎよ撤退を開始した。アムロのガンダムがそれを追う。連射されるビームライフル、突き出されるサーベル。猛威をふるうガンダムの前に、アッガイは次々と倒れ、シャアのズゴックも右腕を落された。ガンダムの成長の前にさすがのシャアも焦りを隠せない。その時、シャアは目前に巨大な地下水脈を発見していた。ズゴックはふり向きざまミサイルを発射。ガンダムの頭上の岩盤を崩した。岩の雨の中、アムロはまたもシャアの姿を見失っていた。

地下水脈を進むシャアのズゴック



「ここにいれば安全であることは……」



「手続きは、私がなんとかしてみます」



「よかったよかったね、みんな」

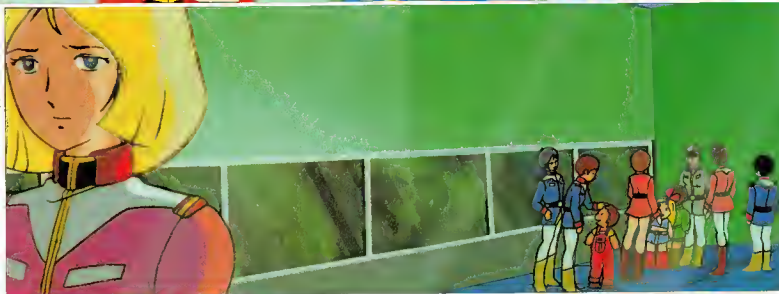


「ジオンも連邦軍もない世界
だて来るかも知れないでし
ょう。」





セイラひとりには寂しそうだ。



ジャブロー作戦会議室

「第13独立部隊というのは……固り専門ということなのですか……」



「あなたがたの気持は分るわ。でも……ここにいれば、安全であることはまちがいない。それに子供達は連邦軍の未来を背負うものとして大切に育てられるんですよ」
 連れ戻した三人を前にして語る青児官。アムロはそんな青児官にこう言うのだった。……この子達が生きている間に、ジオンも連邦軍もない世界だって来るかも知れないでしょう?……青児官はそんな彼等に対し、チビちゃん達をかえさざるを得なかった。
 その頃、地球連邦軍本部は、シヤアのゲリラ攻撃等の理由によって宇宙戦略を急ぐことを決定した。提督たちは考えたのである。ホワイトベースの実力をジオンは高く評価している。これは固りとして絶好である……

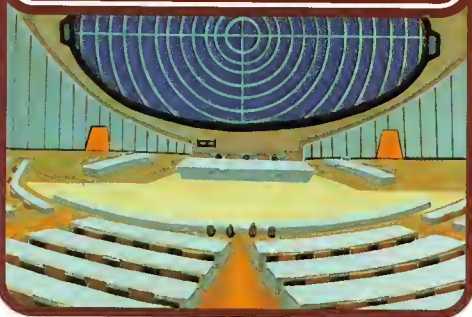
31話 ザンジバル、追撃!



「2時間も前にでありますか?」

顔を見せる二人

「ティアンム艦隊は、21時に、ここジャブローを発進。そこで、君たちホワイトベースは、その2時間前に発進してくれたまえ」



「ティアンム艦隊はまっすぐにルナツーに向わせるから、ホワイトベースは反対の人工衛星軌道にのってゆく……」



「ホワイト・ベースは一時間後にここを出発する。」



「フィアンセといったって、親同士の話よ」



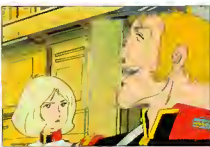
「ハッノ ホワイト・ベース、本日19時をもって発進致します」
「フィアンセがいったけかな?」

31話 ザンジバル、追撃!

ホワイトベースはティアンム艦隊の第13独立機動部隊に配属された。その主任務は：四である。ブライトとミライは参謀室で最終的な作戦展開の説明を受けていた。ホワイトベースは本隊の発進より二時間前にジャブローを発進、本隊と逆の衛星軌道に乗る。その後コースを変え、ジオンの宇宙要塞ソロモンを叩きにゆく。ゴッパ提督の口調は軽かったが、非常に危険な任務であった。ゴッパは立ち去り際、ミライのフィアンセについて口を滑らす。戦争を避けるためにサイド6へ逃げたとか：フィアンセについて、ブライトに語るミライは言葉にこした。

「よお、ホワイト・ベースの責任者は誰だい」





「あんな男の人のことで悩んでいる相がでているよ」「え？」



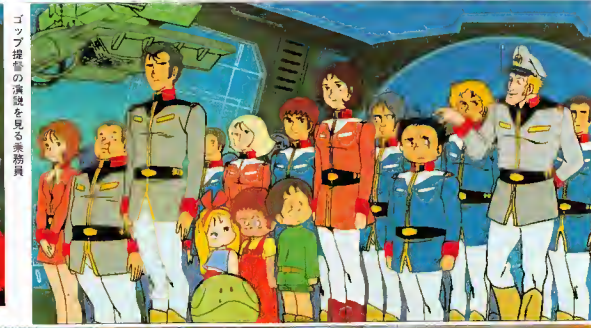
「よろしく。ミライ・ヤシマです」



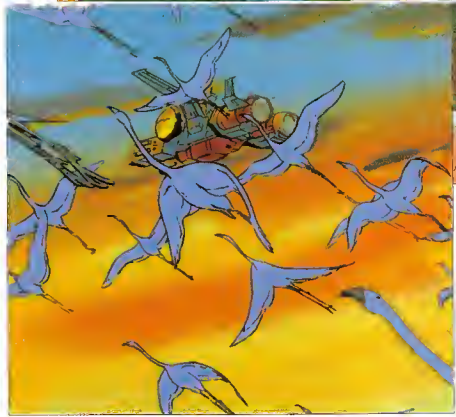
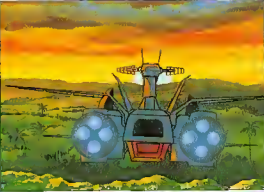
「スレッガー・ロウ中尉だ。今日づけで、こっちに転属になった」



「発進だ！各員持ち場につけ！」

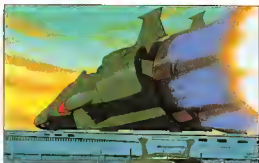


「うわあーノ、トイダー！」



「スレッガー・ロウ中尉だ。今日づけでここに転属になった。」
 ホワイトベイスには、新たな隊員も加わっていた。ジャブローのやっかい者を押しつけられたか？
 軽薄な態度のスレッガーは、ブライトとはソリが合いそうもなかった。
 「上空クリアーノハッチ開け！」
 ジャブローの空の朱が、ホワイトベイスの船体にはえる。
 「手のあいている者は左手を見ろノフラミンゴの群れだ」
 その白く優美な鳥達は、ホワイトベイスを見送るのかのように飛ぶ。

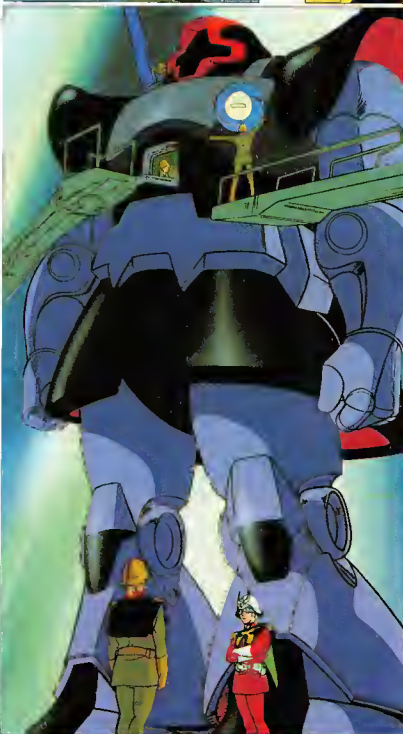
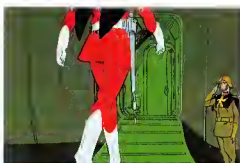
「手のあいている者は左手を見ろノフラミンゴの群れだ」



「ハアノ南米のジャブローを
発進したようでありす」



「木馬はどうなっているかノ
トクワン大尉」



「パイロットを導めろノ 木馬が、どこに向うか判った処で遠撃せよ」

発進用ブースター・オフ



「30分程度で戦闘圏内に入れます」

「このモビル・アーマーのビグロなら、高速戦闘力に関しては、モビル・スーツなどものかずではないという話です」しかし、一機では作戦はできません」



そしてそのホワイトベースの動きを、シャアが見逃す筈はなかった。モビルアーマー・ビグロの実戦テストを準備していたザンジバルで、急遽ホワイトベースを追うシャアであった。

モビルアーマーは、ジオンが局地戦用に開発した巨大兵器である。ビグロは、宇宙空間での高速戦闘用であった。その機動力は、モビルスーツに数倍するという。今、シャアの乗るザンジバルには、そのビグロの他、陸戦用のモビルスーツ・ドムを宇宙戦用にパーニアをパワーアップさせた、リック・ドムが二機、テスト中止のモビルアーマーが、一機各々搭載されていた。



「追いかけてくるのは、どうもザンジバルクラスの戦艦ですね。このままですと20分で追いつかれます」

「シャアがでてるわ、必ず……来る」

「木馬は図だ、今ごろ南米からは別の艦隊が発進していることだろう……」



「どう思う？ミライ？」「疲れているんですよ？ それで、おびえているのよ」



「木馬の推定コースが出ました。このままですと月へ向います」

ザンジバルから出撃するビクロとリック・ドム



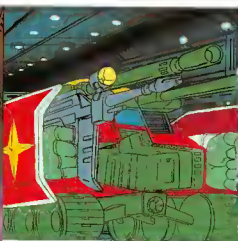
「ザンジバルをキャッチしました！……このままなら、2分20秒後に直撃がきます」

「トクワン以下、一名発進します」



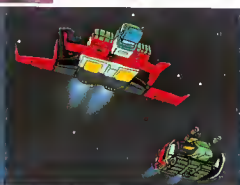
ホワイトベースは、ザンジバルの追撃をキャッチしていた。プライトは敵の目をあざむく為、月へ向うコースを指示した。木馬の推定コースは月。それを聞き、シャアはホワイトベースが囮であることに気付く。今頃は別の艦隊がジャブローを発進しているだろう。しかし、ここで背中を見れば、今度はホワイトベースが攻撃してくる。シャアは、この機会に一気にホワイトベースを沈める作戦に出た。ザンジバルからビクロと二機のリック・ドムが発進する。実戦がそのままテストを兼ねるのだ。トクワン大尉の操るビクロはホワイトベースに迫る。

「もし、ザビ家に対してかたきを討つためなら……そんな生き方……私には認められない……」



セイラの乗るGブル・イージー

Gスカイに飛び込むアムロ



「もっと離れて下さい。このまま直撃を受けたら2機ともやられてしまいます！」



「Gスカイ発進」



「回避運動いそげ！ ビーム砲ノ後方ミサイルノ迎撃いそげ！」



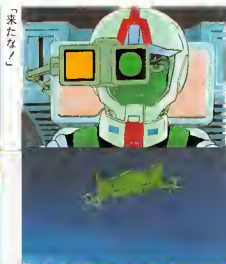
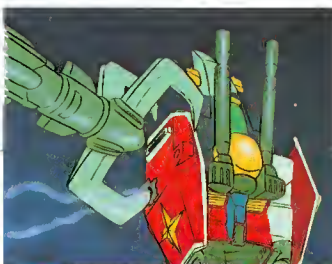
「きたっ！」

「もし、ザビ家に対してかたきを討つ為なら……そんな生き方……私には認められない」

セイラの心はまだ乱れていた。しかし、敵の接近は速い。アムロのGスカイが発進。セイラのGブル・イージーも続く。

セイラはスコープの中に、ビッグロの影を捕えた。しかし、引金を引こうとした時、すでにビッグロはGブルの頭上をすり抜けていたのだ。速いノターンしたビッグロは、その巨大な爪でGブルの盾の部分をつっかけていた。パワーもモビルスーツとは桁違いだ。しかし、この角度なら、ビーム砲の砲口がビッグロに向いている。しとめられる。引金に指をかけたセイラの顔を、シャアの影がかすめた。

ビクローのツメにひっかけられたGブル・イージ



放りなげられたGブル・イージ

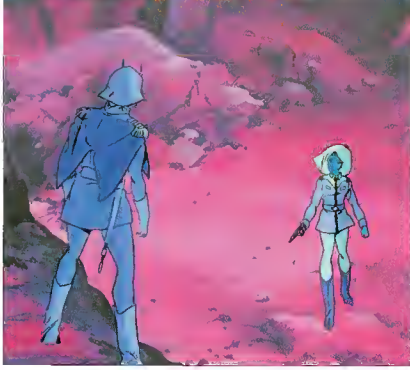


「ま、まさか……このモビルアーマー。兄さんがパイロットだなんて……」

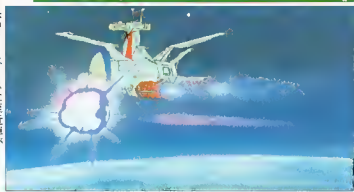
「しかし、まさかとは思うが……民間人があのまま軍に入つて、木島に乗り込むなぞ……」



「じゃあ、やらねえ。当てる自信がねえからよ」



ホワイトベースに至近弾が……



「ま、まさか……このモビルアーマー、兄さんがパイロットだなんて」
セイヤがためらううちに、Gブルはビクローに放り出されていた。
ズン／機体にかかる。Gブルは、重力に引かれ、地球の夜の部分へと降下して行った。
対ザンジバルに備え、ブライトはスレックを主砲に回させた。
しかし、ホワイトベースを敵に向けねば、主砲座にはつかないとスレックは拒否するのだった。
ザンジバルで指揮をとるシヤアもまた、妹の影に心を曇らせていた。もしアルティシアがホワイトベースに乗っていたら……。



「中尉！一言いっておくが、あなたは私より年上だが、指揮権は私にある。それを……」

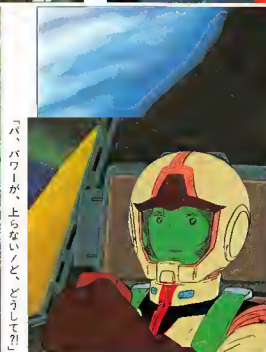
「うおっ！／＼めんよ。湯気じゃないんだ」

「よし／＼あと三秒で砲撃中止／＼あ／＼」

「だから頼んでいるんだ。ホワイトベースの主砲を使えるように、はいと／＼ころまわれ右をしてくれと／＼」



ビッグロのミサイル攻撃に苦戦するGスカイ



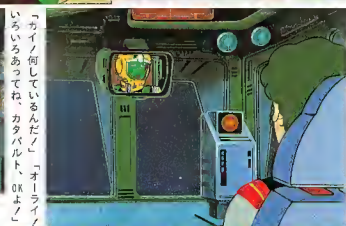
「バ、パワーが、上らない／＼、どうして?」



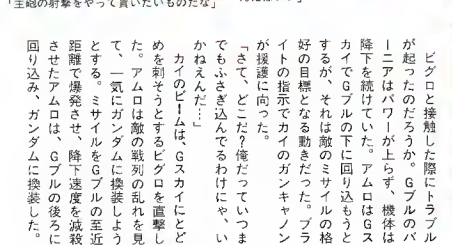
「主砲の射撃をやって貰いたいものだな」



「クク……いいねえ。ブライト中尉。あんたはいい」



「カイノ何しているんだ／＼。オーライノ。いろいろあつてね、カタバルト、OKよ」



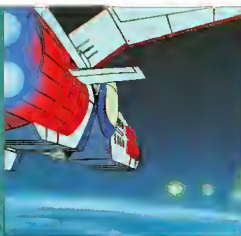
ビッグロと接触した際にトラブルが起つたのだろうか。Gブルのパニアはパワーが上らず、機体は降下を続けていた。アムロはGスカイでGブルの下に回り込もうとするが、それは敵のミサイルの格好の目標となる動きだった。ブライトの指示でカイのガンキャノンが援護に向った。

「さて、どこだ？俺だっていつまでもふさぎ込んでるわけにや、いかねえんだ……」

カイのビームは、Gスカイにどこめを刺そうとするビッグロを直撃した。アムロは敵の戦列の乱れを見て、一気にガンダムに換装しようとする。ミサイルをGブルの至近距離で爆発させ、降下速度を減殺させたアムロは、Gブルの後ろに回り込み、ガンダムに換装した。



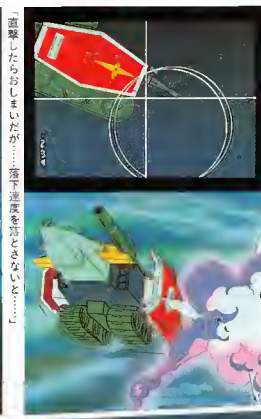
「ホワイト・ベース180度回頭ノ対艦砲撃用意ノ」



「よくやれると思うよ。セイラさんもアムロもよ……」

向きを変えたホワイト・ベース

発進口に固定され砲台となったガンタンク



「滅亡したノよし、ドッキングに入るノセイラさん、たのみます」
「ええノアムロ、悪いだね」

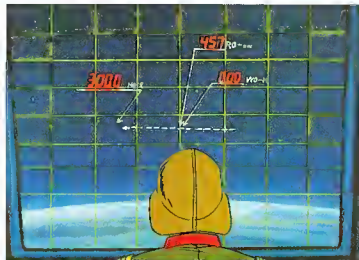
「直撃したらおしまいだが……落下速度を落とさないとい……」

「圧倒的に、こちらのものだノ」

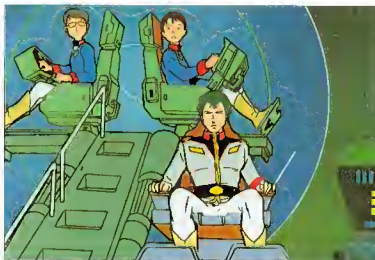
「カイさんかノよし、この間にガンタムに換装させてもらうノ」

「ア、アムロノ」「大丈夫ノなんとかしますノ」

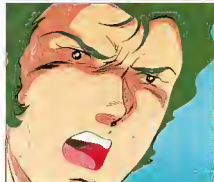
「三十秒で有効射程距離に入ります！」



「モビルスーツの戦いは高度が下がってます。砲撃に入れます！」



「ミサイル連続発射だ！」



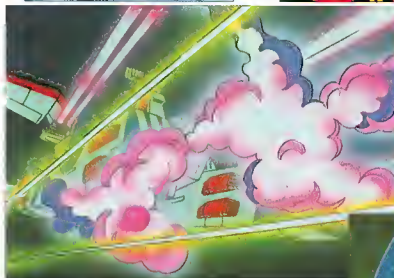
「このホワイト・ベースの主砲の威力がどのくらいか知らんが……まあみていろ」



「本馬の射程距離と、どちらが長いかわかる、か……アルティンア、乗っていないだろうな」



「まだ撃たせるな！ ひきつけて撃つ！」



「うーむ。ようしノよく我儘したノ撃てー！」



「ザンジバルノよけませんノつこんでます！」
「なんだノミライノ右へ逃けろ！」

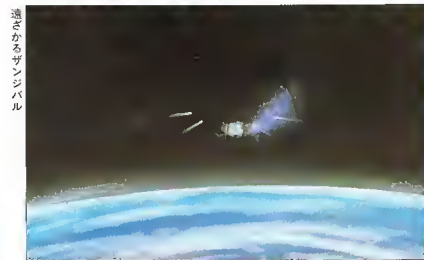
モビルスーツ戦の高度が下ったことを確認したブライトは、ホワイトベースを一八〇度回頭させ、ザンジバルに向けた。主砲座ではスレッガーが手ぐすねを引く。両艦の距離がちまる。シャアはホワイトベースにぶつかるともりでザンジバルを突っ込ませた。それを知り青さめるブライト。
「シャアだノこんな戦い方をする奴はシャア以外にない！」



「どうだ！俺の乗っている艦に、突放なんか、かけるからよ！」



すれ違うホワイト・ベースとザンジバル！



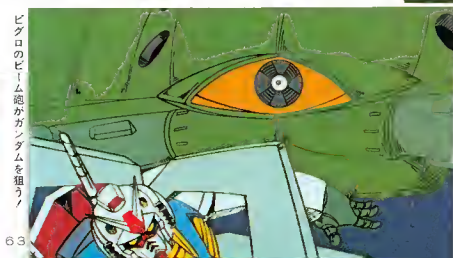
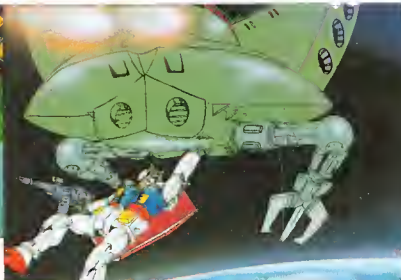
「逃げるものか！」



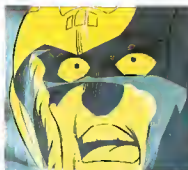
あと一機のドムは？ガンダムは？」



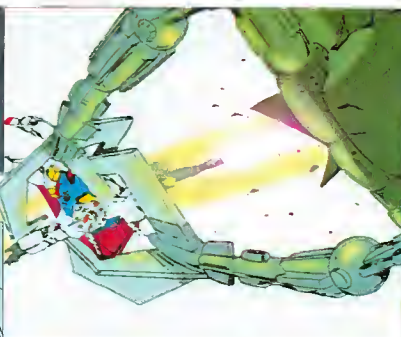
「ん!!附属物がついたぞ！まさか、ガンダムが？い、いや、もし、つかまったら、加速度のショックで、パイロットは気絶しているはずだ」



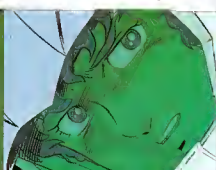
かすめるようにして両艦が行き違うせつな、スレッガーの主砲の一撃はザンジバルの装甲を打ち抜いていた。飛び去るザンジバル、Gファイターを操るセイラは、苦戦しつつも一機のリック・ドムを倒していた。ガンダムは、ビッグロの高速の前に、思うように手が出ない。両者が接触した瞬間、ガンダムはビッグロにしがみついていた。しかし、過度のGはアムロを失神に追いやる。ビッグロの爪でガンダムを捕え、ビーム砲の餌食にしようとするトクワン大尉。



「な、なぜだ!? パイロットは平気なのか!」



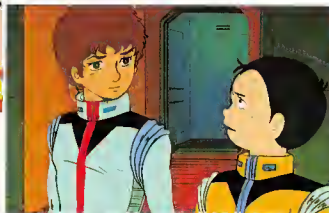
ビームがビグロに直撃する



「う……そ、そうか!」



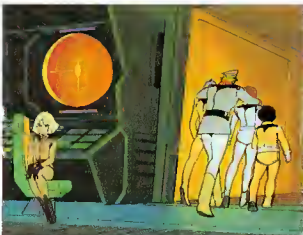
「トクワンが沈められた……」「シャア大佐 / 私に出撃させて下さい」「あせるな。奴らは我々の庭にとび込んだビヨコだ」



「恐かったよ。サンジバルとすれ違った時はさ……。あーや、シャアの戦法だな……」



「まず第1段階は成功だな」「そうね。サンジバルの目はくらませたはずよ」



「よう / シャワーでもあびさせてもらうぜ」「五分間、だけならな。ジオンはまたすぐに来る」



「いやー、尊敬しちゃうよ。セイラさん。モビルスーツ機撃壁 / たいしたもんだ」「そんな……やつのことよ」

「まず第一段階は成功だな」
これでサンジバルの目はくらませた筈だ：ブライトとミライは胸をなでおろしていた。
「スレッガー / 中尉さすががすね。直撃はあなただけでした」
スレッガーは、いざとなるときほど自慢めいた口調にはならないようだ。軽くうけ流した彼は、アムロ達をさそって、バスルームへと降りてゆく。
身も心も疲れ果てたセイラは、シートに体をもたれさせた。このままでは、兄と殺し合いをしなければならぬ……苦しい思いが彼女を満していた。

「危機一髪」アムロの意識は突如として戻った。常人とは思えぬほどの速さで……。ビグロのビームをかわしたガンダムは、ライフルでビグロの機体を射抜く。信じられぬという表情を残しながら、トクワン大尉は宇宙の塵と化した。リック・ドム一機は後退、ホワイトベースの危機はともあれ回避された。



32話 強攻突破作戦



「また一機、接近するモビルスーツあります」



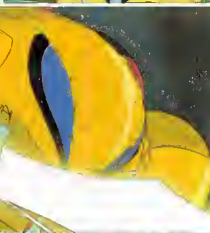
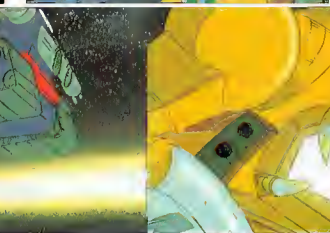
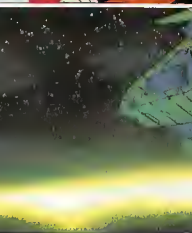
「フラウ・ボウ、一機か、二機発進させるの、ハヤトですか？」



「こちらでも考えていることがある、ハヤトには先に出てもらってくれ」



「ガンタンク、発進用意させます」



32話 強攻突破作戦

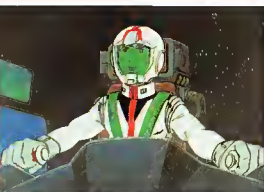
「援軍ですかね。また一機、接近するモビルスーツあります」
 ザンジバルが去って、一時の平静が保たれるかと思えたホワイトベースではあったが、オヘレータは早くも新たな敵をキャッチしていた。ブライトは、パイロットの中で一番体調のよいハヤトを送り出す。ブライトには、宇宙に出てからのセイラの様子があったならぬことも気掛りであった。
 トクワンの部下デミトリが自分の命令を無視して出撃したことに、シャアは怒りを隠せなかった。しかも使用しているモビルアーマーはテスト前に放棄されたものだという。

「ここは我々の庭だといった。……気がすんだらデミトリには早く戻らせろ」





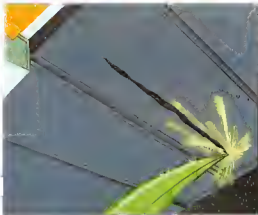
「ミ、ミサイルもあるのか!」



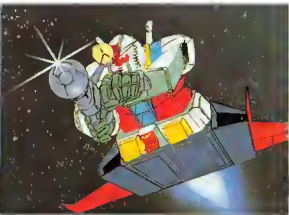
「早いな、先刻のと違うのか?」



G パーツをはいたガンダム



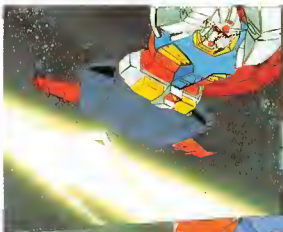
ザクレロのツメが……



「ハヤト! 保ってくれよ」



「モビル・アーマーのでせこないなんぞあと一撃で!」



「バカめ! 同じことをやる!」



アムロはハヤトの後を追うように、GメカのBパーツを取り付けたガンダムで出動していた。ガンダムを一種のモビルアーマーに変える、Gメカの応用型だ。ハヤトのガンタンクは、敵モビルアーマー・ザクレロの拡散ビーム砲に手を焼いていた。その戦闘に割って入るガンダム。ザクレロの鎌に損傷を与えられたものの、アムロは一撃のもとにザクレロのエンジンにサーベルを打ち込んでいた。ガンダムのコンピュータで簡単に動きがよめるなんて……アムロには敵の意図が分らなかった。手傷を負ったガンダムの修理を急がせるアムロのもとに、スレッガーが訪れた。当面の敵は倒したし、そんなに焦る必要はなからうと言う彼に対して、アムロはシャアの恐ろしさを語った。

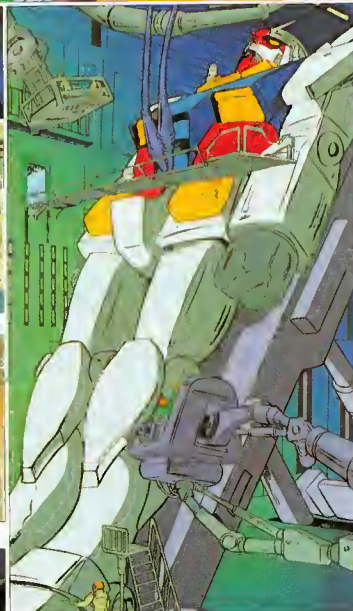
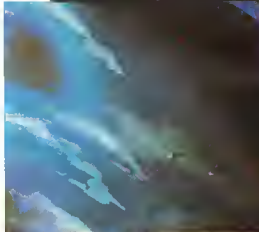


「アムロ、きこえて？
ル・アーマーの撃破確認。急いでひきあげて下さい。」

「エンジンを直撃できたはずだ」



もどるガンタンクとガンダム



「ブリッジでも二言目には、シャアだな。そんなにすこいのかよ？」

「どうした？ たて続けの出撃で疲れたのか？」

「……（アムロ）兄さんか……」



「生意気だね、お前！」「はい」



「キヤメル艦隊と交信できるのか？」はい、航路をコンニューターレーズしていますから大丈夫です

「会ってみたいものだ。そのシヤアにさ」
ドアが開いてセイラが入って来た。ニは自分が見ているからと、彼女はアムロ達を待場に引かせた。アムロとスレッガーが出てゆくのを確めると、セイラの口元から笑みは消えていった。
「……フ……」
「……フ……」
ガンジバルは、小破した装甲の修理を急ピッチで進めていた。シヤアは、ホワイトベースの進路が、かつての部下ドレン大尉のパトリックとぶつかるのを見てとった。

「私を誰だと思ってるのだ？」



「あい変わらずだな、ドレン」

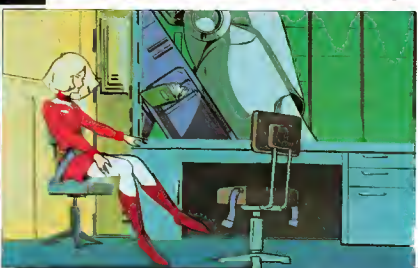
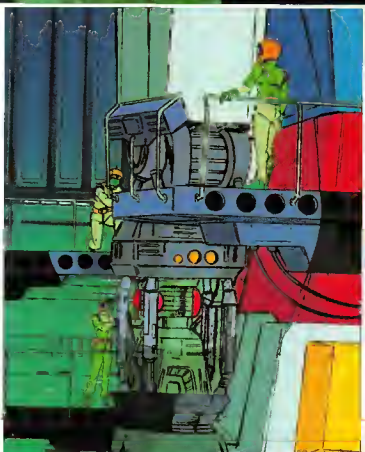
「デミトリーの件、申しわけありませんでした」
「マリガン、この埋め合わせは、いつかしてもらおう」



「木馬を追撃するぞ」

「申しわけありません、大佐」

ガンダムを直すメカ・マン



レーザー交信でドレンとコンタクトをとったシヤアは、ドレンのキャメル艦隊とザンジバルで、ホワイトベースをはさみ撃ちするという作戦を指示した。ドレン大尉のムサイタイプ「キャメル」は、「スワメル」「トクメル」の二隻をしたがえ、ホワイトベースへコースを向けた。
兄が恐ろしい形相で何か怒鳴っている。だが、その顔とうらはらに、何と優しい声で語りかけてくるのだろう、兄は……。
「アルティシア、私はザビ家を許せないのだ。私の邪魔をしないでくれ……」



「私は、認められない、兄さんのやり方」



「私があなたみたいならね……」



「おかしいですよ、急に……」

「セイラさんは今でもいいバイ「TC17」のブロックも取り換え
ロットですよ」



「第一戦闘配置だアノ」



やれやれ、またかい」



「各機残座ノ 主砲ノ メガ粒子砲、開けノ」

「後ろにサンジバル、前にムサイか。強行突破しかな」



ハツと目が覚める。セイラは本能的にTVカメラとガラス張りの格納庫に目を走らせた。額にふき出た油汗を見たものは、幸いにいないようだった。

「私は認められない。兄さんのやり方……」

セイラの声には確固たる意志が含まれていた。

ガンダム の腕の損傷は、思ったよりも深かった。修理を指示するアムロにセイラが声をかけた。

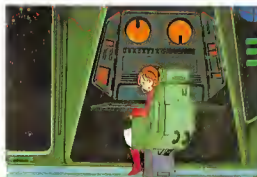
「私ね……どうしたらいいパイロットになれるかしら？」

どうしても生きのびたい、と彼女は語った。

「……おかしいですよ、急に」

いぶかるアムロに、セイラは作り笑いで答える。私があなたみたいなならね……

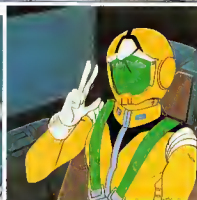
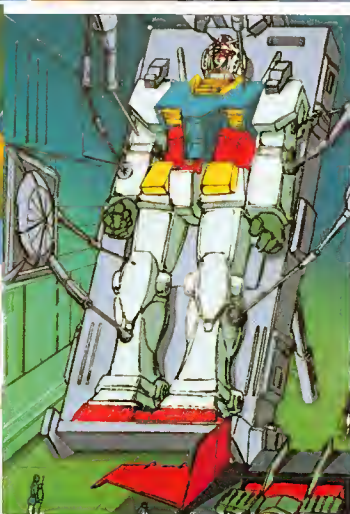
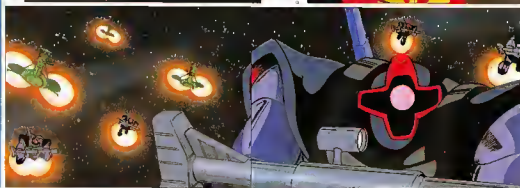
「フraw・ボウノ 予備のGファイターにスレッジー中尉を」



進むキャメル艦隊



「因縁浅からぬ、木馬とガンダムが各機、最大戦速！」



「お——ノ がんばってくれるね ハヤト軍曹、では、小生も……」



「ブライト、フレッガ 中尉、大丈夫かしら？」



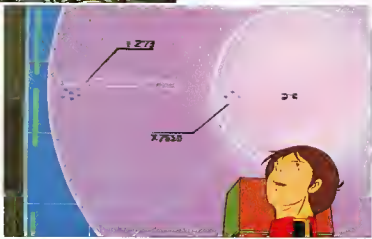
先に出撃したハヤトのガンタンクに、カイのガンキャノンが追いついた

「いいかノシヤア大佐と同じ戦法をとる。リック・ドム六機とキャメル、トクメルは木馬に攻撃をかけるぞノ 因縁浅からぬ木馬とガンダムか。各機、最大戦速！」

ドレン大尉の命令一下、キャメル艦隊が襲いかかろうとしていた。近を知ったブライトは、予備のGファイターにスレッジーを乗せて出撃させた。ガンタンクもガンキャノンも高速戦闘向きではない。

キャメル艦隊のムサイ三隻が、ホワイトベースにキャッチされた。後ろにザンジバル、前にムサイ。強攻突破しかないと判断したブライトは、艦をキャメル艦隊に突撃させる。

「九十秒後に接触します」





「セイラさん、おかしいですよ」

「セイラさん、第二デッキにいます」



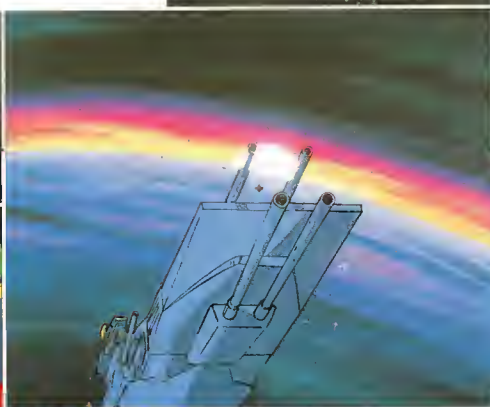
「やるな。ムサイを突破しようというわけか」



「ムサイをキャッチしたようです。スピードをあげています」



南米のジャブローを脱したテアン艦隊

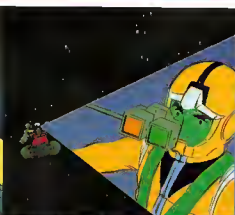


「さて、ここでパイロットとしても、いい趣をみせてやらにやあな」

この際一機でも多い方が、と彼は考えたのだ。ハヤトとカイも競って飛びたて行く。セイラもGファイターのコクピットに入ろうとした。セイラの気分を氣遣うアムロに、セイラは先刻とはうって変わった表情で答えた。
「大丈夫よ、アムロ。ザンジバルから発進したモビルスーツじゃないでしょ。クサクサしてるから、暴れてさっばりしてくる。」
ホワイトベースとキャメル艦隊が接触しようとする頃、南米のジャブローを発進した、テアン提督の指揮する地球連邦第2連合艦隊の一群が、大気圏を突破。ルナツに向けての進路をとりつつあった。



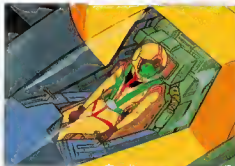
「よし、ハヤトが左なら俺は……」



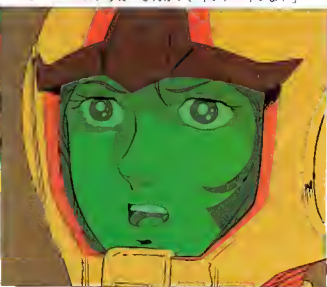
「こういう時、あてての方が負けなのよね」



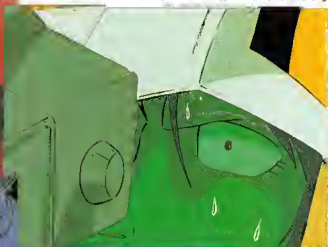
「スレッガーさんかい、早いノ 早いよノ」



「カイ達と協同で当らなければ、ムリよ」



「敵と同じように、別れては勝ちめはなくなるわ」



「野郎ノ もっと ひきつけるんだ」



「見かけによらずやることは冷静だな。見直したぜ」



「しまったノ」

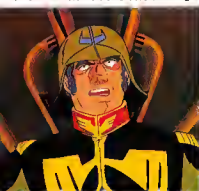
ムサイから発進したリック・ドム6機と、ホワイトベースの機は、戦闘可能距離にまで接近した。くるな……さて、ここでパイロットとしても、いいところを占めてやらにやあな」

気負い過ぎたスレッガーは、有効射程距離に入る前にGファイターのビームを発射した。カイはスレッガーに早すぎると注意する。

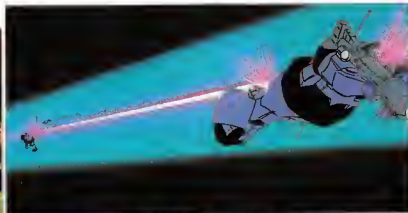
一方敵編隊が二手に別れるのを見たハヤトは左の編隊に攻撃を集中しようとするが、カイとスレッガーは右を狙う。敵と同じように別れては勝ち目がなくなる。セイラはハヤトを誘導し、カイとスレッガーの後方に回り込んだ。

カイは冷静な射撃で、リック・ドムを破壊した。さすがのスレッガーもその手慣れた戦い方に驚き、巻かざるを得なかった。

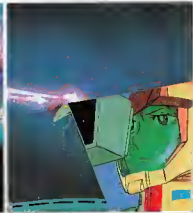
「ドムがやられた空域を掃射しろノ
木馬まで一気に突撃を敢行するノ」



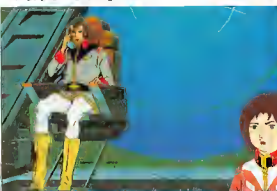
セイラのGファイターから発射されたビームは、ドムをつらぬいた。



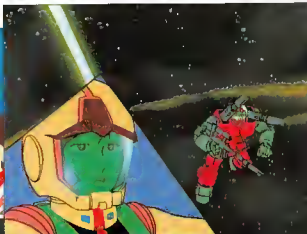
「うまいノ」



「頼むノ スカートつき。を叩かん限り、ムサイ
に攻撃もできない」



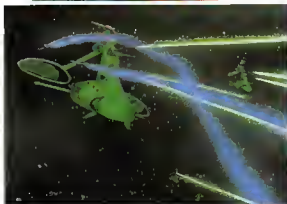
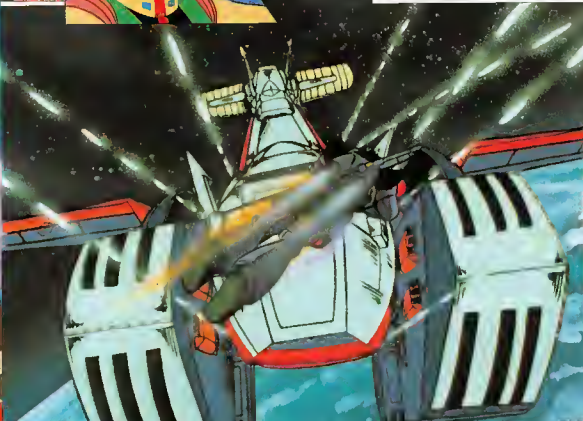
「ホワイト・ベースの防衛にまわりますノ」



「第1ブロック被弾ノ」

「ビーム来ます」

「回避行動まかせろ」



「ムサイのブリッジ、あるいはエンジンを狙え」

リック・ドムとGファイター、
ガンタンク、ガンキャノンの闘い
は続き、一機、又一機とドムが破
壊されていく。
「ドムがやられた空域を掃射し
ろノ 木馬まで一気に突撃を敢行
するノ」
ドレンの指揮のもと三機のムサ
イが、ホワイトベースへ攻撃を開
始した。セイラ達はホワイトベ
ースの援護にまわった。ホワイトベ
ースは三機のリック・ドムの防戦
に戦力を裂かれ、ムサイに攻撃で
きないでいたのだ。

「誰が砲塔を狙えといった、攻撃」轟中して行なえ」



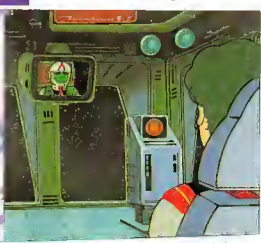
「よく狙えノ」



ドムの頭を破壊するガンダム



「ガンダム、いきまーすノ」



「待たせましたノ ガンダム発進します」



「トクメルが沈んだ」

「スワメルよけるんだアーノ」



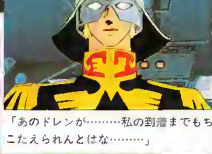
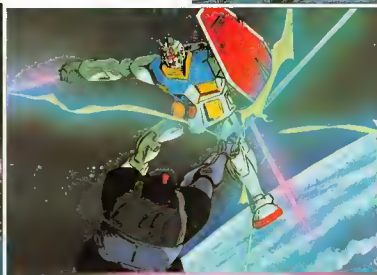
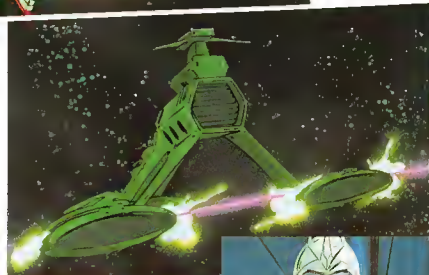
「ガンダムがいないそうですノ」

「数を撃てば、いいというものではないノ よく狙えノ」
ドレンのキャメル艦隊の攻撃はますます強力になっていく。その時、ガンダムの修理が完了したノアムロは行く手に立ち塞がったドムを蹴散しムサイに突進した。ホワイトベースもトクメルの撃破に成功する。シャア大佐が来る前になんとしても……と焦るドレンの耳に、ガンダムが戦艦に参加していないという情報飛び込む。「そんなはずはないノ カンダムは居るはずだノ どこなんだノ」ガンダムはムサイ艦隊の上空からバズリカを発射し、スワメルのブリッジに直撃させた。アムロは最後のドムとすれ違い様に、ドレンの乗るムサイのブリッジを切り裂いた。空気と共に船外へ放り出されるドレンとその部下





「下かノ」



「あのドレンが……私の到着までもちこたえられんとはな……」



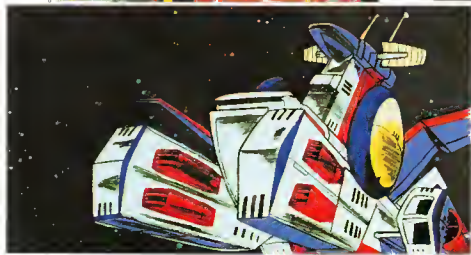
「まさかね……進路変更。サイド6へ向います」



「気になることもあるのか?」「い、いえ……別に」



「あとは——ムサイのみノ」



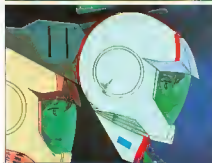
アムロは残ったドムも鮮やかな闘い方で葬ると、ビームジャベリンでムサイ艦のエンジンを爆破した。シャアが来るまでは持ちこたえられなかったものの、ドレンの活躍によりホワイトベースはサンジバルに追いつかれそうになっていた。ブライトは、ルナツーへ直行するのを諦め中立地帯サイド6へ向うことにした。ミライはその決断に個人的理由から不満を持ったが、進路変更はなされなければならなかった。

33話 コンスコン強襲

ドズル中将に見送られコンスコン機動部隊が発進する。



「左を」「え？」



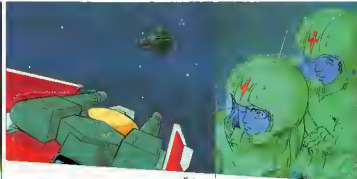
「こっちは足が短かいんだ、ひき上げるぜ！」



宇宙攻撃の本部ともいへきソロモン

Wベースはサイド6のコロニー群へ接近していた。

「う、うって来た!? ジオンのモビルアーマーだわ！」



「よりによって敵軍した時に……」

33話 コンスコン強襲

かつてサイド7のあった空域にドズル・ザビ中将の指揮するソロモンが浮んでいる。ドズルはかつての自分の部下シャアが、今では姉のキシリアについているのに反感を持っていた。しかし南米を発進したテナム艦隊の目的が判らぬ以上、自ら出撃するわけにもいかず、かわりにコンスコン機動部隊を発進させた。

ホワイトベースはサイド6に近づいていた。Gアーマー、コア・ファイターがパトロールに出るが、たいした異常もなく、そのうち後続距離の短かいカイのコア・ファイターは引き上げてしまう。





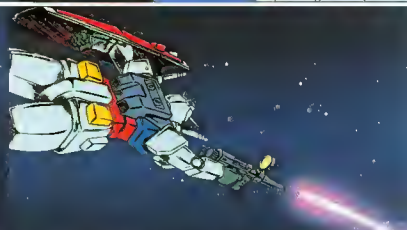
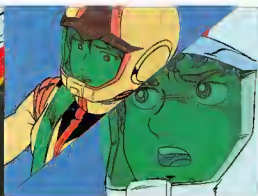
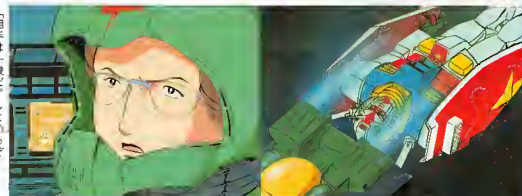
「馬鹿奴が！ なぜ、撃ったのか！」

「妙なモビルアーマーですノボトル・アウトします。岩のうしろへ」



ブラウ・プロの本体がビーム砲をのこして右へにげた

「相手は一機だ。しとるぞ」



全く違う処からビームがくる



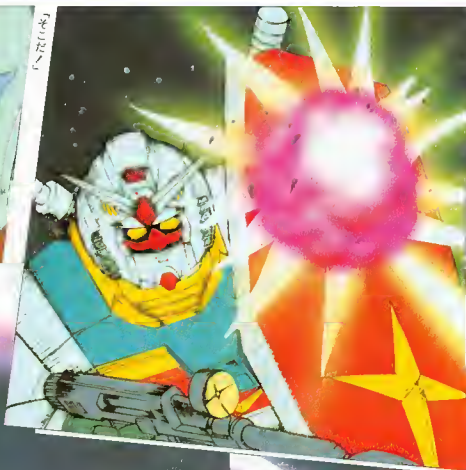
G アーマーは航法訓練も兼ね引き続きパトリールを行っていた。「ね、アムロ、あなたフラウ・ボウのこと、どう思っているの？」セイラの質問にとまどうアムロ。最近アムロとフラウが疎遠になっているのをセイラは気にしているようであった。

「こんな時だからこそ、友情って大切よ」

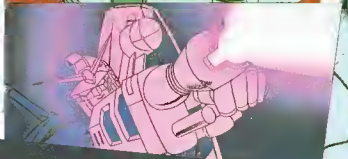
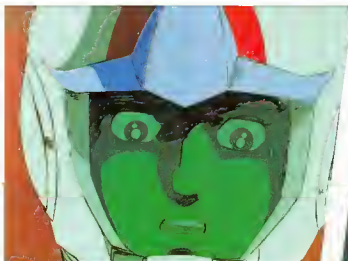
それとなく忠告するセイラ。その時、アムロが岩陰に潜むモビル・アーマーを発見した。ブラウ・プロの故障を調査していたシムス・アル中尉は、戦闘を避け脱出しようとするが、部下が誤ってビーム砲を发射させてしまった。

ブラウ・プロの攻撃を受けたG アーマーはボトル・アウトしてガンダムになるが、その攻撃とは意表をつくものであった。

「べ、べこから撃てくんなん」



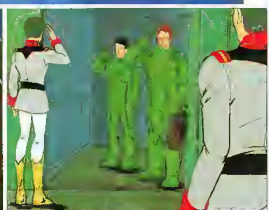
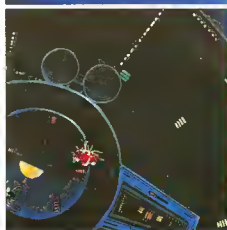
「そ、そだね」



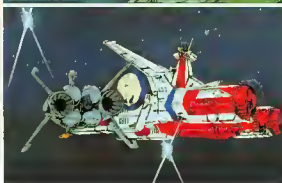
「あ、ようやく実用化のメドがついたものを」



「灯台の内側はサイド5の領空だ」



「サイド5の検察官、カムラン・ブルームです」



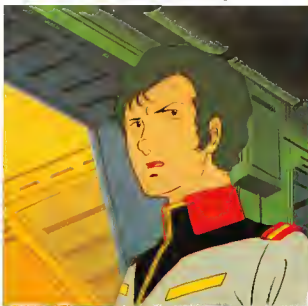
「見まちがいじゃないわね」

「テスト中のものだったら、無理だぜ」

「封印しました。これが一枚破られますと……」



「カムラン検察官。入港中です」

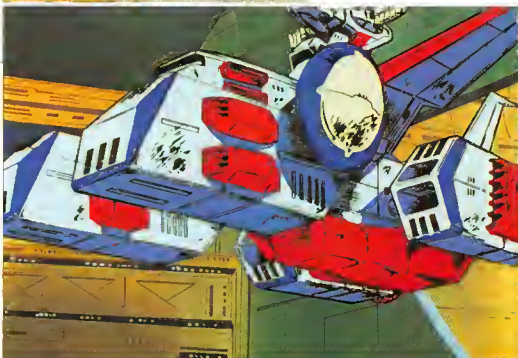


「丁度よかった。入港する処です」



「進角良好」

「ミライ！ ミライじゃないか！」



「ミライ、ミライじゃないか！」
「カムラン、あ、あなた……」
「どうやらあなたの知り合いではなさそうだった。親しく会話を交わす二人にブライトは注意した。」
「カムラン検察官。入港中です。遠慮していただきたい！ ミライ少尉も！」
「とはいったもののブライトは、二人の関係が気になっていた。傷ついたホワイトベースはバルダベイに着陸した。」

「ミライ、ミライじゃないか！」
「カムラン、あ、あなた……」
「どうやらあなたの知り合いではなさそうだった。親しく会話を交わす二人にブライトは注意した。」
「カムラン検察官。入港中です。遠慮していただきたい！ ミライ少尉も！」
「とはいったもののブライトは、二人の関係が気になっていた。傷ついたホワイトベースはバルダベイに着陸した。」

セイラとアムロは、モビル・アイマー本体とビームの発射位置が違うことに気づいていたが、苦戦を強いられる。エンジンの不調なブラウ・プロが一瞬停止した時、ガンダム・ビームが船体を貫いた。「ええい！ ようやく実用化のメドがついたものを……」
シムスはブラウ・プロのコクピット部分で脱出した。
「アムロ！ 手間とったわ、サイド6の領空に入る前に、ホワイトベースに戻りましょう」
Gファイターにガンダムを乗せ二人はホワイトベースへ向かった。やがてホワイトベースは中立地帯サイド6に入港した。サイド6領空では一切の戦争行為が禁止されている。すべての武器を封印されたホワイトベースにサイド6の検察官、カムラン・ブルームが訪れた。ブライトに封印が一枚でも破れると大変な罰金を払わなければならないと忠告するカムラン。ブライトはブリッジへカムランを案内した。



「なぜ……御自分で探して下さらな
かったの？」



「うれしいだけだよ。もう二度と君には会えないと絶望
していたんだ」



「ち、ちよとまって……」



「木馬は、何度とり逃したのだ」



「なんせ、ミライ少尉は、ホワイト・ペー
スのおふくろさんなんだからな」



「下手なチョッカイ出して欲しくないものだな」
「ス、スレッガー中尉、いいのよ」



「若者をいじめないでいただきたい」



ミライとカムランの話は噛み合
わなかった。ミライはいった。
「結局、親同士のかめた結婚話だ
ったのよね」
二人の様子をみたがめたスレッ
ガーはカムランを睨りつけた。
「下手なチョッカイ出して欲しく
ないものだな」
ミライはスレッガーを止めた。
カムランも、自分の態度がミライ
に気に入られていないことを承知
していたのである。

「キシリア少将に暗号電文をうて、パラロム、ズ、シヤア……いいな？」



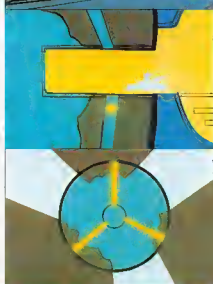
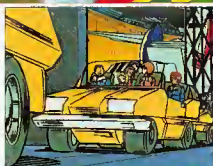
「いつか、化けの皮をはいでみせる」



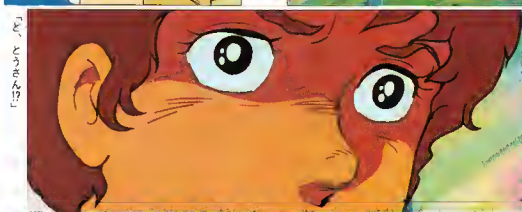
スペース・コロニーの夜景



「人工の宇宙都市の中心は、重さを感じることのない無重力である。エレベーターは三千メートルあまりを降りて、重さを感じることのできる土の地上へ降りく」



「これで、少しは変わったものを食べさせられるな」



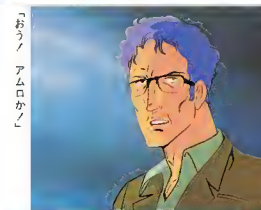
「さ、先に戻っててノ」



コンスコンは、チベにシヤアを呼び付け、ドズル中將のもとからキシリア少將の配下に転属したことを叱責する。しかしシヤアは、コンスコンなど眼中にない様子が、帰りにかけた。コンスコンはそれを引き止めたが、
「若者をいじめないでいただきたい。お手なみは拝見させていただきます」
とだけ言い残しザンバルへもどっていった。
タムラコック長連と街へ買い物に出たアムロは、そこでサイド7で死んだとばかり思っていた父の姿を見かける。



「父さんノ」



「おうノ
アムロカノ」



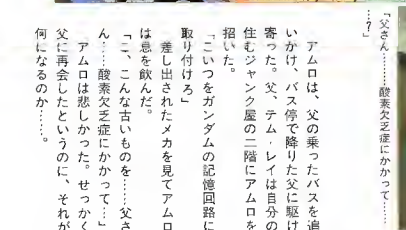
「ホラノ 何をしているノ 入って入って」



「こいつをガンダムの記憶回路にとり
つけろ」



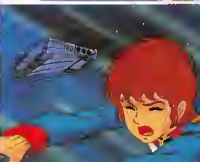
「ジャンク屋という処は、情報を集めるのに便利なので」



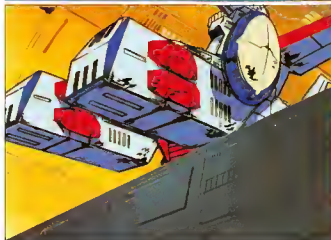
「父さん……酸素欠乏症にかかって……？」

アムロは、父の乗ったバスを追いかけて、バス停で降りた父に駆け寄った。父、テム・レイは自分の住むジャンク屋の二階にアムロを招いた。
「こいつをガンダムの記憶回路に取り付けろ」
差し出されたメカを見てアムロは息を飲んだ。
「こ、こんな古いものを……父さん……酸素欠乏症にかかって……」
アムロは悲しかった。せつかく父に再会したというのに、それが何になるのか……。

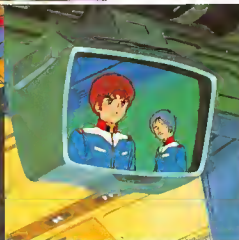
「逃げろ お前だって、軍人になったのだからか」



アムロは、メカをなげすめた。



港を出るホワイト・ベース



「す、すみません」



「アムロ！ 個人的に街をブラブラする時間を与えた覚えはないぞ」



「そうかい、それならいい、いい子だ」



「お嬢さん安心なされて下さい」

ホワイトベースに帰ったアムロを迎えたのは、ブライトの怒りの声であった。カムランの手配によりベルガミノが船の修理を引き受けてくれたのだ。ホワイトベースは急ぎ領空外のドックに出港することになっていたのである。

「ガンダムでホワイトベースの護衛に出るんだ」

アムロはガンダムを操り出撃する。スレッガーが、モニターを通してアムロに呼びかけてきた。

「少しは元気になったか？」

「ずっと元気です」

スレッガーは生来無骨な割には、細やかな心情を理解する一面をももちあわせていた。



「その、いい子だったのやめてくれませんか」



「敵の影は、なしか……… あれが、うきドック？」



「っ、つかまえたノ、ニ、こりやあ本馬じゃないか？」



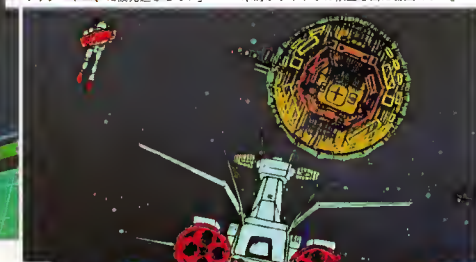
「リック・ドム、12機発進させろ！」



「木馬がサイド6の領空を出た会図です！」



「コンスコンが木馬をキャッチしたのか？」



「大きいな………」

ホワイトベースが、サイド6を出港したことは、すぐジオン軍に露見してしまった。
リック・ドムのパイロット、カヤハワ少尉が発光信号で、チベのコンスコンに連絡したのだった。
「丁度いい、我艦隊は、敵と一直線にならぶわけだな、リック・ドム、12機発進させろ！」
その頃サンジバルの艦橋でこの連絡を受けたシヤアは、闘いの行方を見守っていた。
「やれるのかな？ あへのらず口の将軍が？」

「フライトノ カムランは
そんな人じゃないわ」



「しまったノ わ、裏か
つノ」



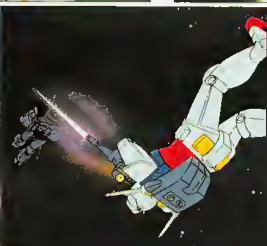
敵のビーム攻撃



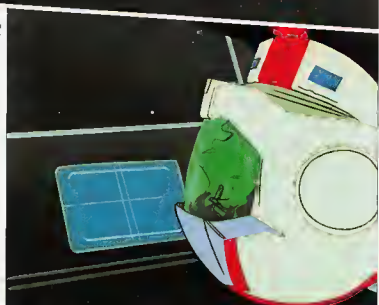
「スカート付きかノ」



「よ、よしノ 各機、展開
を急がせろノ」

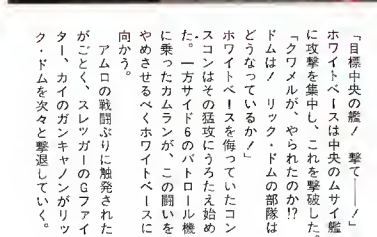
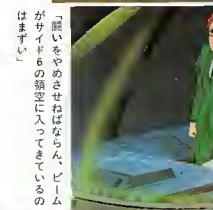
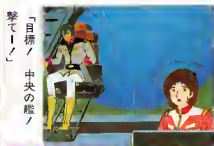
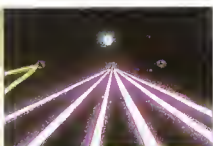


「つノ 次ノ」



「三ッノ」

ホワイトベースは浮きドックに近づいていた。大きいな——アムロはモニターに写るドックの大きさに感心した。その刹那ドックを驚き数条のビームがホワイトベースを襲ってきた！
「しまったノ 罠かッノ」
たがフライトの言葉をミライは必死に否定する。
「フライトノ カムランは、そんな人じゃないわノ」
ガンダム以下各機が、ホワイトベースを守るように、展開した。アムロはやり場のない怒りをぶつけるように次々とリック・ドムを破壊していく。到底人間技とも思えない反応速度で……。



「五つ」

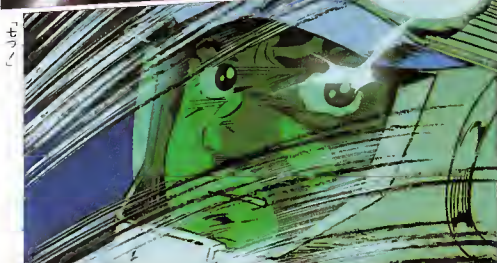
「目標中央の艦ノ 撃てー!」
ホワイトベースは中央のムサイ艦
に攻撃を集中し、これを撃破した。
「クワメルが、やられたのか!」
ドムはノリック・ドムの部隊は
どうなっているか!」

ホワイトベースを侮っていたコン
スコンはその猛攻にうろたえ始め
た。一方サイド6のパトロール機
に乗ったカムランが、この闘いを
やめさせるべくホワイトベースに
向かう。

アムロの戦闘ぶりに触発された
がごとく、スレッガーのGファイ
ター、カイのガンキャノンがリッ
ク・ドムを次々と撃退していく。



「このオノ」



「ぜ、全滅？ 十二機のリック・ドムが全滅？」



「しかし、わ、わたしのドックは………」 「よし！ 全機に伝えろ！ サイド6に逃げこめど！」



やって来たザンジバル

最後のリック・ドムが爆破されるに至り、コンスコンは狼狽する。「12機のリック・ドムが全滅？ 3分もたずにかア？ 傷ついた戦艦一隻にリック・ドムが12機も……化物なのか？」

その時、シャアの乗るザンジバルが、コンスコン救援に駆け付けたかのように姿を見せた。

「シ、シャアの奴………笑いに来たのか！」

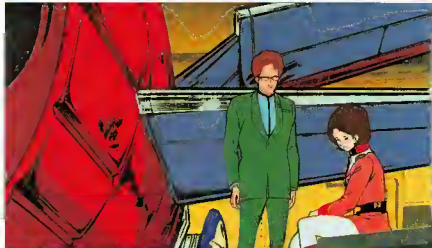
コンスコンは屈辱感にさいなまされる。

同じくザンジバルを発見したホワイトベースは、サイド6へ逃げ込むことにした。

「パトロール機をきづつけたら国際間
頭になるぞ」



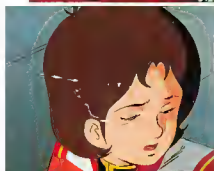
「大丈夫……封印を破った件は、父がもみ
けしてくれます」



「あの連判軍の艦には、私の未来の妻が乗り組
んでいるんだ」



「判って下さらないのね」



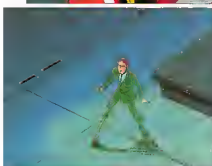
「だから……父に頼んでやる
って……」



「そうじゃないの、ホワイト・ベースを捨てる私に、あなたは……
あなたは、何をしてくれるの？」



「昔は、そんなこと言う素で
はなかった」



「僕の、な、何が気に入らないの、ミライ / おしえてくれ」

カムランのパトロール機は、ホ
ワイトベースを守るように同行す
る。それを見たシヤアは伝令をま
わす。
「砲撃まで / サイド6のパトロ
ール艦だ / コンスコン隊にも砲
撃をやめさせろ /」
サイド6でミライとカムランが
話し合っていた。戦争で変ってし
まったミライ、戦争から逃げすぎ
て変なすぎたカムラン、所詮二
人の住む世界は違いすぎたのだ。
ミライの帰る場所……それはホ
ワイトベース以外には考えられな
かった。

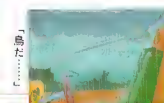
34話 宿命の出会い



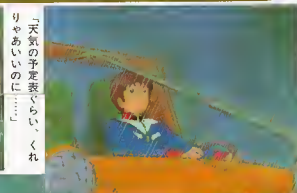
「お帰らないかい……どうだった？」
「滞在の手続きがどうの、といっている……
少しでも早く追い出したいらしい」



「あと、3時間で整備を終ら
せよう。出港する」
「アムロはいつ帰ってくるのだ？」
「あと2時間」



「鳥だ……」



「天気予報表ぐらい、くれ
りゃあいいのに……」



「白鳥が飛ぶ」

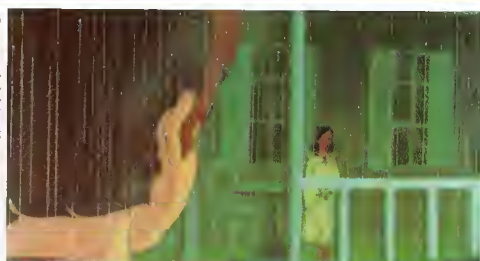
34話 宿命の出会い

コンスコン隊との交戦で修理を
受けられなかったホワイトベース
は、更にサイド6からも追い立て
をくっていた。ブライトはアムロ
が帰って来るまでに整備を終らせ、
出港しようとする。

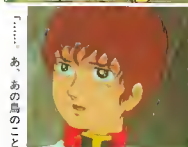
その頃アムロは、再度父に会う
ためバギーを走らせていたが、突
然降り出した雨のために、とある
小屋に駆け込んだ。その時湖の上
を飛ぶ白鳥の姿に、アムロは何か
を感じるのだった。



「ああ……かわいいそうに」



失速し湖面に落下する白鳥



「……あ、あの鳥のこと……好きだったのかい？」



「美しいものが嫌いな人がいて？」

「別に……おどかさつもりじゃあなかった」

その小屋には一人の少女がいた。彼女は湖面に落下する白鳥をみつめていたのだが、アムロの出現に恐怖に近い驚きを示した。
「あの鳥のこと……好きだったのかい？」
「美しいものが嫌いな人がいて？」
アムロは更に話のきっかけを探そうと試みるのだが、
「あ、やんだわ」という少女の言葉で打ち切られてしまった。スペース・コロニーの人工降雨は唐突に終る。少女はアムロに近づき顔を上げると
「……きれいな眼をしているのね」とだけ言い残し駆け出していくってしまう。アムロはとぎまぎしながら、その姿を目で追っていた。

「あ、やんだわ」

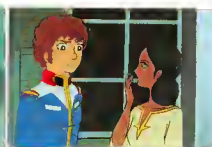


啞然とするアムロ

走るララア



かけ出して行く少女……



「きれいな目をしているのね」



「……そ、そう……？」



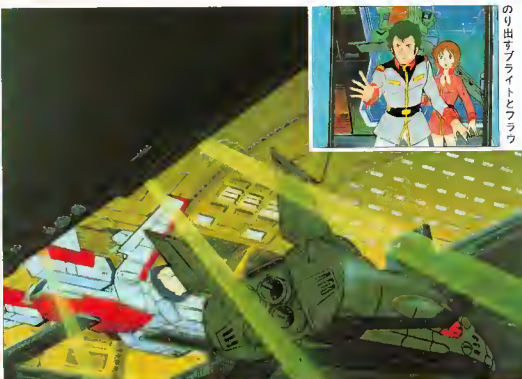
「実戦に出るのも間近い。せしたら判る」「コンスコン隊、放っておいてよろしいのですか？」



「シャアか？ 勝手な真似ばかりしおって」



サイド6にザンジバルが接近していた。マリガンが尋ねる。
「コンスコン隊、放っておいて、よろしいのですか？」
「やむを得んな。ドズル中將もコンスコンも、目の前の敵しか見ておらん」
入港の目的はマリガンにも知られていなかった。
「勝手な真似ばかりしおって」
チベのブリッジではコンスコンが毒づいていた。

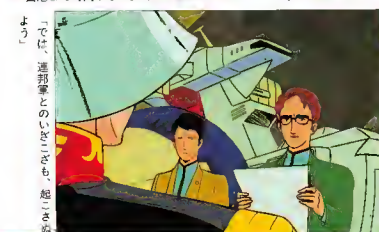


マンガだよ、マンガだ



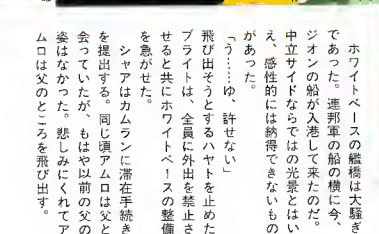
「出港まで時間がない。外出を禁止する」

「う……ゆ、許せない!!」「どこへ行く!!」



よう

「では、連邦軍とのいきさつも、起こさぬよう」



ホワイトベースの艦橋は大騒ぎであった。連邦軍の船の横に今、ジオンの船が入港して来たのだ。中立サイドならではの光景とはいえ、感性的には納得できないものがあつた。

「う……ゆ、許せない」

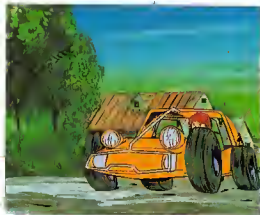
飛び出そうとするハヤトを止めたブライトは、全員に外出を禁止させると共にホワイトベースの整備を急がせた。

シャアはカムランに滞在手続きを提出する。同じ頃アムロは父と会っていたが、もはや以前の父の姿はなかった。悲しみにくれてアムロは父のところを飛び出す。



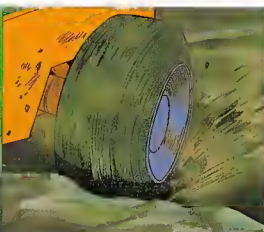
「絶大な効果があったらう?」
アムロ「え、ええ」

「タベ渡した部品は、どうだった?」



「うんうん…そうさ私が作ったものだからな、ハハハ…」

「………父さん……」



「待避カブセルが何の役に立つんです」

「ホワイトベースへ行け!!」

「近道なんかするんじゃないかった」

から回りする車輪



「す、済みません!!」

サイド7での父の最後の姿を思い浮かべていたアムロは、バギーがぬかるみにはまったショックで我に帰った。エンジンをふかすが車輪は空転するばかりだった。
「近道なんかするんじゃないかった」
アムロがあきらめて車から降り立った時、運よく一台の車が通りかかる。アムロは手を振った。
「す、済みません!!」
アムロに泥水ををはね、通りすぎた車はバックして来る。車から降りた男を見てアムロは愕然とする。
「………シャアア!!」



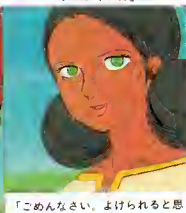
「すまん」



「シ…シャア!?」



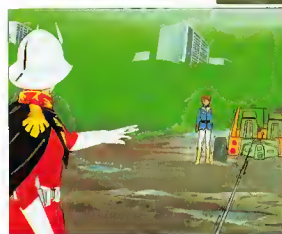
くぼ、僕は、あなたを……知っている」



「ごめんなさい。よけられると思
ったんだけど」



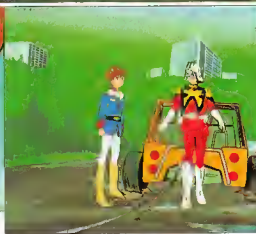
「お、お手伝いします」



「どうしたノ、退れ、アムロ君」



くあ、あれがシャアか……シャア・アズナブルと
いったん?



「お名前は?」

「すまん、君、なにぶんにも運
転手が未熟なものでね」
ジオンの軍服を着たその男を見た
瞬間、アムロには判ったのである。
彼がシャアであることが……
「ごめんなさい。よけられると思
ったんだけど……」
アムロに詫げる少女は、先程小屋
で会った少女である。シャアはア
ムロの名を聞いてつぶやく。
「アムロ……不思議と知ってるよ
うな名前だな」
「そ、そう……し、知っている……
ぼ、僕はあなたを、知っている」
アムロが唖然としている間にシ
ャアは、アムロの車にロープを結
びつけた。



「あ……十六才です」



「君は年はいくつだ」



「おびえてい……んですよ。きつと」



「どうしたんだ？ あの少年」



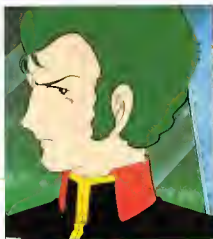
「失礼します」



「個人的に、みなさんのお力になればと……」



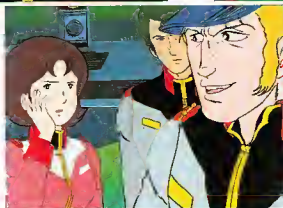
「あの……お名前は？」
「シャア・アズナブル。ごらんの通り軍人だ」
「シャア……」
「ララァ！ 車を動かしてくれ！ 静かにだぞ！」
シャアは少女に命じる。アムロの頭は混乱していた。
「はじめて会った人だというのに……何故、シャアだつて判ったんだ？ それに、あの娘……ララァといったな」
アムロは促されて礼を言うとホワイトベースへ向かっていった。
メインブリッジではブライト達がサイド6を出る方法を検討していた。そこへ訪れたのはカムランだった。



「それはありがたいが」「カムラン。どういうつもりで、そんなことを」



「そうだよ、カムランさん。気合いの問題なんだ」



「この人は、本気なんだよ。わかる!?」



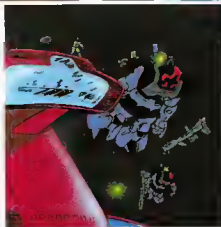
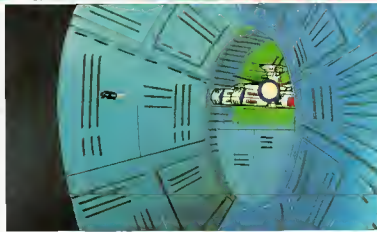
「バカヤロウ」



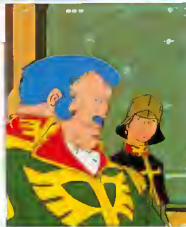
「お願いできませんか?」



出港するカムラン艦とホワイトベース



「サイド6の民間船が木馬にビッパリついてます」「ヘノ 物好きもいるものだ」



何故カムランが……という顔のミライを尻目に、カムランは自分の船が盾となって、サイド6を出るまで護衛しようと申し出る。「カムラン。どういうつもりで、そんなことを……」「君にそういう言われ方をされるのは心外だ」「ミライの刺のある言い方にムツとするカムラン。」「馬鹿野郎!」スレッガーがミライの頬を叩いた。息を飲むカムラン他、一同。

「カッ……カ……カムランさん。もう領空内
いっばいですよ」

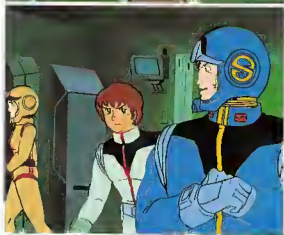


「話が違うんじゃないか。手あて、はずん
で買いますぜ」



リックドム発進

「上で何かあったんですか？」
「子供に関係ないの」



「ジ、ジオンのモビルスーツだ」
「カムランさんは、二で結構です」

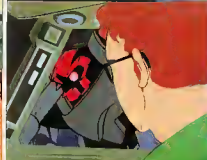


「ワ～ きたー!!」

カムラン。……あ、ありがとう。お気持は充分にたくわ



「ミ、ミライ……」

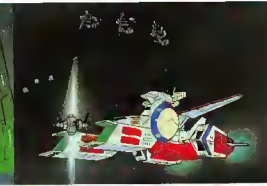
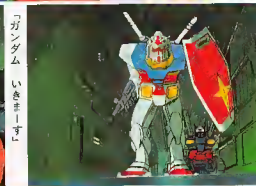


「サイド6の領空線に近づきます」

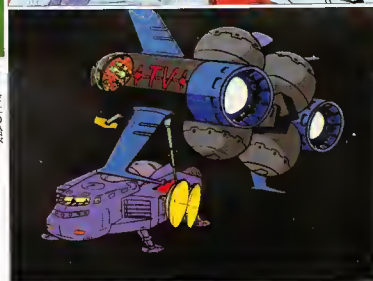
「この人は本気なんだよ。わかる!?
それでもなきゃ、こんな無茶はい
えるか? いくらこが中立サイ
ドだといつた所で、ミサイル一発
飛んでくやあ、命はないんだノ
わかる?」
「お気持ちが変わらなければ、お願
いできませんか?」
ブライトはカムランの好意を素直
に受け入れた。
カムラン艇に付き添われてホワ
イトベースは出港した。
コンスコンは領空侵犯もかまわ
ず、ホワイトベースに闘いを挑ん
できた。リック・ドムがホワイト
ベースを取り囲むノサイド6の
領空線が近づいていた。



「たのむノ ブ、ブリッジを！」



「攻撃を開始しろ!!」



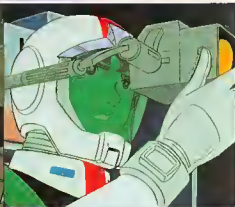
「ホワイト・ベース最大戦速！」

「ガンダム いきまーす！」

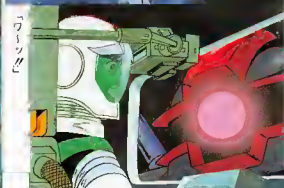
「……は、はじまつてしまった……」

「カムランさん！ 退いて下さい。我々は戦闘に入らざるを得ないでしょう」
 ブライトとミライは、カムランに心からの礼をいった。ホワイトベースのブリッジをかすめるように、カムラン艇が遠ざかっていく。ホワイトベースは領空外に出るやガンダムを急進させ最大戦速で対空戦闘状態にもつこんだ。ドム隊の攻撃が、開始された。サイド6のテレビ局がこの闘いを中継してきた。アムロの乗るガンダムは、一撃でドムを破壊していく。あまりにもあつけない味方のドムがやられるのを見て、パイロット達は驚愕する。

千V会社の船が……

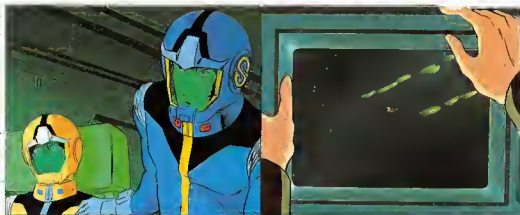


「逃すか!!」

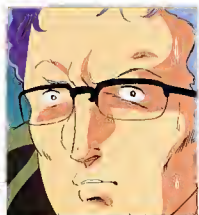


「まるでぞ!! こつ、こつちの動きを読んでいるようだぞ!」
「き、気まぐれだよ! まぐれだ……」
「……」
「こうなりと攪乱するしかない。例の手で行くぞ!!」
2機のリック・ドムは連携プレーでガンダムに攻撃を仕掛けてきた。アムロは必死に敵の攻撃を避けるうち、ドムの行動パターンが読めるようになっていた。

「中尉、できました！」
「よし、制している！」



「ガンダムを写せノ
ガンダムの戦い
ぶりをノ」



「かかった！」

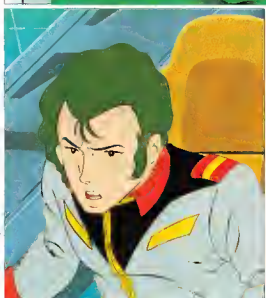


「実戦というものは、ドラマのように恰好のよいものではない」

「ハッ！」



「何があったんだ!? 今日のアムロは勲が冴えている」



もう1機のドムに命中するビーム



ホワイトベースとコンスコン隊の闘いは、テレビ局の中継によってサイド6に放映された。サイド6ではアムロの父テムや、シャアがスクリーン内の戦争を見物していた。
ガンダムがドムの腹にはまったかに見えた瞬間、アムロは敵の動きを逆に察知し、あつという間に2機のドムを沈めた。
「今日のアムロは勲が冴えている」
ブライトが感心した。

ホワイトベースへ向うガンダム

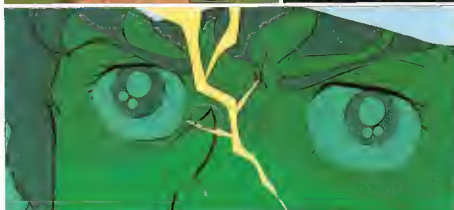


「白いモビルスーツが勝つわ」

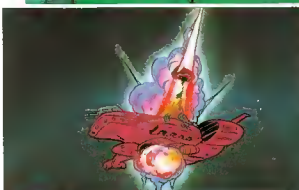


「シャアが見ているんだぞ！
シャアが！突攻をせよ」

「どニが心臓だ？ あそニか!?」



「フフ…… ララアはかじいかな」

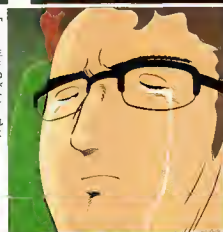


チヘの下につこむガンダム

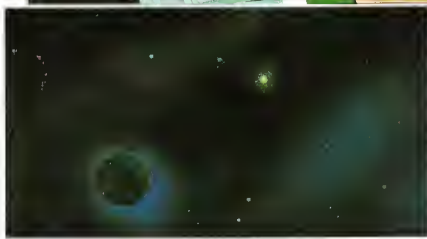


「…サイド6……」

「……生きのびてくれよ」

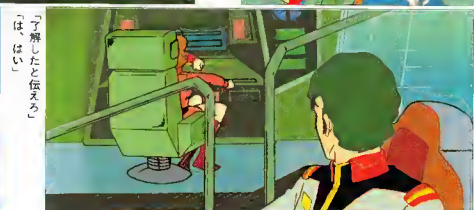
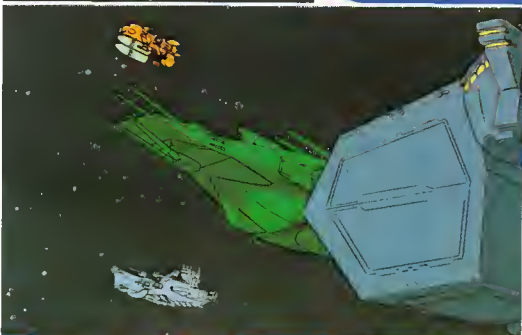
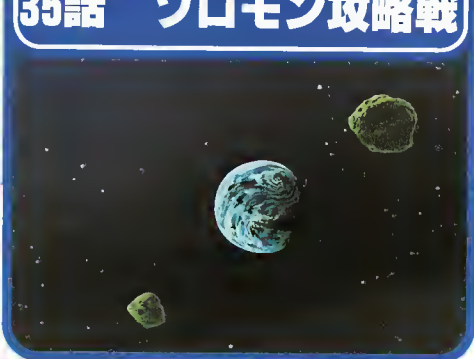
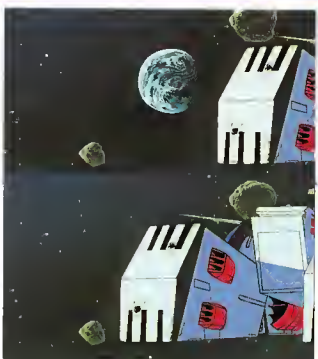


「ね？ 大佐？」



一方コンスコンは特攻を決意する。モニターを見ていたララアはシャアに告げた。
「白いモビルスーツが勝つわ」
ララアの言葉通り、コンスコンの乗るチヘのフリッジにガンダムのビームサーベルが深々と突き刺さったのだった！
ホワイトベースはサイド6から遠ざかって行つた。
「……生きのびてくれよ……」
カムランはそれを静かに見送つた。アムロはサイド6を振り返り涙をこぼす。彼にとってサイド6は甘く切ない悲しみの地でしかなかったのか……

35話 ソロモン攻略戦



ホワイトベースは第三艦隊と接触し補給を受けていた。ブライトは艦隊司令に挨拶をしに単身スベースランチで旗艦マゼランに乗り込んでいった。輸送艦コンパスからの物資搬入の護衛に付いていたカイは、見慣れぬ小型艇に興味を持った。

「ミサイルをかかえた不細工なのいるけど、あれなんだア?」

「バブリク・タイプの突撃艇ですよ」

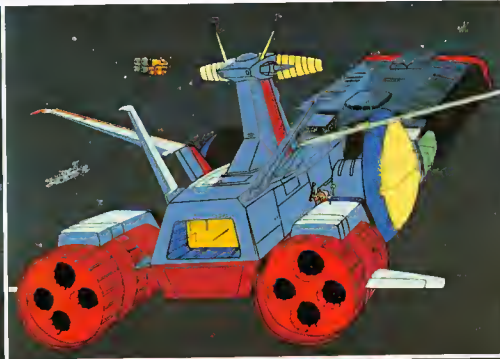
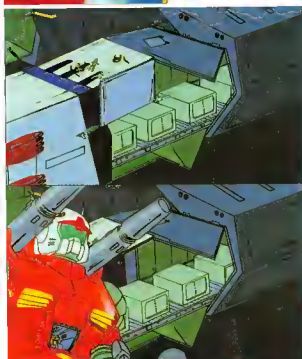
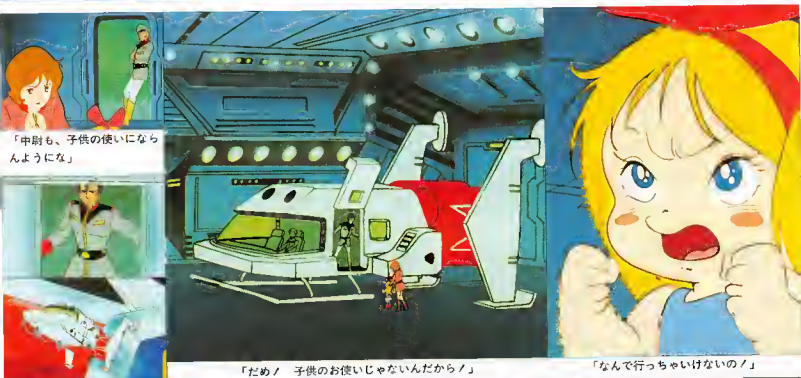
作業をしていた少年が答える。

「突撃艇? てえことは、又キビシクなりそうだな。おーやだやだ」

カイは肩をすくめた。

35話 ソロモン攻略戦







「貴様も、いっばしの指揮官面になってきたかな」

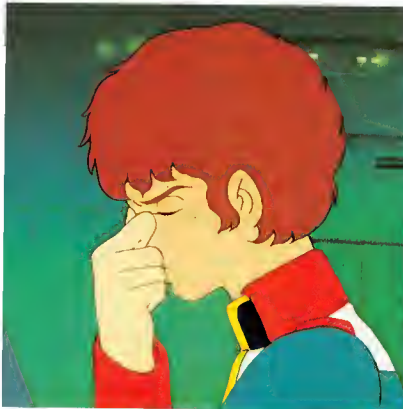
「ノ ブライト・ノア中尉であります」



「カンダムの坊やか。素晴らしい才能の持主だ」

「やはり作戦目標は、ソロモンですか」

「これが現在、我々の通っているコースだ」



「まいったな……」



「磁気圧が上がらないのか？」



ソロモン港内に入るパプア

「ご苦労だった、ブライト君」
 ブライトを迎えた艦隊指令というのは、かつてルナツーでホワイトベースチームを揃えたワッケインであった。
 「貴様も、いっばしの指揮官面になってきたかな、結構なことだ」あの民間人が寄り集まって乗り込んだホワイトベースが、これだけの働きをしようとは……その成長ぶりに感嘆するワッケインであった。
 ブライトはワッケインから作戦目標がソロモンであることを知らされ、ホワイトベースがその先鋒となる指令を受けた。



「ビグザムの鎮立てを急がせろ！」

「ええいノ 兄上は、何を考えているのだ」

「たった1機のビグザムだけだ!?」



「お目にぼしたとでもいうのか？」

「ララー……何をしている」

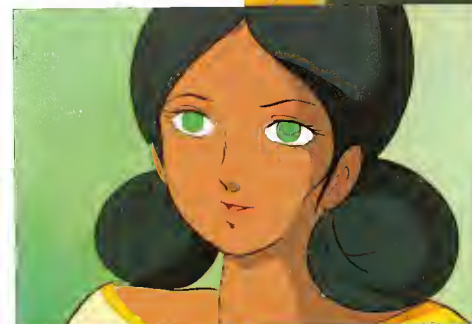


「御苦勞でした、監察官殿」

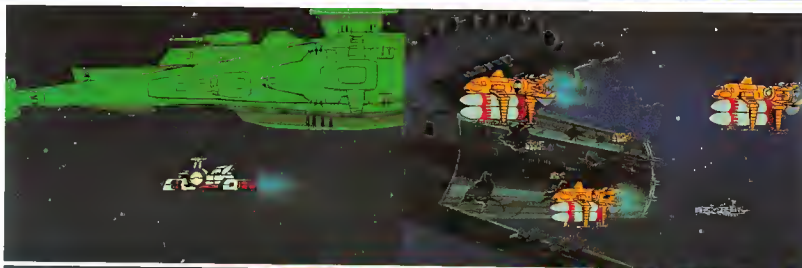


「ど、どなたです？」

「私の妹、……とでもしておいてもらう」



格納庫でガンダムの整備をしていたアムロは、なぜかフラウのことが気になっていた。
一方ソロモンに入港したババア補給艦からモビル・アーマー「ビグザム」のパーツが降ろされた。ドズルは、絶対数すら不足しているモビルスーツが届かぬことに苛立っていた。
同じ頃サイド6では、シャアがララーを連れ出港しようとしていた。
カムランはシャアの態度が気に入らなかった。



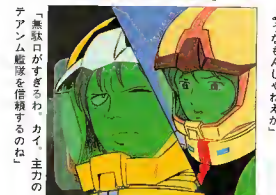
「艦隊横一文字体型に移動ノ」



「やれやれ」



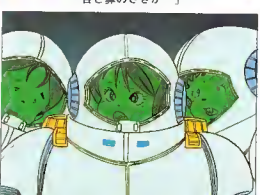
「目と鼻のささか……」



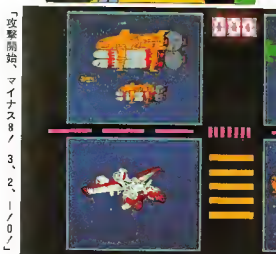
「無駄口がすぎるわ、カイ。主力の
テアンム艦隊を信頼するのね」



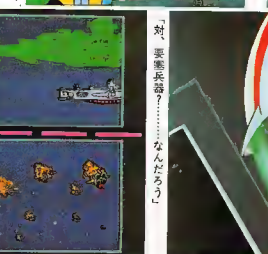
「たつたこれだけじゃ、死に行く、
ようなもんじゃねえか」



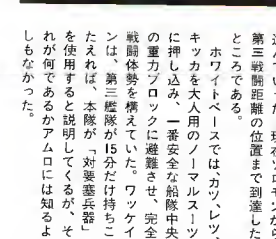
「こんなのではなきゃ戦えんだ」



「攻撃開始、マイナス9ノ3、2、1ノ0ノ」



「対 要塞兵器？……なんだろう」

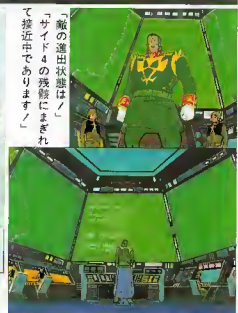
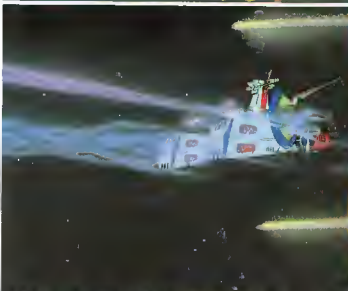


「前進ノ」



第三艦隊と合流したホワイトベ
スは宇宙要塞ソロモンに向かって
進んでいた。現在ソロモンから
第三戦闘距離の位置まで到達した
ところである。

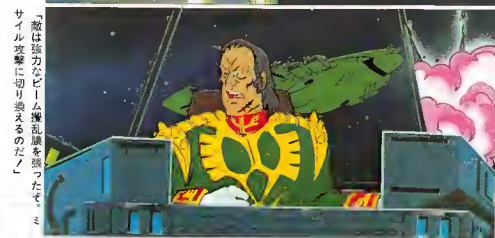
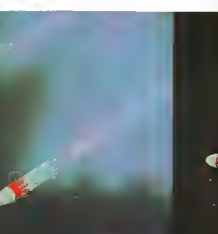
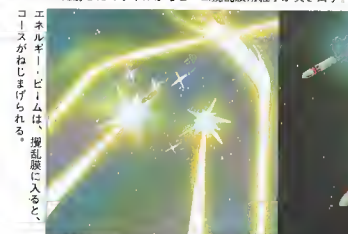
ホワイトベースでは、カツ、レツ、
キツカを大人用のノーマルスーツ
に押し込み、一番安全な船隊中央
の重力ブロックに避難させ、完全
戦闘体制を構えていた。ワッケイ
ンは、第三艦隊が15分だけ持ちこ
たえれば、本隊が「対要塞兵器」
を使用すると説明してくるが、そ
れが何であるかアムロには知るよ
しもなかった。



「敵の進出状態は」
「サイド4の残骸にまぎれて接近中であります」

「ミサイル／主砲／ビーム砲／発射用意／……うて！」

バブリクの発射したミサイルからビーム攪乱膜用粒子が吹き出す。



攻撃が開始された。突撃艦バブリクが艦隊前方に散開すると、ビーム攪乱膜を形成する特殊ミサイルを発射した。ソロモンから発射されるエネルギー・ビームのほとんどはこの攪乱膜でコースを外され艦隊は守られていた。
ソロモン司令部ではドルがミサイル攻撃に切きかえるよう怒鳴りちらしている。テアンムの主力艦隊はまだその姿を現わしていない。

エネルギー・ビームは、攪乱膜に入ると、コースがねじまげられる。

「敵は強力なビーム攪乱膜を張ったぞ。ミサイル攻撃に切り換えるのだ！」



「ビーム攪乱膜成功です！」
「よし！ 各機任意に突撃」



「ザンハルさえいなければ……」

「みんな、出られるなよ」

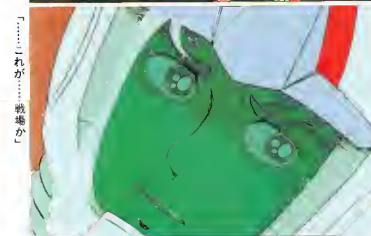
「モビルスーツ、各Gファイター発進はじめ」



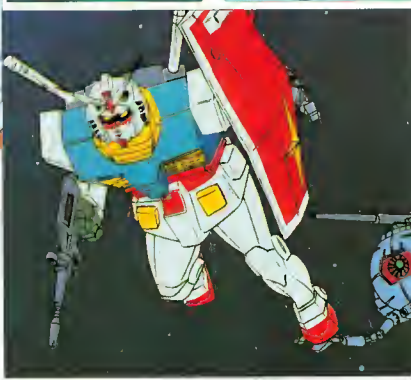
「行きまーす」



「ガンキャノン、行けぞエノ」



「……これが……戦場か」



ビーム攪乱膜は成功した。ワッ
ケインは各艦に突撃命令を下す。
ボール、GMMの各モビルスーツ隊
が次々に発進していく。ホワイト
ベース隊も奮戦していた。
「モビルスーツ、各Gファイター
発進せよ！ 協同作戦だということ
を、忘れるな！」
ブライトの指揮のもと、ホワイ
トベースのハッチから各メカが次
々に飛び出していく。常に孤軍奮
闘していた彼らにとつて連邦軍艦
隊との協同作戦は初めてのものでは
あった。アムロは多数の味方のモ
ビルスーツがガンダムを取り巻く
のを見て、新たな興奮を覚える。



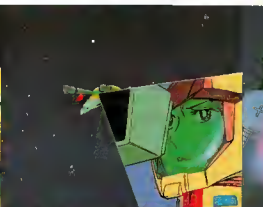
「たいした物量だぜ! この野郎!」



ジオン軍ガトル戦闘機



「セイラさん! 愛しているよ!」



「カイ! 息をぬいてはだめよ!」



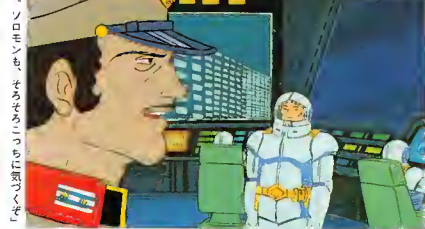
「生か死か、それは終ってみなければ判らなかつた」



「このソロモンがおちるものか」



「戦局はそんなに悪いんですか?」



「ソロモンも、そろそろこちに気づくぞ」

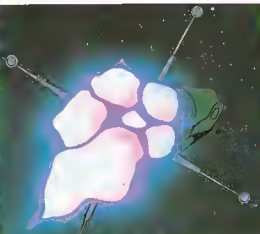
ソロモン周辺は敵味方入り交じった戦場になっていた。ホワイトベース隊は互いを援護するようなみことなチームワークでジオンのモビルスーツを破壊していく。ドズルは副官のラコックに指揮を預けると、妻ゼナのいる部屋を訪れた。

「万一のことがある。女子供は退避カプセルに移れ!」

ミネバを抱いたゼナは笑じる。

「戦局はそんなに悪いのですか?」

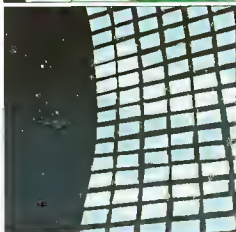
その頃デラム艦隊は新兵器、ソーラシステムの組み立てを終了しようとしていた。



衛星ミサイルが飛ぶ。



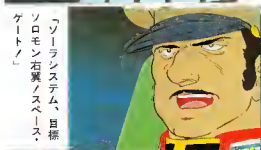
「なにー!? バカなノ サイド」の残骸に隠れてい
たのが、判りましたア?」



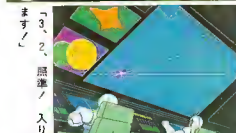
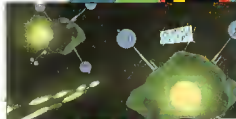
「キシリアにか!? これしきのことでノ
国中のもの笑いの種になるわ」



「第七師団に援軍を求めましたら?」



「ソーラシステム、目標
ソロモン右翼ノスペース
ゲート」



「3、2、照準ノ 入り
ます」

「なにー!? バカなノ サイドー
の残骸に隠れていたのが、判りま
したア?」

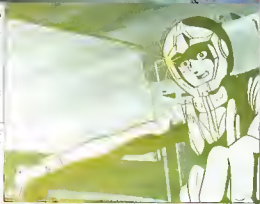


「ソーラシステム目標ソロモン右
翼ノスペースゲート」

衛星ミサイルが爆発する。



「ソ、ソロモンが……」
あ、あれが……」
焼かれている



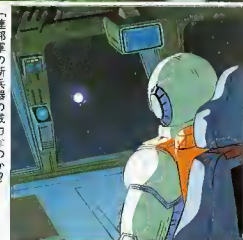
「まずいな。弾薬ロケットが切れたのか!」



「な、何事だア!」



「連邦軍の新兵器の威力なのか!」



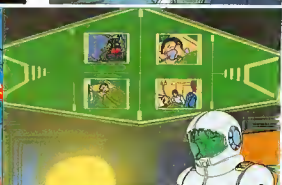
「敵の本隊が出てくるぞ! 衛星ミサイルで、軌道上にあるものは全て発射しろ!」



「あ、AB型の血液
ピンと精血セットを
持つてきて」



「ハヤトノ」



「ガンタンク着陸しました。損傷度8パイロット負傷しています」

ソーラシステムが、輝いたノチベを溶かし光の束がソロモンを焼く。衛星ミサイルがシステムの一部を破壊するが、その威力はほとんどかわらなかった。アムロもブライトもその威力に驚愕する。ソロモンは大混乱に陥った。岩も鉄も兵までも溶かし、ソーラシステムの光束が荒れ狂った。そんな中でハヤトのガンタンクが損傷を受ける。ヒビの入った風防に応急テープをはりつけ、ハヤトはホワイトベースへ帰艦した。これによりホワイトベース隊の戦力が1パーセント低下する。ハヤトの身を案じたフラウは医療班を手伝いに行く。そこでサンマルから指示を受けつつもハヤトの負傷に驚くフラウ。

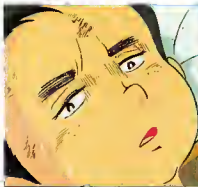
ドズルはTEAM Z艦隊へ向け軌道上にある衛星ミサイルを全部発射させた。



「無事よ、元気に開いているわ」

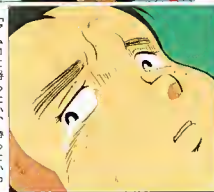


「み、みんなは？」

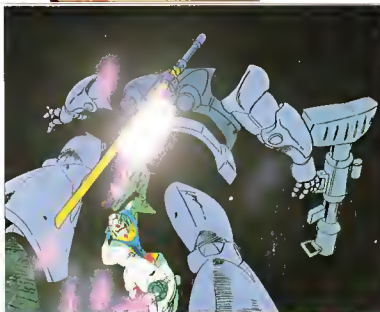


「いいね、ハヤトにはもう1本輸血する。忘れないでね」

「アムロに勝たいたい、勝たいたい
て思っていて……このザマだノ」



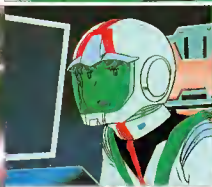
「ハヤト……。アムロは、……違う
わ、あの人は……あたしたちと違う
のよ」



「チーッ！」



「いただくノ」

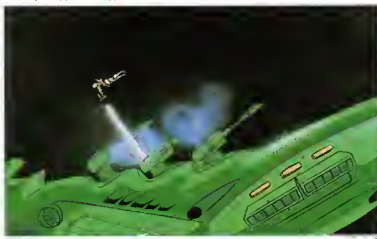


「あれか!? 新兵器の破壊した跡は」



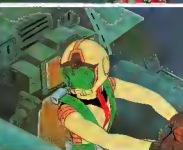
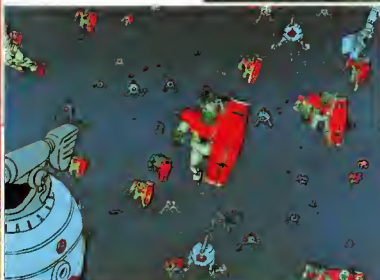
「残ったモビルスーツを戻させろノ
ソロモンの水障で敵を殲滅するノ」

フラウはサンマロから輸血の注
意を受け、ハヤトの看護を続ける。
「み、みんなは？」
「無事よ、元気に開いているわ」
それを聞きハヤトは自分だけ聞え
ないことをくやしがる。ハヤトは
サイド7以来の仲間であるアムロ
に、特に強いライバル意識を燃や
していたのだ。アムロはあたした
ちと違うのよ——慰めるフラウ。
戦局は連邦軍が優勢のようだった
が、ジオンの分隊から次々に応答
がとぎれる司令室で、ドズルは背
水の陣をし決意を固めた。
「残ったモビルスーツを戻させろ
ノ、ソロモンの水障で敵を殲滅す
るノ」





「ホワイトベースより入電、味方のモビルスーツがソロモン内に侵入しました！」



サイド6を出発するザンジバル



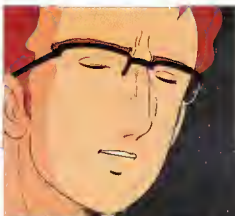
「ソロモンが救援を欲しがっている！」



ジオンのモビルスーツ隊が後退するのを見てソロモンに突進したアムロは、溶けたたれた岩を見て息を飲む。眼前に迫るムサイを撃退し、ガンダムはソロモンに着地した。

その報告を受けたティターンズは、GM・ボールのソロモン突入隊を派遣させる。ガンダムはソーラシステムの攻撃でもろくなっていた壁面を破壊し、ソロモン内部へ侵入する。

ザンジバルはサイド6を出発中ソロモン危しの暗号電文を受信しシヤアは最大戦速でソロモンに向かっていた。



「行ってくれたか…やれやれ……ミライ…。せめて……長生きしてくれよ…」

「サンバルノ 最大戦速ノ 目標ノ ソロモン」



「ラッ、いいな? いよいよ戦場に入る」



「ビッグザムの用意はどうか! 決戦はこれからであるノ」

宇宙空間に射出される脱出ポット



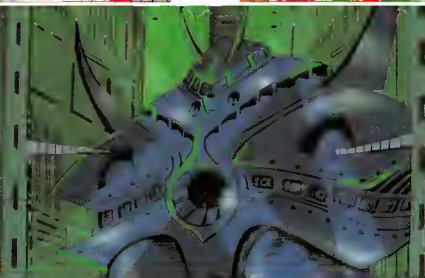
も行ってくれ」



「大丈夫だ 率ずるな。……ミネバを頼む 強い子に育ててくれ、ゼナ」



「これがビッグザムか?」



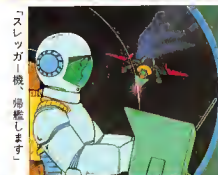
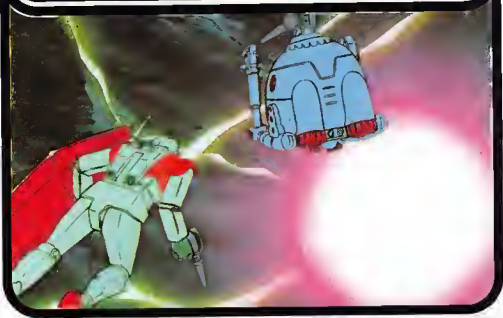
猛攻の中のホワイトベース

ドズルはゼナとミネバを脱出ポットに乗せると、ソロモンを、発進させた。だが彼は諦めたわけではなかった。モビルスーツ隊を再編成させると共に、決戦用に残しておいたリック・ドム、ザクを投入し、戦局の逆転を図っていたのだ。整備塔の中では組み立ての終わったモビルアーマー・ビッグザムが、その姿を現わしていた。

「これがビッグザムか!? 反撃姿勢いそがせい!」

まだ勝敗の行方は判らない……。

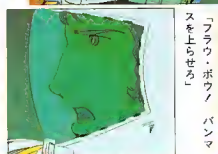
36話 恐怖！機動ビグザム



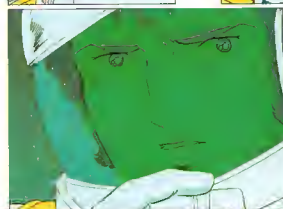
「スレッガー機、帰艦します」



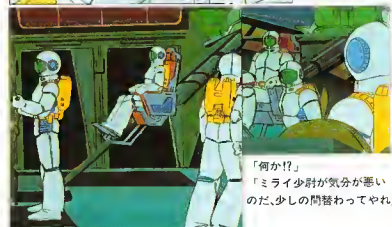
「しまった俺としたことが」



「フラウ・ボウノ
スを上らせろ」



「戦闘中の個人通話は厳禁だが……水兵い
ぜ、ミライ……」



「何か!？」
「ミライ少尉が気分が悪い
のだ、少しの間替わってやれ」

36話 恐怖！機動ビグザム

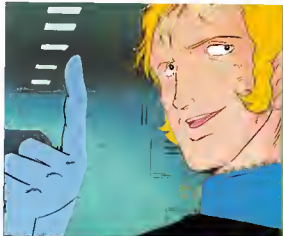
宇宙要塞ソロモンでは、連邦軍とジオン軍の攻防が続く。双方の被害は次第に増え、スレッガーのGファイターも損傷を受け、ホワイトベースに帰艦する。

「Gファイター、スレッガー機、帰艦します。左翼エンジンに被弾のまよう」

不安な顔で振り向いたミライの心を察したフライトは、バンマスに交代を命ずる。

「ミライ、君の気持ちは判るつもりだ。が、僕はいつまでも待つているよ」

ミライはメインブリッジを出ていった。フライトはスクリーンを見詰め、指揮を取り続ける――。



「10分だ！ 俺も燃料補給してくる」



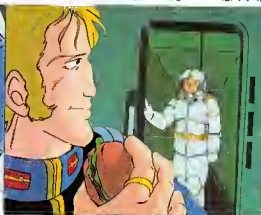
「燃料と弾薬の補給もた、急いでな」



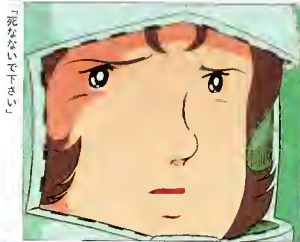
「急げ、消火がすんだら左翼エンジンにかかれーっ」



「中尉……怪我はないようね」



「スレッガー中尉はどこです」



「死なないで下さい」

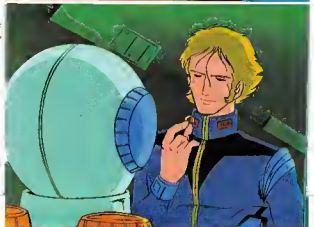


「少尉、やめましょうや、うかつですよ」

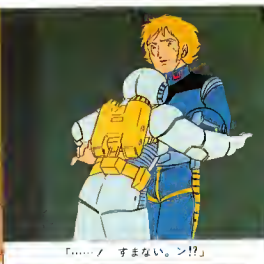
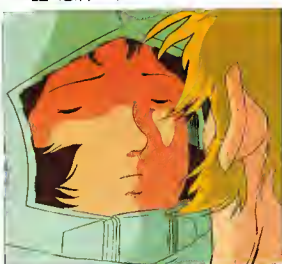


後部デッキではGファイターの
消火、修理作業が続いている。
待機ボックスにいるスレッガー
の無事な姿を見て、ミライは思わ
ず涙ぐむ。ふと、その視線に気が
き、振り向いたスレッガー
「少尉、やめましょうや。うかつ
ですよ」
その時、メカマンから発進も意完
了の連絡が入った。
「……死なないで下さい……」
歩き出したスレッガーの後方から
ミライがつぶやいた。
スレッガーは照れくさそうに振
り向くと、金の指輪を取り出し、
ミライに差し出した。
「おふくろの形見なんだが……
宇宙でなくしたら大変だ。ずっと
いてくれ」

「宇宙でなくしたら大変だ、飛ぶといてく
れ」



「ミライが目を閉じる。」



「…… / すまない。ン!？」



「指輪を頼む、少尉」



「中尉……」



「スレッガー・Gファイター / 出るぞ / ハッチ開け / 」



「マ・クベ司令のもとに、急遽編成された艦隊が、グラナダを発進する」

指輪を受け取るミライ。その時、艦が大きく揺れ、ミライは重心を失ってスレッガーに抱き止められる。見詰め合う二人はいつしか唇を重ね合った……。

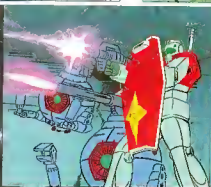
走り去るスレッガーの背中を見送るミライの手には、指輪が握り締められていた。

その頃、月のウラン山脈の南に位置するキシリアの基地グラナダでは、マ・クベ司令のもとに、ソロン救出の艦隊の出撃準備が進められていた。

「さすがだな、基地の中にはかなりの戦力が残っているぞ」



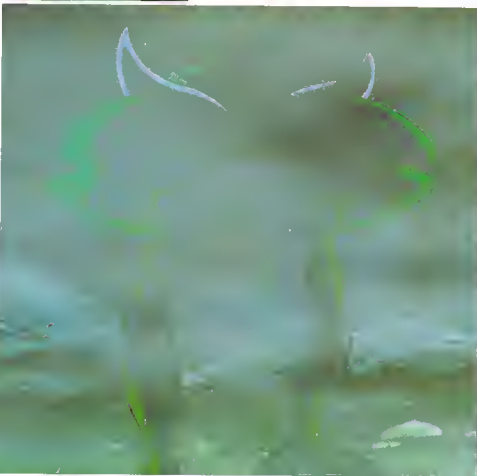
ザクの攻撃を受けるガンダム



ソロモンに進入したG.Mとボール



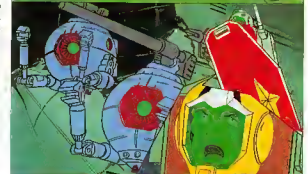
ガトルと闘うセイラ



ビグザムのビーム攻撃



「注意しろ、新型だ!! かいぞ」



ビグザムの強大な破壊力

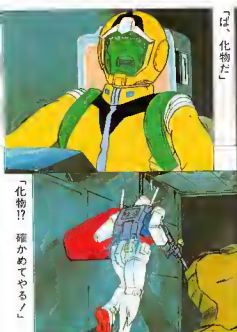


ソロモン内部に踏み込んだガンダムであったが、まだ相当の残存戦力が基地内部を守っていた。もつとも、テアンムの発達させた援軍のモビルスーツ隊が次々と基地に侵入し、闘いは連戦が優勢に展開していた。

だがその時、G.Mのパイロット、シンは味方のG.Mがビーム攻撃で爆発するのを目撃した。

「注意しろ、新型だ!!」

シンは味方のモビルスーツ隊に注意を発するが、仲間は相手を一機とあなどり、ドズルの乗るビグザムへ攻撃を開始した。ビグザムのビームが一閃した時、G.Mもボールも原型をとどめていなかった。おびえつつもビーム・スプレーガンでビグザムに乱射するシン。しかしビームはことごとくせられてしまう。



「化物!!
確かめてやる!」

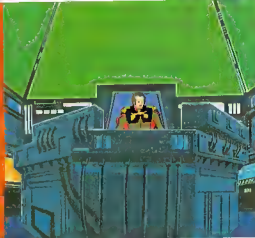
「は、
化物だ」



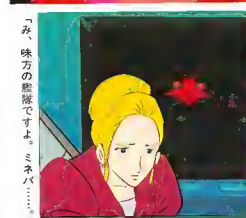
「うわああ……ビ……ビームが……」



「ゼナ……ミネバ……無事に逃げおせたか……」



「こちら司令室です! 閣下は!」



「み、味方の艦隊ですよ。ミネバ……。あ……助かったのよ」

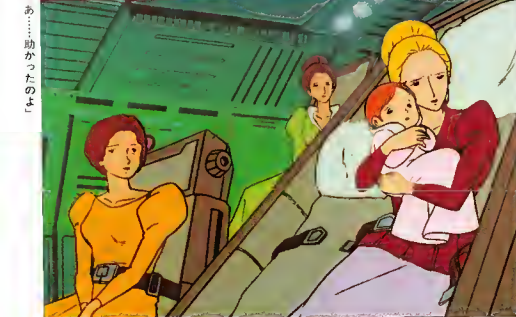


「刺った…回収しろ」



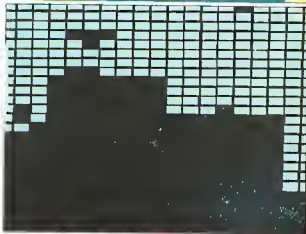
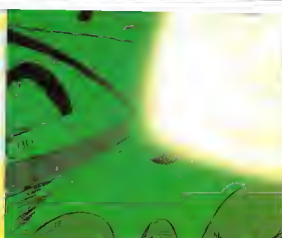
「味方の脱出口ケットです」

「マ・クベ艦は宇宙の兵士の気持をわかっておられぬ」



「は、化物だ」
シン最後の言葉であった。その通信をキャッチしたアムロは、ガンダムをその方向へ移動させた。一たどズルは、彼の身案するラコットの心配をよそに最後まで自らが闘う決意を固める。
ソロモンへ急行するマ・クベの艦隊がゼナ達の乗る脱出口ケットの発見。マ・クベは先を急ぐあまり見捨てていこうとするが、パロムムの反対にない、無事救出される。

「このままでは基地の被害もばかにならない」



破損をまぬがれたソーラ・システム



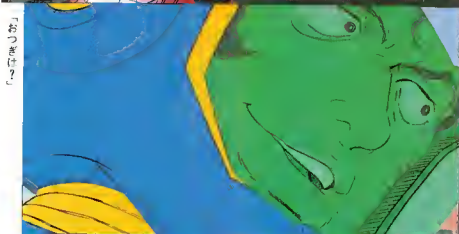
ソロモンの残存艦隊が出撃する。



『敵の新兵器とモビルスーツの為に四分の三は破壊、又は稼働不能であります』



「ソーラ・システムを光復各艦隊は各個に敵を殲滅する」



「おつぎは？」



闘うホワイトベース

ソロモンに侵入したモビルスーツ隊は、ビッグザムのビーム攻撃になすすべく次々に殲滅されていく。だがその強力な破壊力は、基地そのものにもかなりの損害を与えていた。ドズルは、ラコットに残るソロモン艦隊でテアンム艦隊の中央突破を命じ、自身は残存するリック・ドムとザクをひきいてソロモン脱出を試みる。

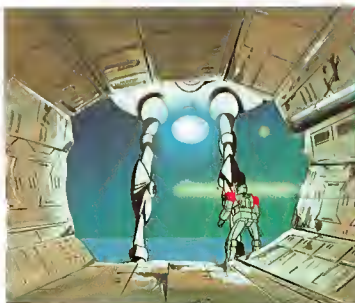
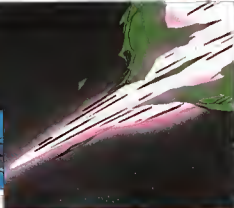
しかしテアンム艦隊は、グラナダから援軍が発進したのをキャッチ、破損をまぬがれた部分のソーラシステムでソロモン艦隊を全滅させる作戦を取る。残存艦の60パーセントをソーラシステムで爆破、残りを艦隊砲撃で沈めるのだ。グラナダの援軍が到着すれば、連邦軍の損害は多大なものとなる。その前に叩かねばならないのだ。



焼きつくされたG Mとボール



「ハハア なんてお手なんでしょ / ほく /」



ビグザムがロケットを噴射する。



「おそかったか?」



ビグザムのビームをよけるキャノン

「な、なんだ?」



「うわ / なんだ?」

ホワイトベース隊は善戦する。すでに連邦でも最強の戦艦にまで成長していた。スレッガーもGフアイターを自分の手足のごとく使いこなし、ジオンの戦艦を美々に撃墜していく。アムロはビグザムの破壊跡に到着、溶けた溶けたモビルスーツを見て驚愕する。

「一体どんな奴だ? モビルスーツをこんな風に破壊できるのは」

先を急ぐアムロは、その真前方を移動中のG Mがロケット貫射のあおりで溶け去るのを見た。それはソロモンから上昇する、ビグザムのものであった。



ソロモンから出るビグザム

灼熱したムサイが爆発する。



「ソーラシステム焦点合せ略号」ヤッチノ！
「まだ生きているのか!」



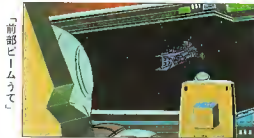
「ソロモンを発進した大型モビル・アーマーを追うノ」



セイラ機被弾



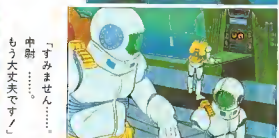
「ビッグザムの目標は!?」
「様方の指揮を頼もう!」



「前部ビームうて」



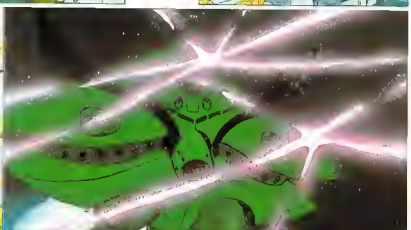
「百八十度回頭だノ
いそげノ」



「すみません……
中尉……
もう大丈夫です!」

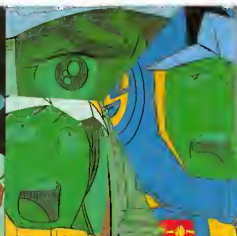


サラミスを含むビーム



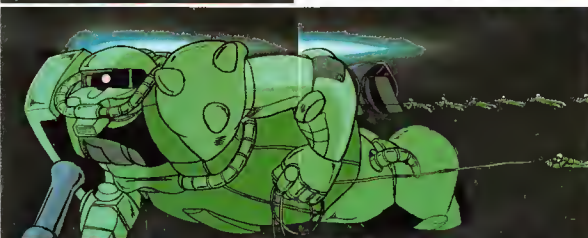
ホワイトベースのブリッジでは
ソーラシステム焦点合せ信号をキ
ヤッチ、色めきたった。すでに破
壊されたものと思っていたのだ。
ソーラシステムの灼熱の光を受け、
ソロモン艦隊は激滅する。ビッグザ
ムは単身で一氣にテアナムの指揮
艦を狙い突進していく。ホワイト
ベースは被弾したセイラ機を収容
してビッグザムのあとを追った。舵
輪をミライが再び握っている。
ビッグザムの武器は強力なビーム
砲だけではなかった。機体のまわ
りに磁界を張り巡らせ、連邦軍の
ビームを寄せ付けないのだ。それ
を目撃したホワイトベースチーム
は愕然とする。





「このままにしておいたら、損害が増えるだけだ」

「確かにビームをはね返した!？」



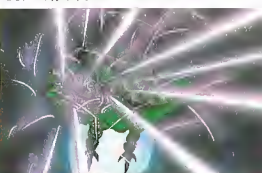
パイロットを引いて行くザク



「遺憾ながらソロモンを放棄する」

各自脱出命令の発光信
号があった

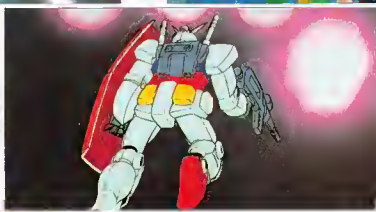
「このビグザムは長距離ビームなど、どういふことはない」



「ああいうのは、やりずらいんだよ」



やられていく連邦軍戦艦



テアンム艦もやぶられた

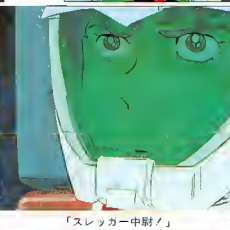
ドズルはソロモンを放棄、自らビグザムを操り、部下を脱出させる。ドムやザクがパイロットを誘引するのを見て、スレッガーは攻撃を仕掛けなかった。ビグザムの力は圧倒的であった。連邦軍の戦艦が一撃のもとに沈んでいく……。遂にテアンムの乗るマゼランにビームが発射され、船体は二つに折れて吹き飛んだ。連邦軍はその旗艦を失ったのである。



「ドッキングをして……Gアーミーでっつこもうって
いうのだな？」



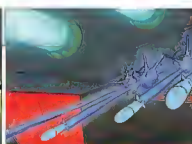
「私情は禁物よ、悲しいけどこれ戦争なのよね」



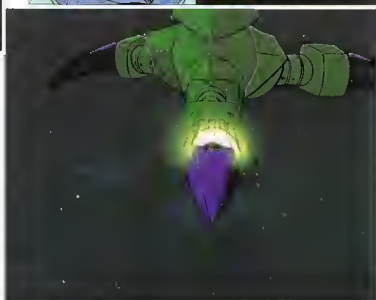
「スレッガー中尉！」



Gアーマーへ左右からノメがぶち込まれた。



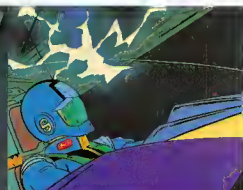
「うか!?
対空防御！」



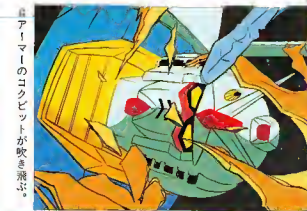
Gファイターのスレッガーから
アムロにドッキングサインが送ら
れた。Gアーミーに合体したもの
の、アムロは質問する。
「中尉、どういうつもりですノ」
「こっちのチームがだめならガン
ダムのビームライフル、そしてビ
ームサーベルだ。いわば三重の武
器があるとなりやあ、こっちがや
られたって……」
「スレッガーは死を覚悟していたノ
「悲しいけどこれ戦争なのよね」
わざとおどけてみせるスレッガー。
Gアーミーは行手に立ちふさが
るザク、リック・ドムを撃破し、ビ
グザムの下方に取り付いた。Gア
ーミーの機首にビグザムのツメが
打ち込まれる。



ガンダムのビームライフルが発射される。



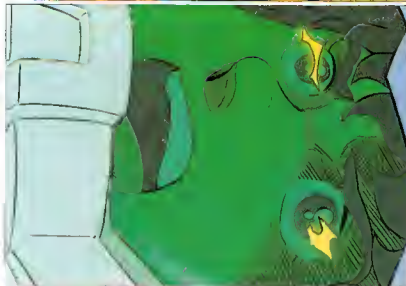
「まだ まだアノ」



「アノ」の cockpit が吹き飛ばす。



「うっ、ニ、ニのオー」



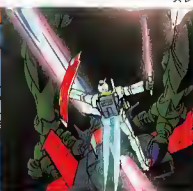
「やったなアノ」



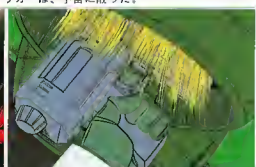
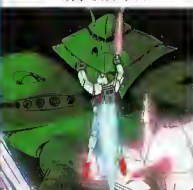
スレッガーは、宇宙に散った。



「うお!?」

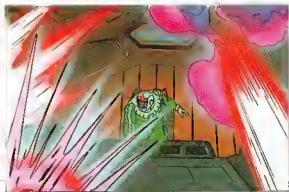


上昇するガンダム



「まだ まだアノ」
スレッガーはGアーミーをビグザムに接近させる。ガンダムのビームライフルがビグザムの右胸を吹き飛ばした瞬間、Gアーミーの cockpit が粉々に砕け散り、スレッガーの身体が宇宙に舞った。アムロは全身の怒りを叩きつけるように、ビームサーベルでビグザムを切りつけた!

「たかが一機のモビルスーツに」



「おっ」



「な、何物なのだ？」



「ジオンの栄光 この俺のプライド やらせはせん！ やらせはせん！ やらせはせんぞォ！」

「な……なんだ？」

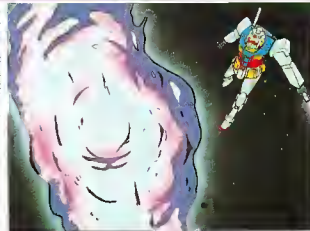


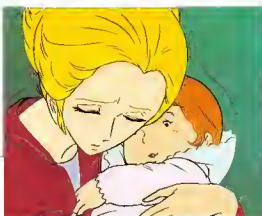
アムロは飛びのく。



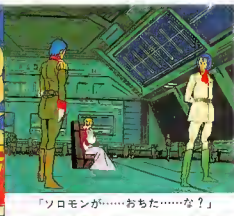
ガンタムの攻撃に、ビグザムの機能は完全に停止した。
「たかが一機のモビル・スーツに このビグザムがやられるのか!？」
小爆発を繰り返す機体からドズルは無反動砲をつかんで飛び出し、ガンダムに乱射攻撃を掛けた。
「な、何者なのだ？」
アムロはドズルの執念にたじろぐ。とその時、ドズルの背後に立ち昇る恐しい影ノ アムロが見たもの、それはドズルの怒り、恐れ、そして執念の凝縮であったのかもしれない。
そのイメージがフツと消えた。ドズルの体が機体の爆発に呑み込まれた瞬間だった。
アムロの意識が飛びのいて宇宙を走る……。ガンダムは爆発地点から離れた場所に漂っていた……。

ビグザムが爆発する。

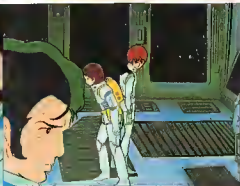




「大佐は、このクワジンでゼナ様をグラナダへお届けしろ。」



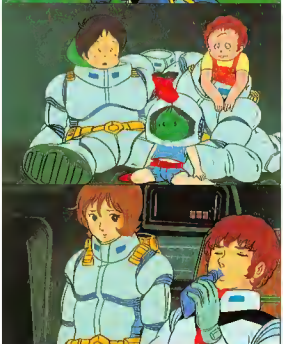
「ソロモンが……おちた……な？」



「うそだって……うそだって、いえないの、アムロ……」



体をなげたミライ



ソロモンは落ちた……



マ、クベ達はソロモン陥落を知
る。バロムはクワジンでゼナをグ
ラナダに送り届け、マ、クベは情
報収集と脱出者救助にあたること
になった。ゼナは夫の死に顔をう
ずめる。
そしてホワイトベースでも、
「うそだって……うそだって、いえ
ないの、アムロ……」
ミライはアムロにとりすがった。
突然姿を消した仲間——戦場でそ
れは死を意味する。避けようのな
い疲労感が全員を襲う。
今、ひとつの闘いが終了した！
——ソロモンはおちた——

27話～36話キャラクターシート

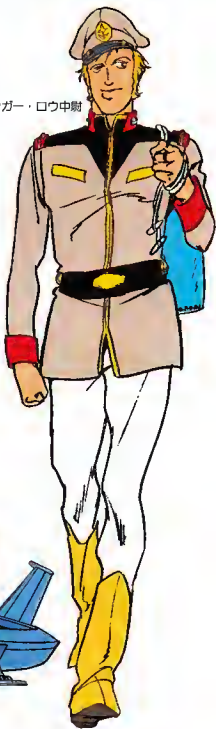


●Gパーツをはいだガンダム
(32話)

●ビグロ (31話)



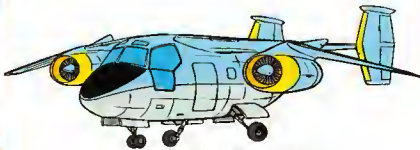
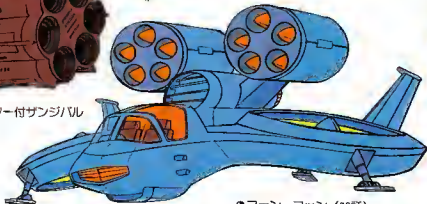
●スレッガー・ロウ中尉



●ブースター付ガンジナル
(31話)



●ファン・ファン (28話)



●ベルデ兼組の飛行機 (28話)

CHARACTER SHEET

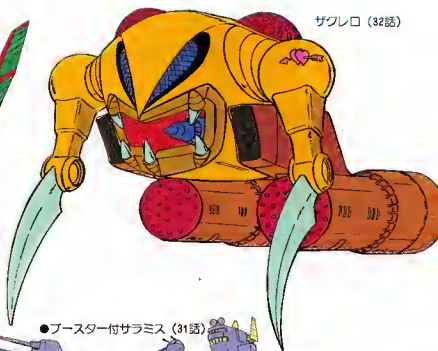
●対潜装備のガンベリー (28話)



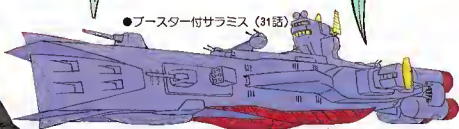
●スゴック
(27話)



ザクレロ (32話)



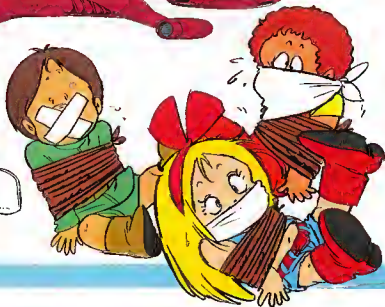
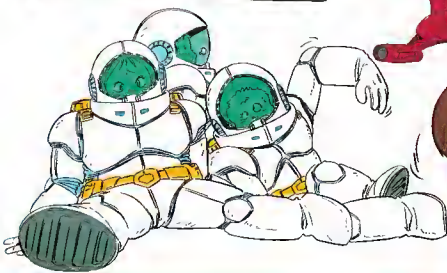
●ブースター付サラミス (31話)



●ブースター付マゼラン (31話)

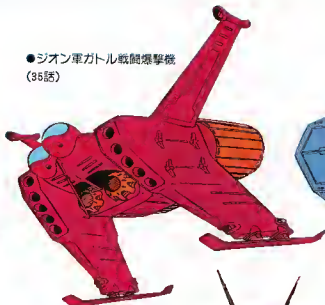


●ジオン軍重巡チベ (33話)

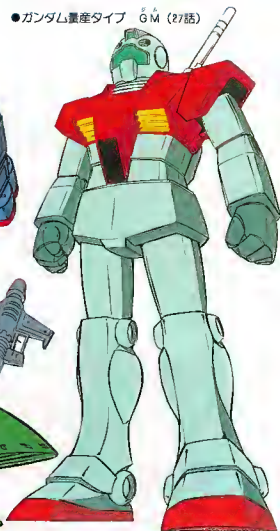


CHARACTER SHEET

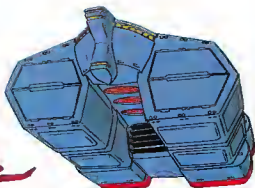
●ジオン軍ガトル戦闘爆撃機
(35話)



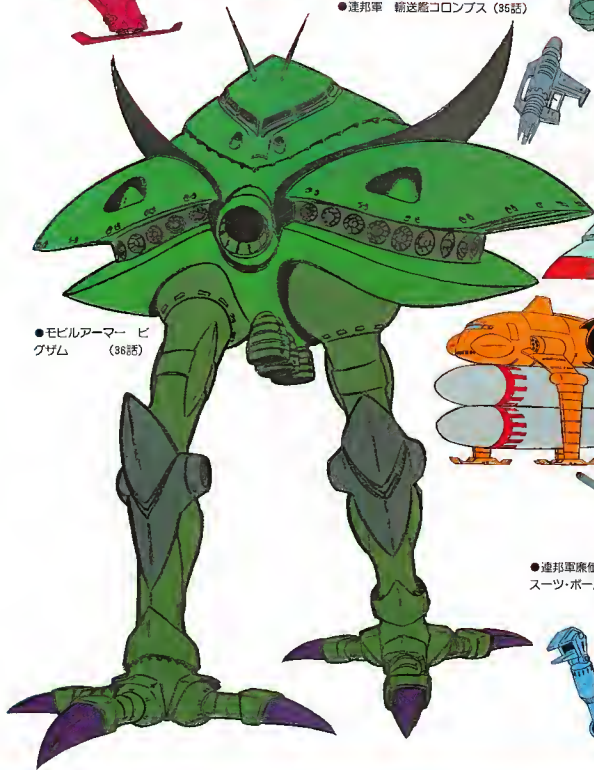
●ガンダム量産タイプ GM (27話)



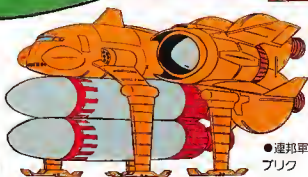
●連邦軍 輸送艦コロンプス (35話)



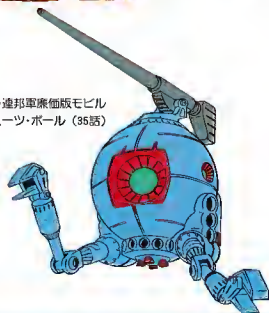
●モビルアーマー ビ
グザム (36話)

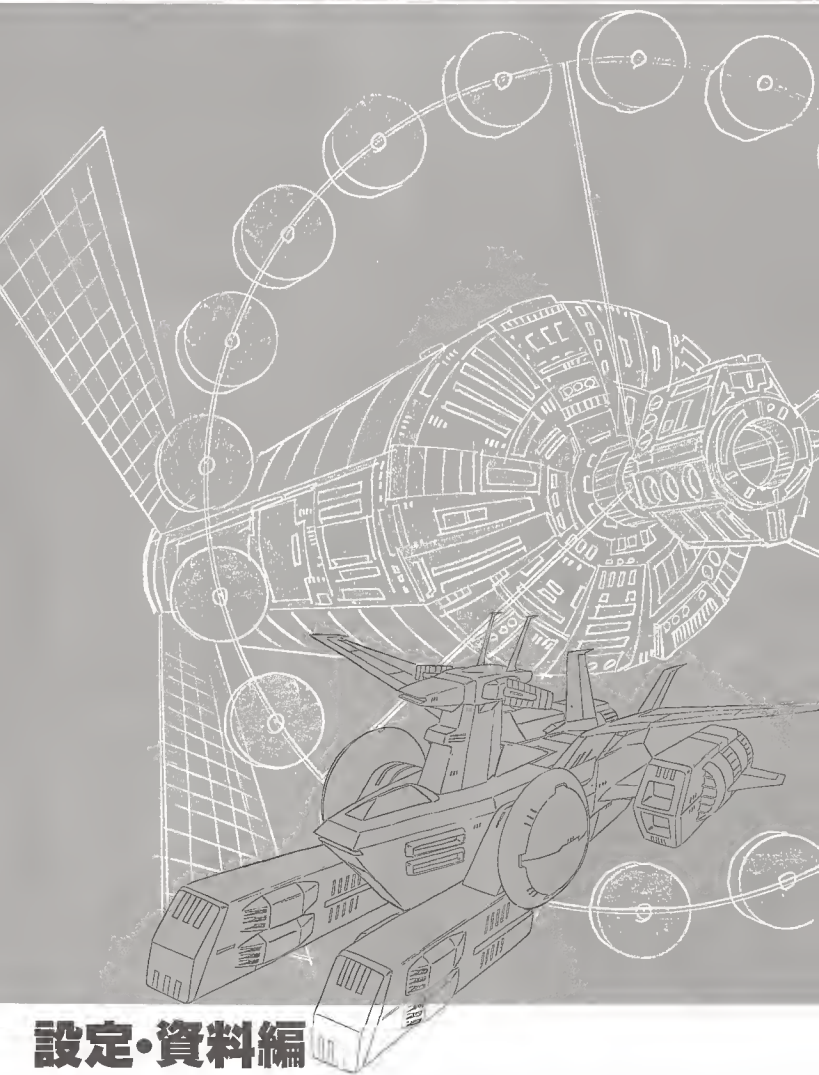


●連邦軍 突撃艇 パ
ブリク (35話)



●連邦軍廉価版モビル
スーツ・ボール (35話)





設定・資料編

●人物設定1



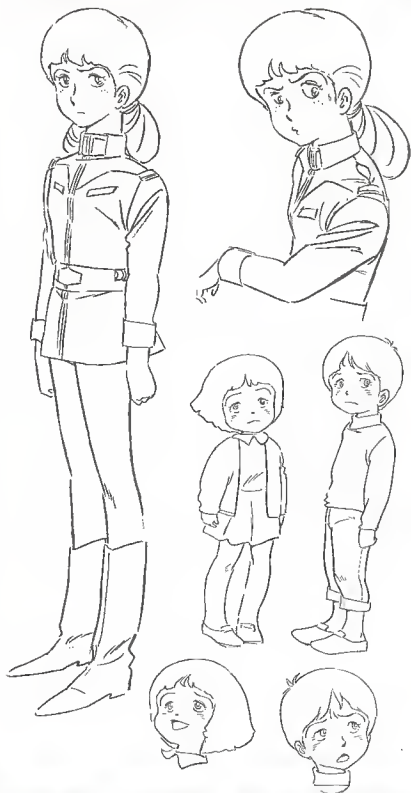
●コノリー〈27話〉

ブーンの副官でシーランスの乗員。ミハルにスパイを命じ、ホワイトベースに潜入させた。バッグの中にミハル用の連邦軍の制服が入っている。



●カラハ〈27話〉

ズゴックの搭乗員。ガンキャノンを窮地に陥らせたが、共同作戦を図ったガンダムとガンタンクにより、ズゴック共々炎上した。



●フラガナン・ブーン〈28話〉



ベルデの漁業組合員に化けたところ。ミハルから情報を聞き出す。戦闘服はモビルアーマー、グラブプロで出撃するときに着用する。水中戦でガンダムを追い詰めるが、ビームサーベルで直撃、戦死。



●ミハル・ラトキエ〈27話〉

コノリーに渡された連邦軍の制服着用。ホワイトベースではカイに匿まってもらう。ブーンに目的地を漏らしたが、戦闘開始後、カイと共に出撃。ミサイル発射の爆風で吹き飛ばされる。彼女の死は、カイに大きな変化をもたらせた。



●ジル、ミリー〈27話〉

ミハルの弟と妹。ミハルの死をいまだ死らず……。



●人物設定2



●アクアラング兵<28話>

ジオンの水中作業兵。



●キャリオカ軍曹<28話>

ブーンの部下。民間人に化け、
ホワイトベースに潜入した。
ジオン訛の強い人。



●カイ・シデン<28話>





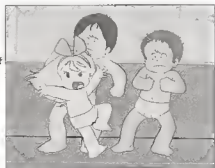
● セイラ（ブラウス姿）〈29話〉

制服の上着を脱いだところ。アンダーブラウスは男女同形式のものを着用。



● 女医先生〈29話〉

ジャブローの医師。診察をいやがる子供達をあつかうのがうまい。



● 身体検査をいやがる三人
〈29話〉

● ウッディ大尉 〈29話〉

ジャブローの技術士官。マチルダの婚約者マチルダの意志を継ぎ、ホワイトベースを守るべく出撃し、ズゴックのカメラ・アイをつぶすが戦死。



●人物設定3



回想の中での結婚式シーン。本来ならアムロ達がジャブローに着いた頃、式が行なわれるはずだった。

●ウッティとマチルダ〈29話〉



●アントニオ・カラス中佐
〈29話〉

ジャブローの防衛軍士官。



●ゴップ提督〈29話〉

ジャブローの提督の一人。ホワイトベースがティラム燃隊に配属されたことを伝えた。政治家であったミライの父とも親しかった。



●ボラスキニフ曹長〈29話〉

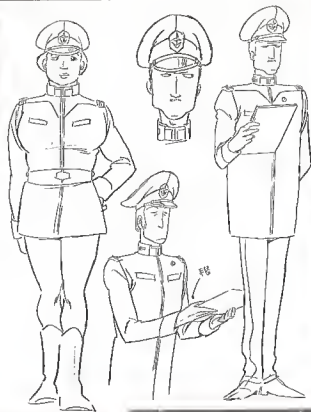
ゾック搭乗員。ジャブローに侵入するが、ガンダム のビームライフルがコクピットを直撃して即死。





●育児官〈30話〉

基地内の育児センターの担当者。このセンターに収容されるはずだったキッカ達のホワイトベース同行を認めてくれた。



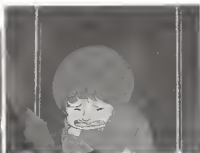
●軍務官〈30話〉

アムロ達に辞令を渡した連邦軍の少佐。コチコチの軍人。



●しばられた三人〈30話〉

ジオン工作員に見つかり、縛られたところ。この後、なわをほどき、工作員の仕掛けた爆弾を外すとバギーを運転、大活躍をやったのけた。



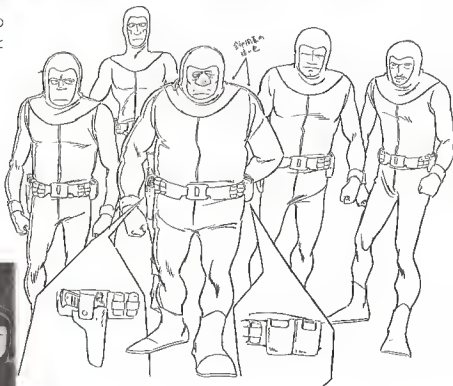
●ませた少年〈30話〉

育児センターにいた少年。キッカ達がセンターを逃げ出すきっかけを作ったのがこの子。



●工作員達〈30話〉

アツガイに乗り、ジャブローに侵入したジオン兵。爆弾を仕掛けるが失敗におわる。4機のアツガイも、ガンダムの前にあえなく敗れ去った。



●人物設定 4



●スレッガー・ロウ中尉〈31話〉

ジャブローで新たにホワイトベースに配属された人。主砲、Gファイターを扱う。

陽気で頼もしい行動派タイプ。彼の存在はアムロ達の大きな心の支えになる。

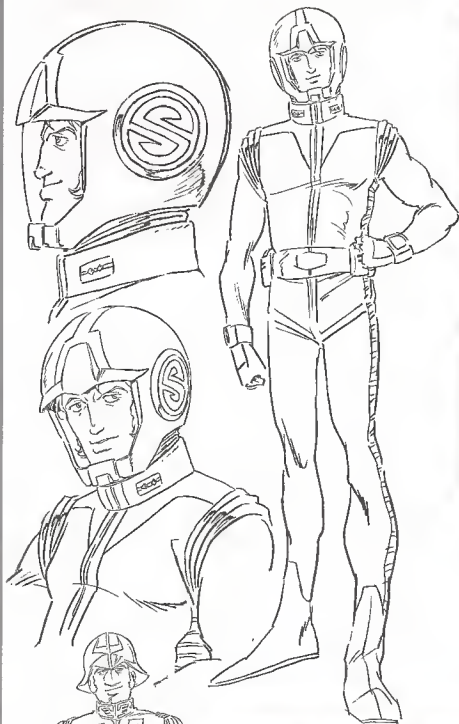
徐々に惹かれていったミライと初めて心が通い合った時、彼は帰らぬ人となる。



●トクワン少尉〈31話〉

モビルアーマー、ビグロのパイロット。ガンダムを追いつめるが、ビームでビグロごと爆死。





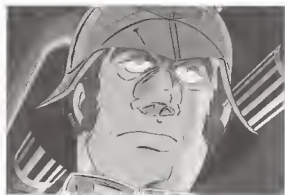
●スレッガー（ノーマルスーツ）32話

青いスーツを着用。ヘルメットの“S”は、スレッガーが暇にあかせて書いたもの。



●デミトリイ曹長〈32話〉

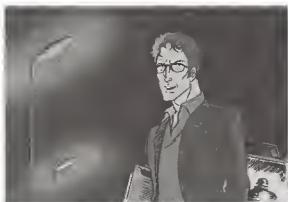
ザンジバル配属のモビルアーマー、ザクレロのテストパイロット。シャアに無断で、実用テスト前に放棄されたザクレロに乗り出撃していった。ガンダムに傷を負わせはしたものの、攻撃を読まれて撃破された。



●ドレン大尉〈32話〉

かつてはシャアの副官で中尉だったが、いつのまにか3隻のムサイのパトロール艦隊の指令になっていた。ガンダムの攻撃により3隻とも沈められてしまった。

●人物設定5



●テム・レイ〈33話〉

アムロの父で元連邦軍技術士官、ガンダムの提唱者。サイド7のザク爆破に巻き込まれ死亡と思われたが、しっかり生きていた。脳に障害をおこし性格が変わっている。サイド6でジャンク屋に下宿していた。



●カムラン・ブルーム〈33話〉

サイド6の検察官。ミライの婚約者である。「君のことを必死で捜させた。いくら費用が、かかったか知れないくらいだ」が、彼の性格のすべてを現わしている。全キャラクター中、お金の事と『愛している』のセリフをはいた唯一の俗物人間。



●カムランの部下へ33話





●ベルガミノ 〈33話〉

サイド6の修理屋。連邦、ジオン共に顔が
きく。彼のドックは領空外に浮かんでいる。



●コンスコン少将 〈33話〉

ドズルがジャアの無能さを証明するために
送り込んだ人。戦略に秀でていたわけでもな
く、出世のみを考えていたフシがあった。ホ
ワイトベースに艦隊を壊滅され、チベでの特
攻も失敗、ドズルの采配ミスだった。

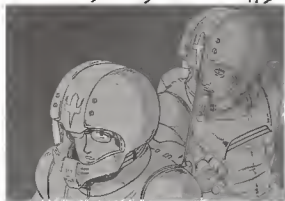


●人物設定6

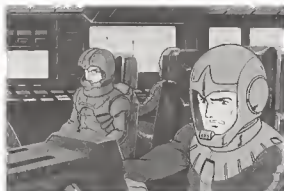


●シムス・アル中尉 <33話>

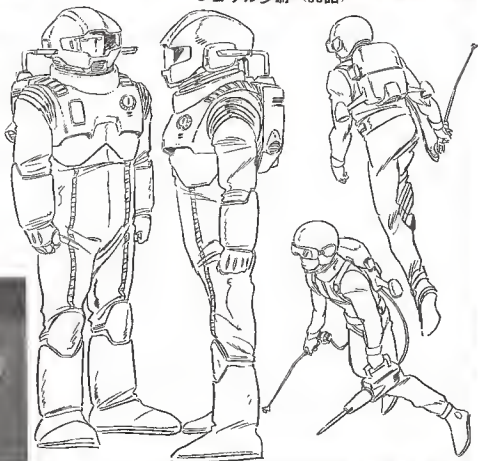
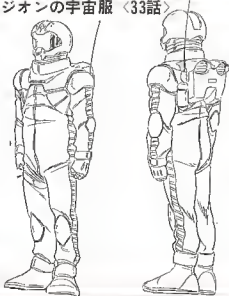
モビルアーマー、ブラウ・プロの開発スタッフの一人でテストパイロットも兼ねている。ブラウ・プロのテスト中、故障をおこしたところをGアーマーに発見され、右半分を失う。当人は脱出、さらに研究を進める。



●ジオンの宇宙服 <33話>



●コワル少尉 <33話>



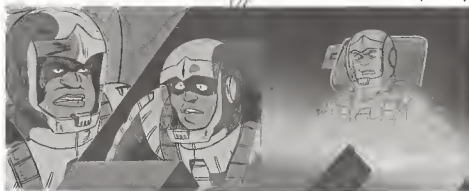
●サイド6宇宙服を着た作業員 <33話>

●サイド6コロニー内港湾作業員 <33話>



● ララァ・スン 〈34話〉

シャアに拾われ、ジオンのニュータイプ研究機関、フラナガンに預けられていた。シャアの恋人である。



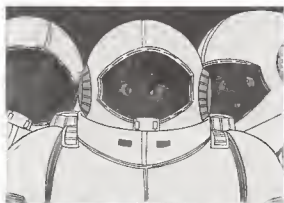
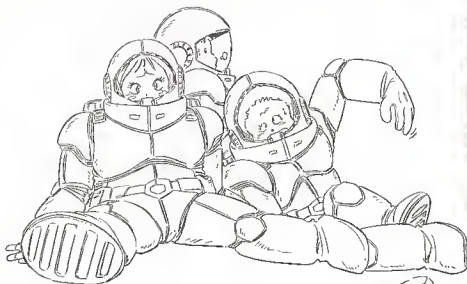
● リック・ドムの兵士X・Y・Z 〈34話〉



● カムラン機のパイロット 〈34話〉



●人物設定7



● ノーマルスーツを着た3人〈35話〉

ソロモン攻略のさい、重力ブロックに押し込められたところ。専用のスーツがなかった。「こんなの着てなきゃ戦えんだ!!」と騒ぐ。



● テアム提督（中将）〈35話〉

ソロモン攻略戦の最高指揮官。ソーラリステム初の使用者。

旗艦マゼランと共に、ビッグザムのビーム砲によって爆死。



● サンマロ軍曹、医療担当官〈35話〉

● 看護兵のマサキさん〈35話〉



●ゼナ、ミネバ・ラオ・ザビ〈35話〉

ドズルの妻と子供。連邦軍が攻めてきたので、脱出ロケットでソロモンを出る。

ソロモン救出に向かうマ・クベ艦隊に救助された。



●ワッケイン指令〈35話〉

第3艦隊の指令官でありマゼランの艦長。ソロモン戦の先鋒を務める。かつてはルナツーの最高指揮官で、ホワイトベースをまこいじめしたが、現在はその実力を正当に評価している。



●ラコット大佐〈35話〉

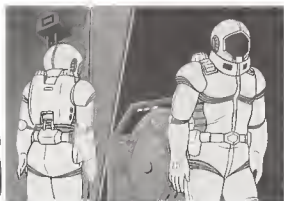
ドズル付参謀。ドズルのかわりにソロモンの指揮をとることもある。

●人物設定8



●バロム大佐〈36話〉

生粋の軍人。ソロモン救出に向かうが、まにあわず、ゼナ達の救出におわる。



●バンマス軍曹〈36話〉

ホワイトベースの交代用員。ミライのかわりに操舵することもある。



●シン少尉〈36話〉

GMの乗員。ビッグザムの第一発見者だが、ビーム砲で爆死した。



●マ・クベ大佐〈36話〉

キシリアの右腕で絶対的の忠誠を誓っている。元、地球鉱物資源発掘の指令官で、オデッサ戦にやぶれると単身地球を脱出、キシリア軍に配属される。

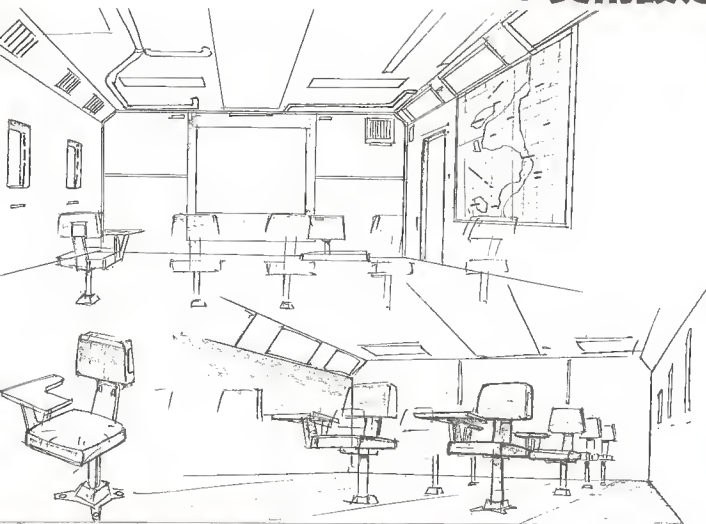


●美術設定



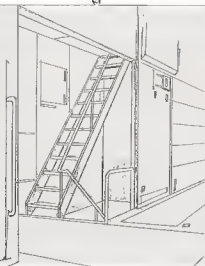
●美術設定1

●ホワイトベース・フリーフィングルームへ27話～
レビル將軍達を招いて、アムロがGメカの技術解説を行ったところ。

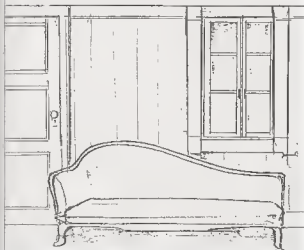


●破壊された市街〈27話〉

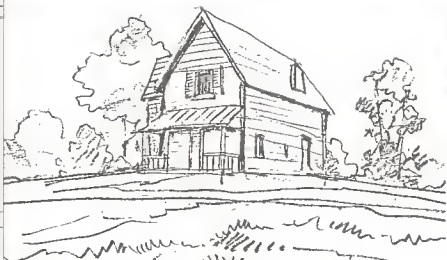
●ホワイトベースの階段へ27話～
カイがホワイトベースを降りる時に使用したもの。



●カイが横になったソファ〈27話〉



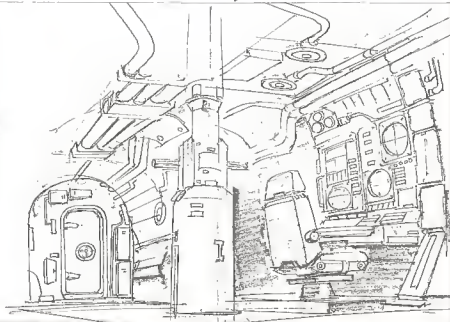
●ミハルの家〈27話〉



●ダイニングルーム〈27話〉



●ユーコンの艦橋〈27話〉



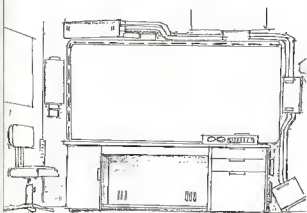
●階段〈27話〉



●美術設定2

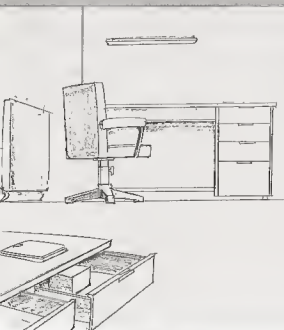
●第4デッキわきの待機室へ28話

ホワイトベース後部発着場の横にある
パイロット待機室。民間人に化けたブー
ンが入室を許された場所。



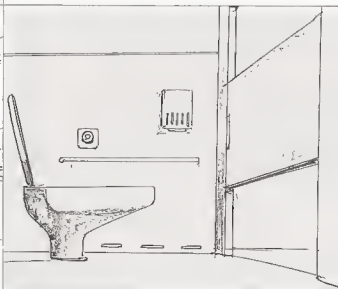
●ブライトの部屋の机へ28話

スパイにきたミハルが目的地を探っている
時カイが入ってきたのであわてて隠れた机。
引き出しの中はカラッポ。



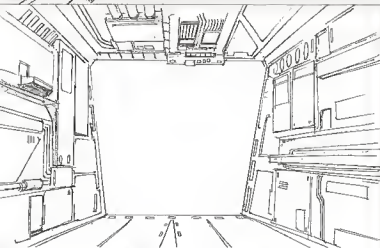
●ホワイトベースのトイレへ28話

ブーンがミハルに連絡をとった所。



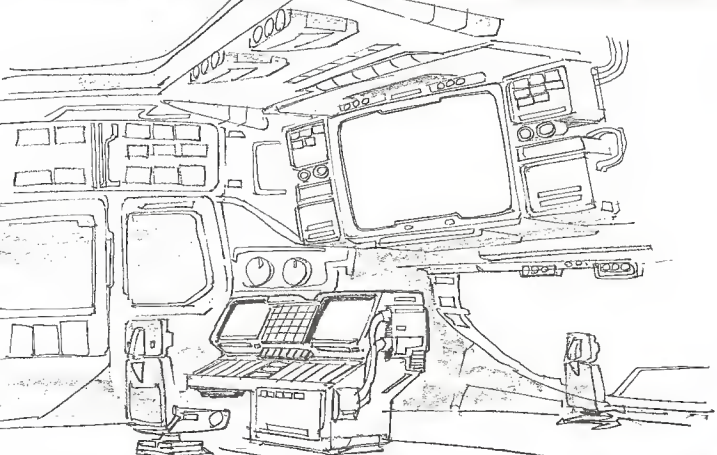
●後部デッキ（第4デッキ）へ28話

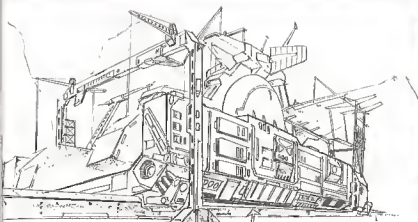
ブーンの乗った民間機が着陸した所。普段あまり使われない。



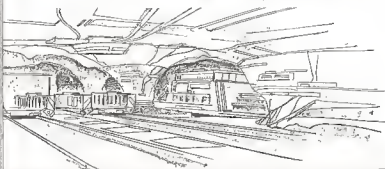
●マッドアングラー司令部へ28話

シャアが指揮をとっていた所で、2つ突き出ている司令塔の中にある。





ドック



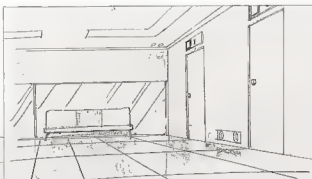
●保健庁・外観〈29話〉

隊員の健康管理を行う場所。ホワイトベース乗員もここで身体検査を受けた。



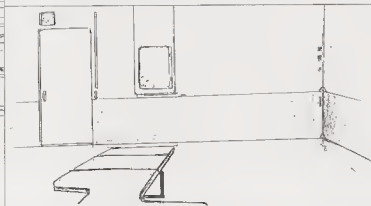
●ジャバローの宇宙船用ドック〈29話〉

宇宙船の修理、建造を行う所でホワイトベースもここで修理を受けた。下のレールはガントリー。ドック内には、ホワイトベースの2番艦が整備を受けていた。



●保健庁・ロビー〈29話〉

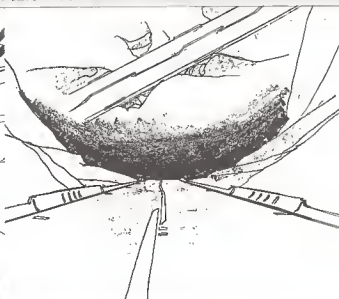
番号のついているのが診察室。
手間どったアムロを、カイとハヤトが待っていた場所。

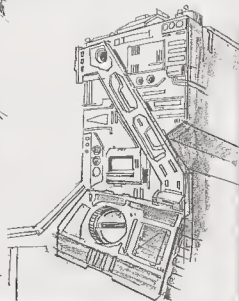
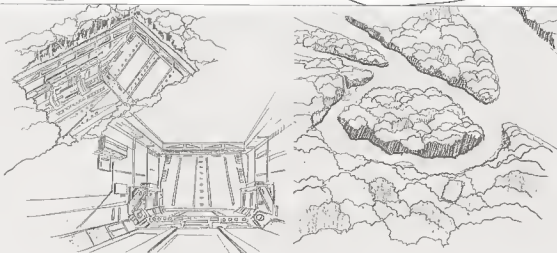


●保健庁・女子更衣室〈29話〉



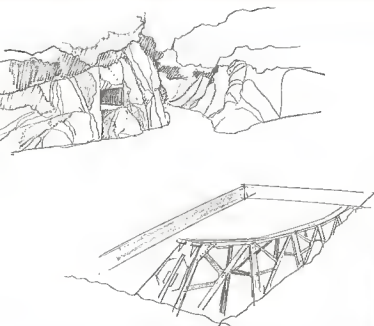
●ジャバローの地下通路〈29話〉 空洞内の要所を、ハイウェイが結んでいる。





●ジャブロー・宇宙船用出入口 <29話>

基地最大の出入口で、ハッチがジャングルにカムフラージュされている。中に入るとすぐガントリーがあり、それごとドックへ移動する。



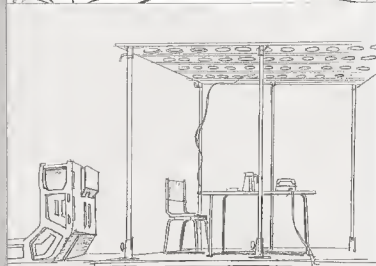
●ジャブロー・戦闘機発進カタパルト <29話>

フライマンタ用カタパルト。基地の各所にある。

●ジャブロー・中型入口 <29話>

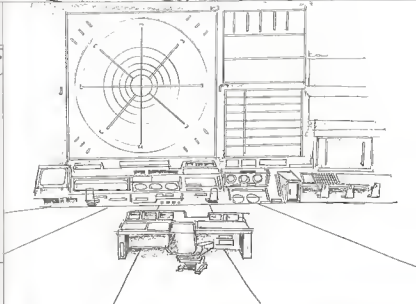
おもにモビルスーツ用で、宇宙船用出入口より川の上流にある。

●基地内 <29話>

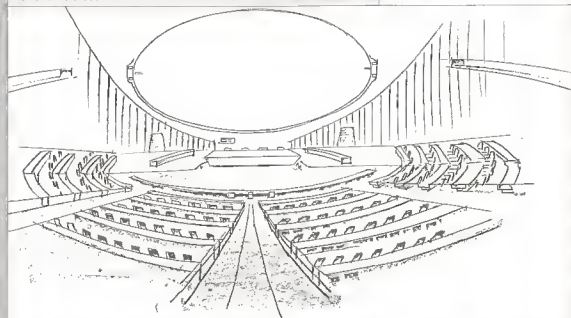


●作業指令所 <29話>

ワッディ大尉がホワイトベースの修理を監督していた所。



●作戦室 <29話> 連邦最高指令室。



●会議室 <29話> ジャブローの会議室。ブライト達が新たな指令を受けた場所。



●指令所の机 <29話>

●美術設定4

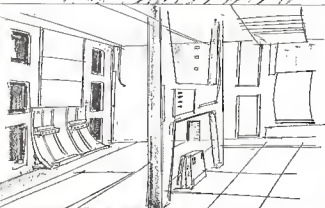
●工場へ30話〉その地図(ラフ)



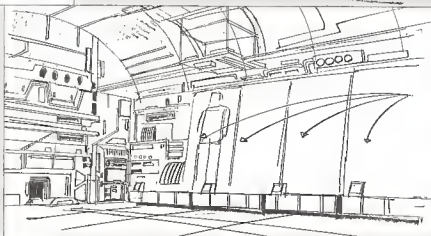
●工場入口へ30話〉



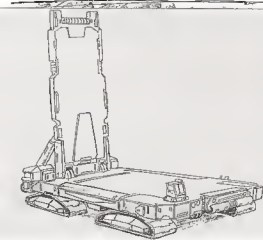
●工場内の一室へ30話〉



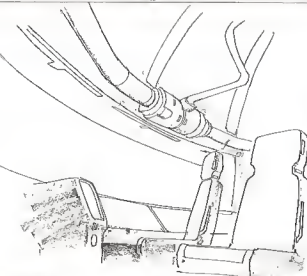
●GMのドックへ30話〉



●専用のトレーラーへ30話〉



●トーチカ内部へ30話〉

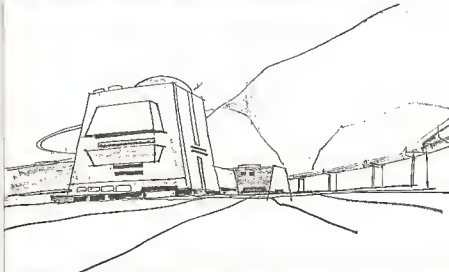


●トーチカ〈30話〉

定時報告のために、つねに何人かが詰めている監視所。



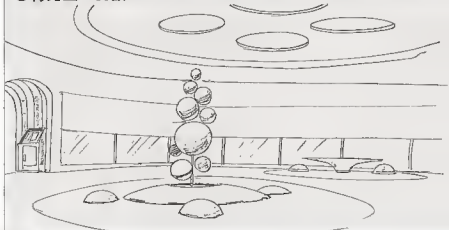
●育児センター 〈30話〉 親が軍属である子供を預る所。



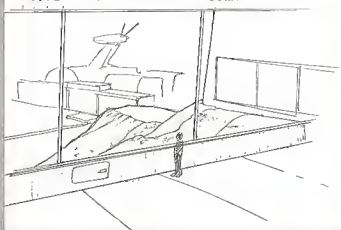
●すべり台 〈30話〉
子供達の遊び場



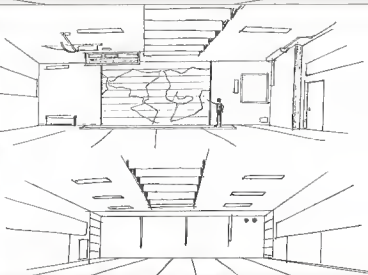
●育児室 〈30話〉 子供達の遊び場。



●育児センター・ロビー 〈30話〉

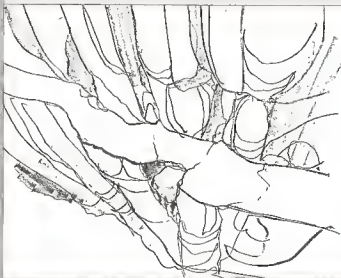


●参謀本部の講堂 〈30話〉
アムロ達が辞令を受けた所。



●会議室 〈30話〉

ブライトに参謀達がティターン艦隊配属を命じた部屋。



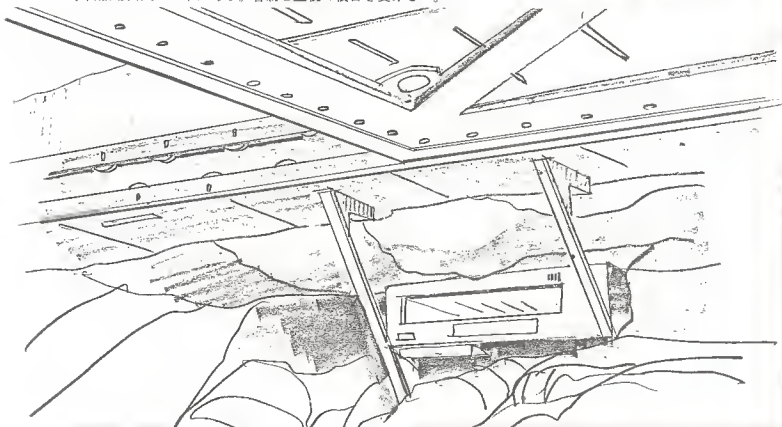
●鍾乳底 〈30話〉
人がやっと通れるくらい細い道がある。



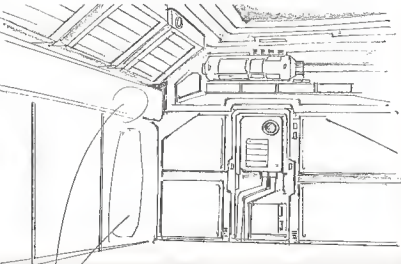
●ジャブローの通路 (ハイウェイ)
〈30話〉

●ジャブローの出口の内側ハッチ、監視所〈31話〉
宇宙船用出入口の下にある。管制と監視の役目を受けもつ。

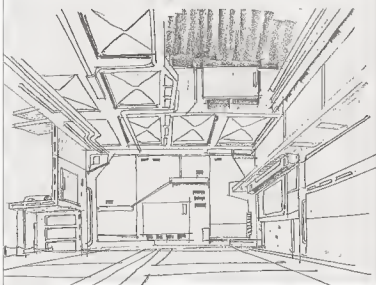
●美術設定5



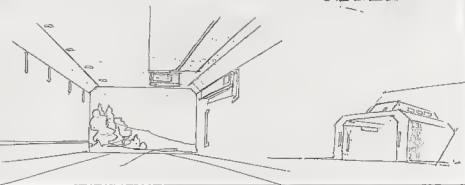
●ホワイトベースの倉庫〈31話〉
スレガーが宇宙服に着がえた所。



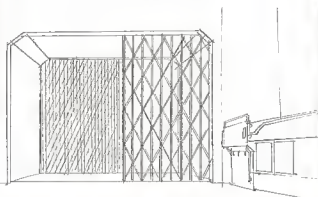
●ホワイトベースの倉庫〈31話〉



●居住区側の出入口



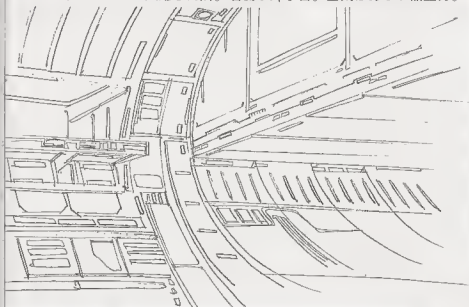
●サイド6のエレベーターの扉〈33話〉
エレベーターはスペースゲートから居住区まで、およそ3キロほど続いている。
人だけでなく、車も乗せられる。



●表示板

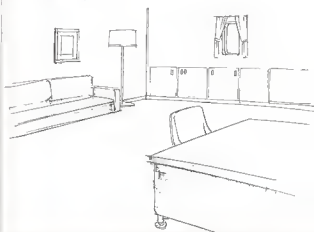
●サイド6のスペースゲート〈33話〉

ホワイトベースが入港した所。右側が外宇宙。空気はあるが無重力。

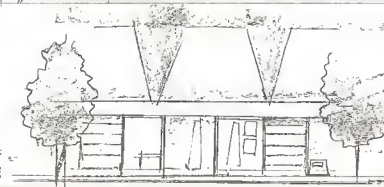
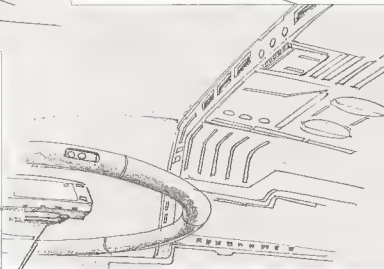
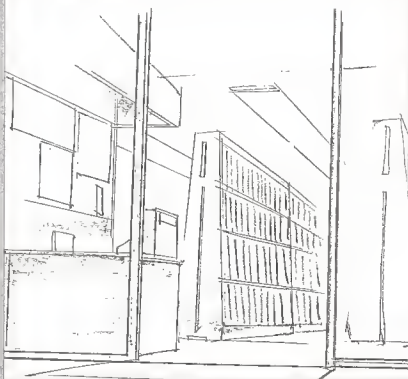


●ホワイトベース艦長応接室〈33話〉

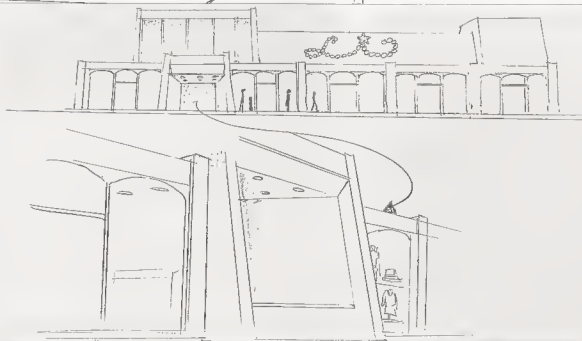
ブライトが武器の封印にきたカムランを迎えた部屋。



●本屋〈33話〉 アムロが父を見つけた店。



●サイド6の街並み〈33話〉



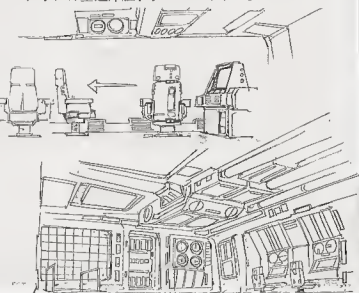
●ジャンク屋 <33話>

テム・レイが2階に居候している。ジャンク屋とは中古部品を売る店のこと。



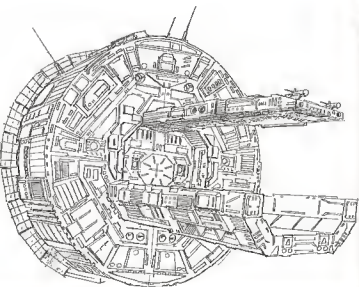
●チベのブリッジ <33話>

ジオンの重巡洋艦、チベのブリッジ。



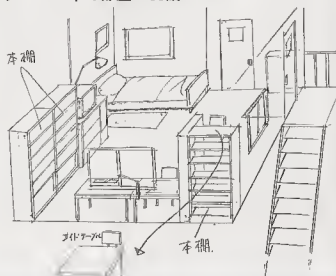
●浮きドック <33話>

ベルガミノのドックでサイド6付近に浮いている。ここで連邦、ジオン共に艦の修理をする。



●美術設定6

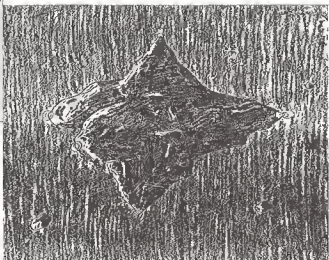
●テム・レイの部屋 <33話>



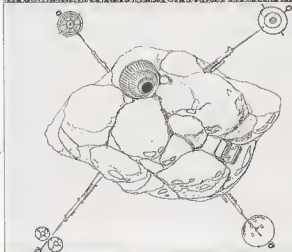
●サイド6付近の岩塊 <33話>
ブラウ・ブロが停泊した所。この付近は、戦争でこのような岩塊が多数存在する。



●宇宙要塞ソロモン <33話>
サイド6のあった空域に置かれたジオンの宇宙要塞。ソロモン攻略戦で連邦軍に占領された。

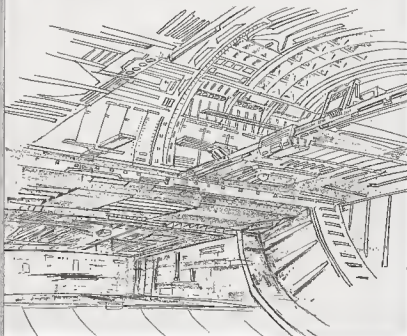


●衛星ミサイル <33話>
岩塊にエンジンをつけ、敵艦に体当たりさせるもの。



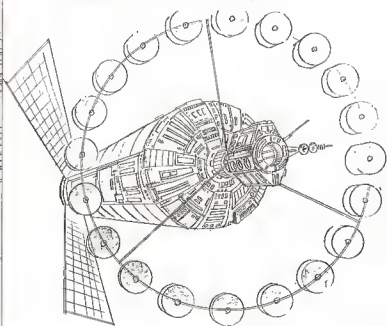
●サイド6 港内 <34話>

サイド6のスペースゲート内部。



●サイド6 <34話>

ジオンにも連邦にも属さない中立サイドだが、実はジオンの補給地的色あいを持っている。



●サイド6の郊外 <34話>
郊外の居住区。



●シャアとラファがTVを見ていた部屋 <34話>



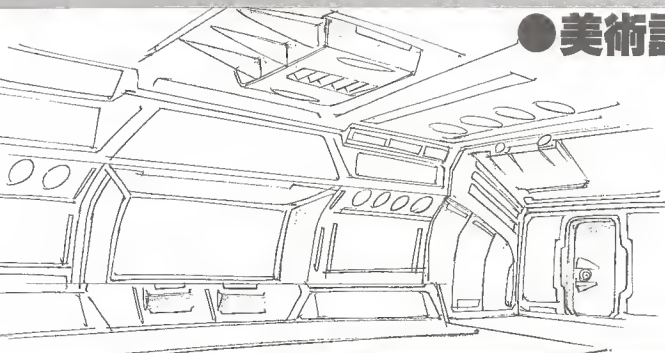
●ラファの家 <34話>

アムロが雨やどりに立ち寄った家。

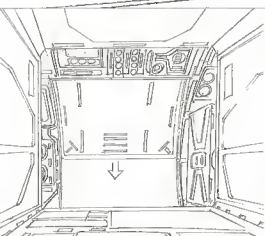


●美術設定7

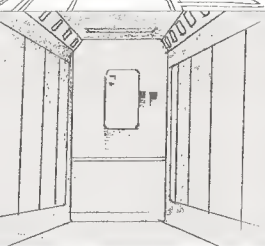
●ホワイトベース内の
ランチ格納ブロックへ35話
ブライトがランチを発進させた所。



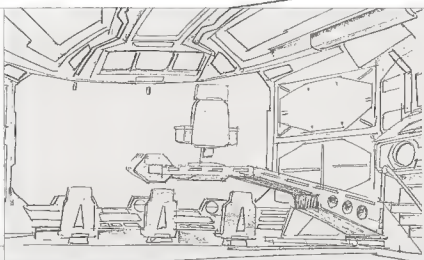
●ザンジバルのエアロック
へ35話
ランチの発着場。



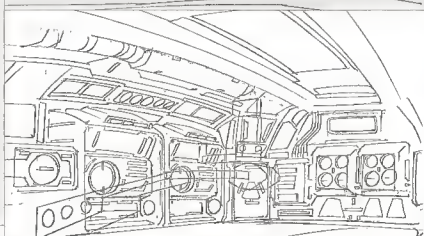
●エアロック内通路へ35話
カムランがシャアと会った所。



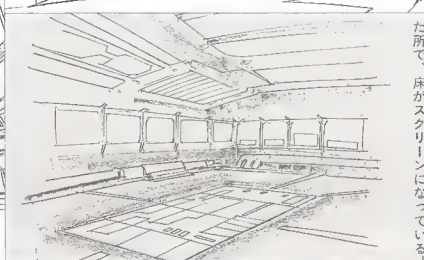
●マゼラン艦橋（前部）へ35話
ワッケインとブライトが再会した場所。



●マゼラン艦橋（側面・後部）
へ35話

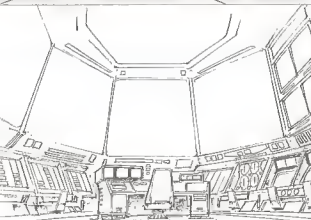


●マゼラン艦内へ35話
ワッケインとブライトに作戦指示をした所で、床がスクリーンになっている。

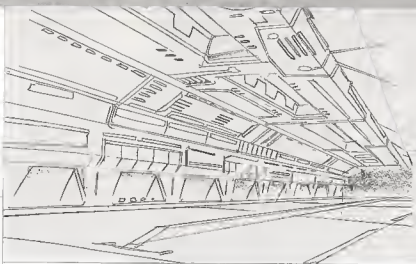


●ソロモンの作戦室〈35話〉

ソロモンの中枢部。ドズルが指揮をとる。

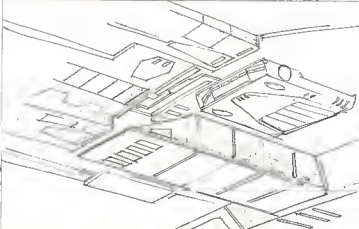


●ソロモンの港へ35話

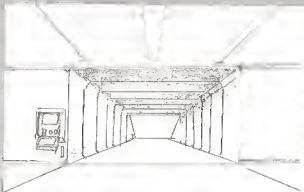


●港内ブロックへ35話

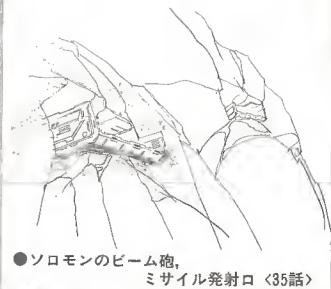
バブラ艦専用港。ビッグザムを運んできたバブラ艦もここに着艦。



●港への通路へ35話



●ソロモンのビーム砲、ミサイル発射口へ35話

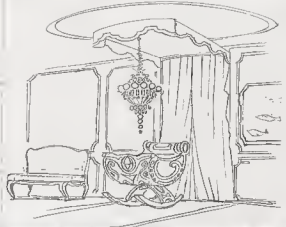


●ビッグザム格納庫へ35話

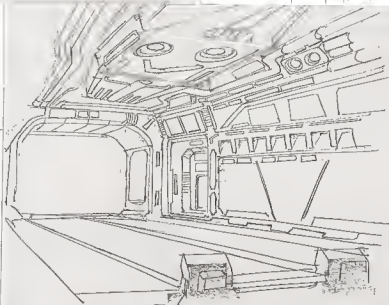
ビッグザムの組立て工場でもある。

●ゼナ、ミネバの部屋へ35話

ミネバの書見室もあり、つねに数人の侍女がいる。



●入口へ35話

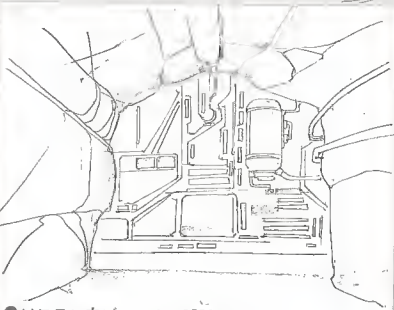


●脱出ポット格納庫へ35話

ゼナとミネバの乗った脱出ポットの発射口。

●ソロモン内ブロックへ35話

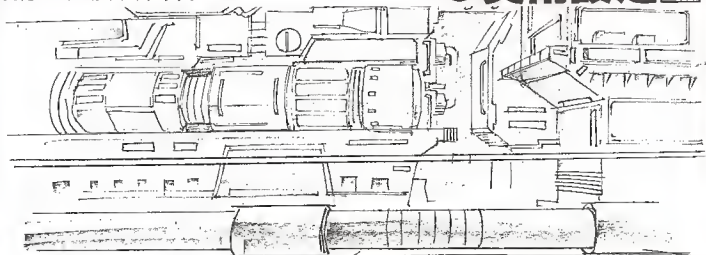
ガンダムが侵入してきた所。



●ホワイトベース第2デッキ <36話>

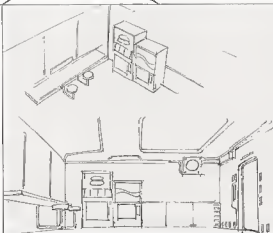
中央を走るパイプはリフトグリップ

●美術設定8



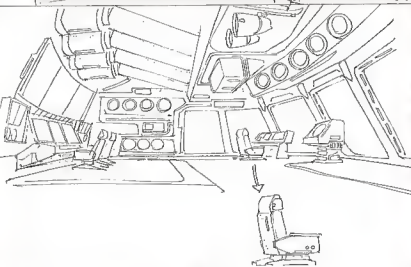
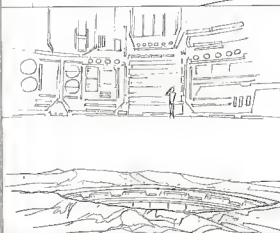
●ホワイトベース待機ボックス <36話>

パイロットがスタンバイしている所。



●グラナダ基地 <36話>

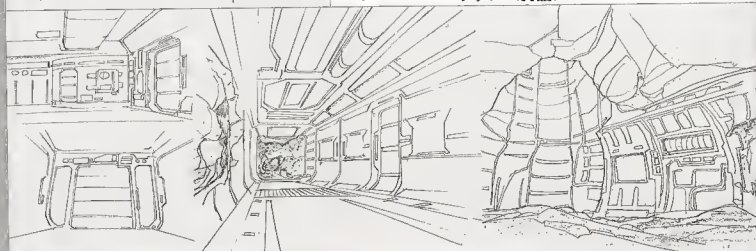
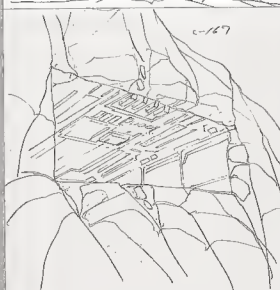
月の裏側にあり、キシリア支配下の拠点。図は宇宙船の発着口と着陸地。



●グワジンのブリッジ <36話>

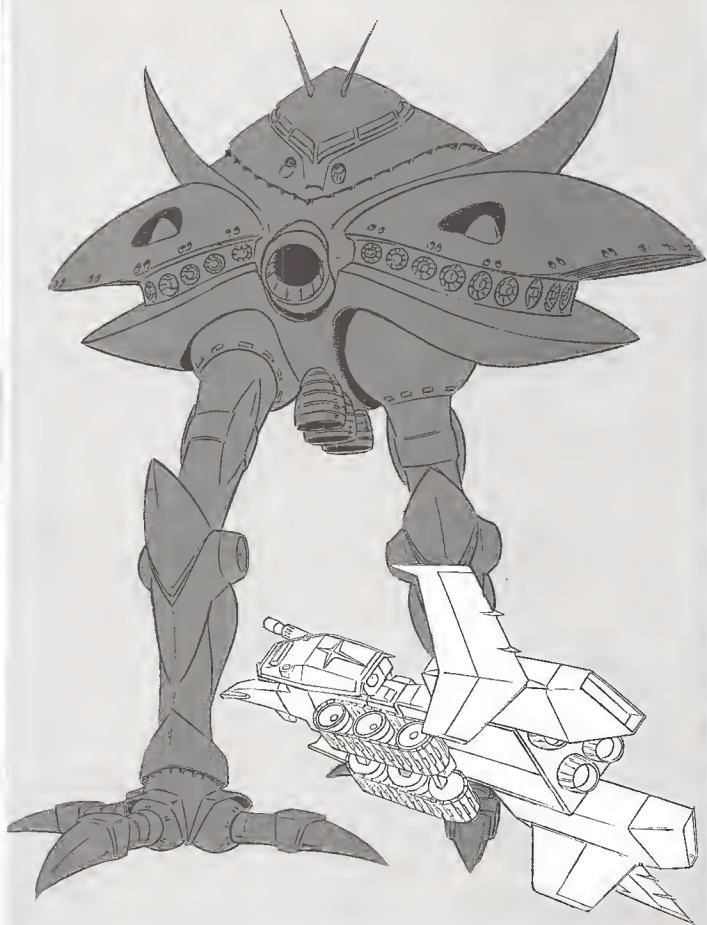
●ソロモンの宇宙港 <36話>

中に多数の船を収容できるドックがある。



●ソロモンの通路 <36話> いずれもモビルスーツが通れるほどの大きなもの。

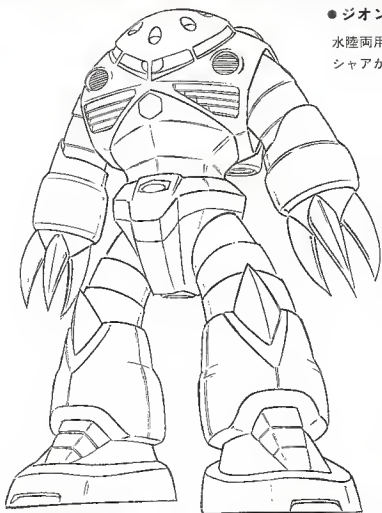
●メカニック設定



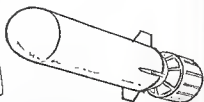
●メカニック設定1

●ジオン軍水陸両用モビルスーツ『ズゴック』〈27話〜〉

水陸両用モビルスーツの中では一番完成されており、29話、30話でシャアが愛用した。



ビーム砲



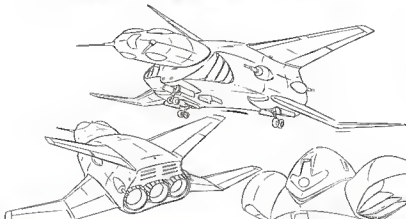
頭部から発射されるミサイル

●ジオン軍 水陸両用モビルスーツ『ゴック』

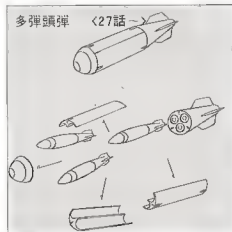
27話でズゴックの護衛をしベルファスト基地を襲撃するが、ガンダムに倒される。29話のジャブロー襲撃にも参加。

●地球連邦軍 ドン・エスカルゴ対潜攻撃機

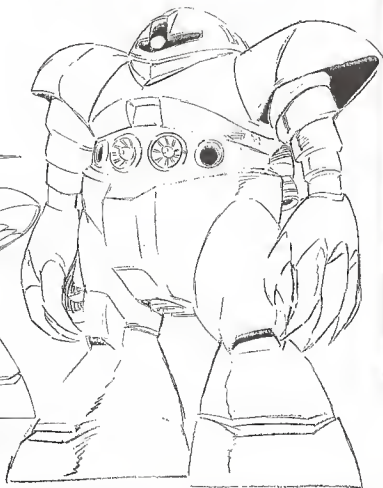
基地からも、空母からも発着可能な対潜攻撃機。
魚雷及び爆弾を水中の敵に発射する。



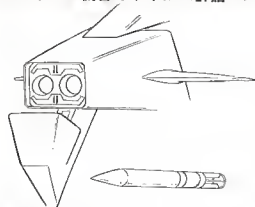
多弾頭弾 〈27話〉



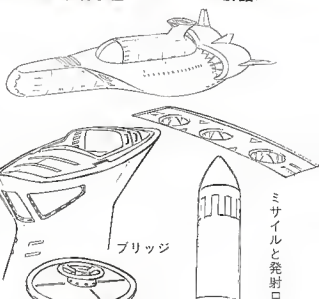
両手を引き込むと高速で水中を移動できる。



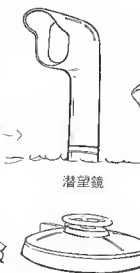
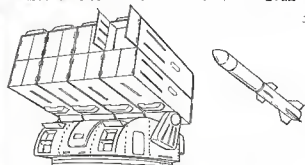
● Gファイター機首ミサイル <27話>



● ジオン軍潜水艦 ユーコン <27話>



● 連邦軍対潜ミサイルランチャー <27話>

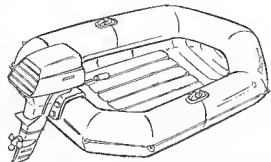
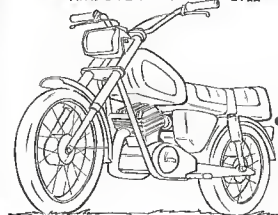


ブリッジ

ハッチ

ミサイルと発射口

● カイが徴用したオートバイ <27話>



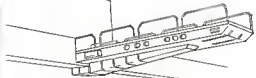
● ミハルに渡された紙袋 <27話>
連邦軍の制服ワンセットが入っていた。

● コノリーが使用したゴムボート <27話>

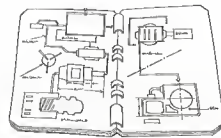
● セキ技術大佐のコンソールパネル



● Gファイター乗り込みタラップ <27話>



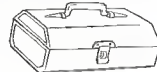
● カイのナップザック



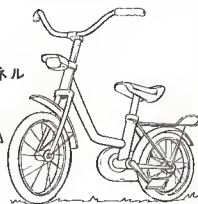
● ミハルが持っていた拳銃 <27話>

イタリア陸軍の制式拳銃として名高い『ベレッタ1934』であろう。(グリップのマークが異なっている) ガンダム全話を通して存在する銃はこれしか出ていない。

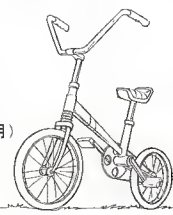
● Gパーツマニュアル (アムロ用)



● アムロがカイに手渡した工具箱 <27話>



● コノリーが民間人から取りあげた自転車

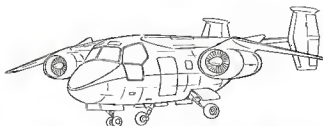


● ミハルの自転車 <27話>

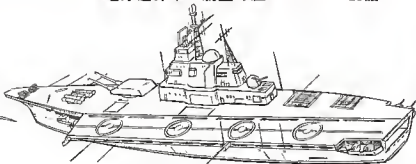
●メカニック設定2

●ベルデ諸島の漁業組合機〈28話〉

MDM-C-18小型輸送機。ブーンがミハルと連絡をするために使用。



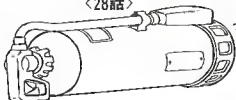
●地球連邦軍 航空母艦ヒマラヤ〈28話〉



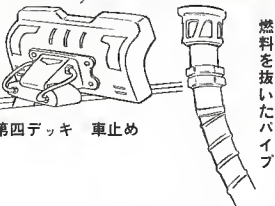
●ホワイトベースの救命具〈28話〉



●キッカ達の運んだ消火器〈28話〉

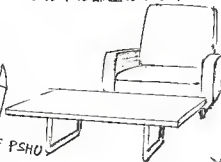


●第四デッキ 車止め



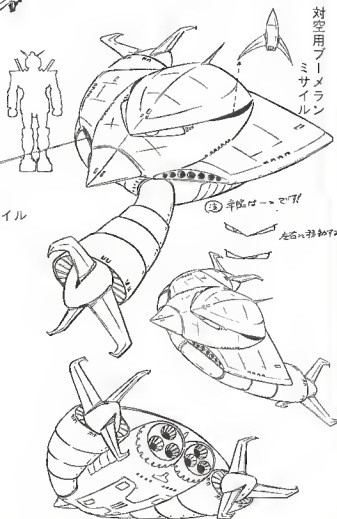
●小型機から燃料を抜いたパイプ

●カイの部屋のソファ



●モビルアーマー『グラブロ』

高速で水中を移動できるモビルアーマーで、ズゴック2機を引いてホワイトベースに追いついた。パイロットはブーン。

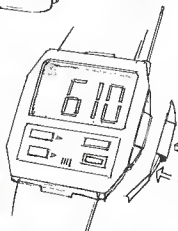


対空用ブーメランミサイル

③ 半信はーで下

左右の移動

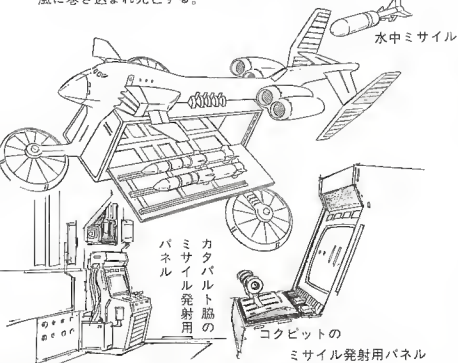
●ブーンとミハルが通信した腕時計型通信器



出力は弱く、遠距離通信不可(28話)

●対潜ミサイル装備のガンヘリー〈28話〉

第1ハッチとコアファイターをやられたホワイトベースが出動させた。ミハルが射手をやるが、爆風に巻き込まれ死亡する。



水中ミサイル

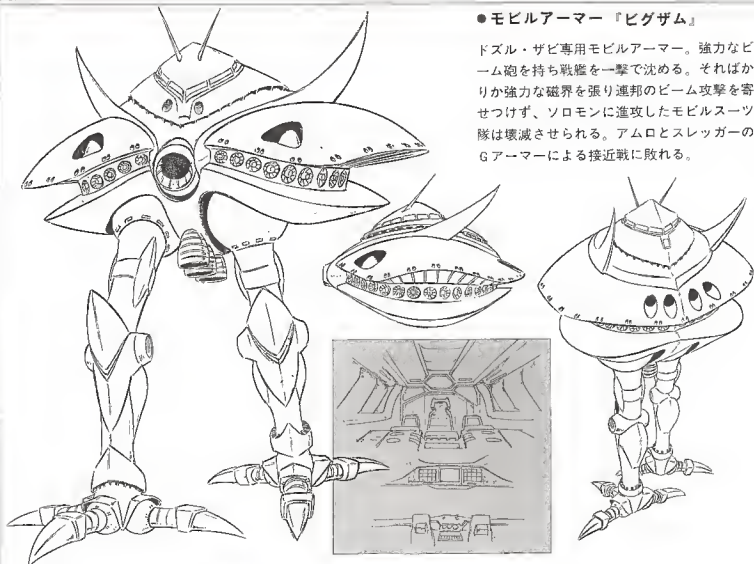
カタバルト鰐のミサイル発射用パネル

コックピットの

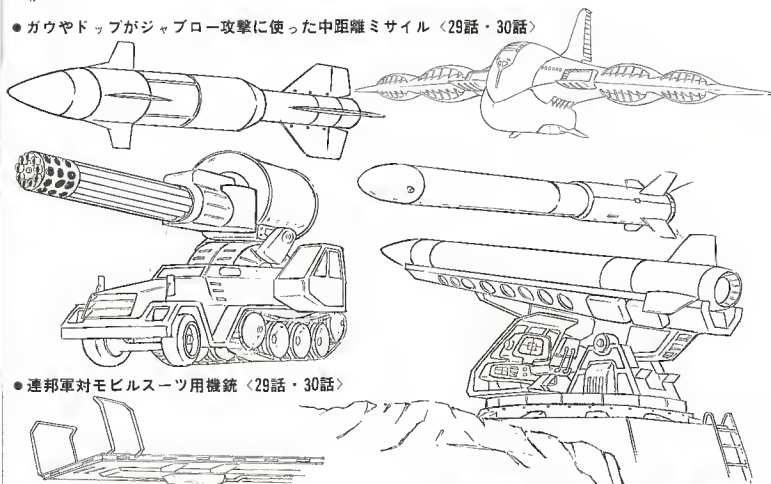
ミサイル発射用パネル

●モビルアーマー『ビグザム』

ドズル・ザビ専用モビルアーマー。強力なビーム砲を持ち戦艦を一撃で沈める。そればかりか強力な磁界を張り連邦のビーム攻撃を寄せつけず、ソロモンに進攻したモビルスーツ隊は壊滅させられる。アムロとスレッガーのGアーマーによる接近戦に敗れる。



●ガウやドップがジャブロー攻撃に使った中距離ミサイル〈29話・30話〉



●連邦軍対モビルスーツ用機銃〈29話・30話〉

●ホワイトベースタラップ

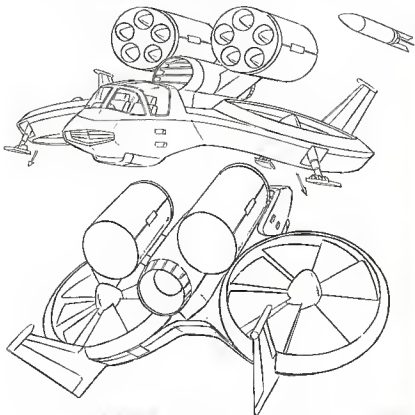
●連邦軍地対空ミサイル〈29話・30話〉

●メカニック設定3

●連邦軍ミサイルホバークラフト

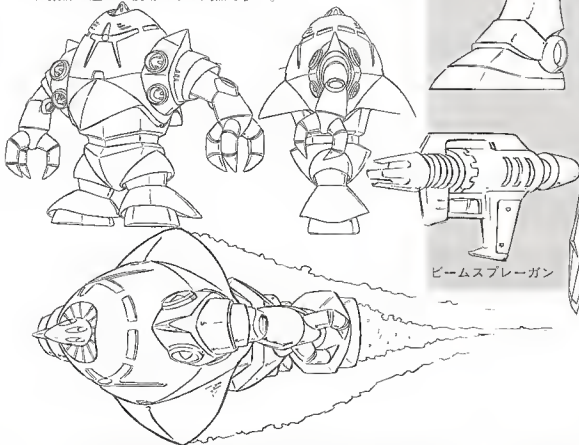
『ファンファン』〈29話〉

小型ミサイル10機を発射できるジャブロー防戦用のホバークラフト。ウッディ大尉が乗りシャアのズゴックのテレビカメラを潰したが叩き落とされる。



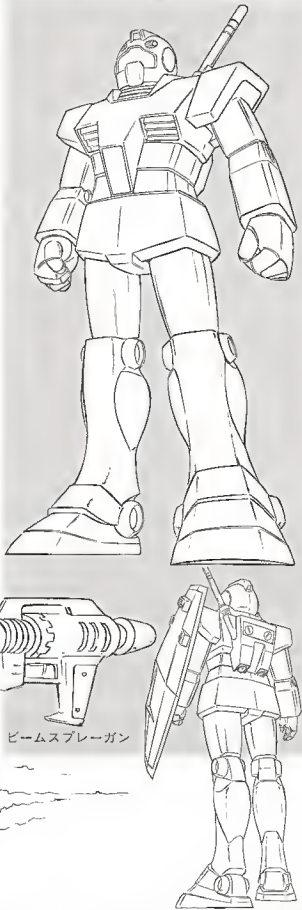
●ジオン軍水陸両用モビルスーツ『ゾック』〈29話〉

シャアは降下した2機のズゴックがやられたので、先発隊のゾックと行動した。パイロットはボラスニフ。水中での機動力は抜群で陸上で使用できる武器も多い。



●連邦軍量産型モビルスーツ GM 〈29話〜〉

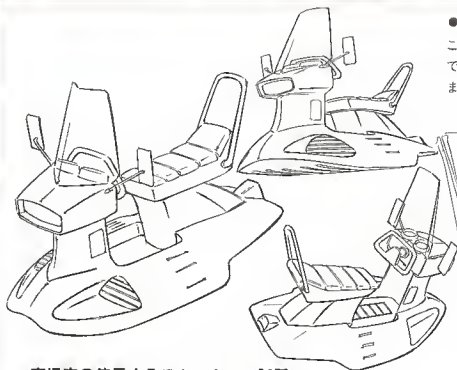
ガンダムのデーターをもとに量産された、モビルスーツ。大量生産品らしくあらゆる部分が整理され、プロトタイプのガンダムとは能力及び外観が異なっている。キッカ「でも何かガンダムと違うみたい……？」 レツ「そういえば、大分違うなあ……」



ビームスプレーガン

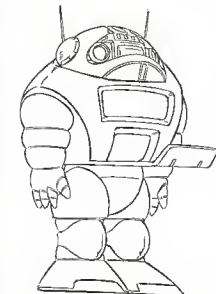
●アムロたちの受け取った辞令〈30話〉

これはファイルケースで、辞令はこの中に挟んである。ケース上部の襟章は、はがしてそのまま制服に付けられるようになっている。

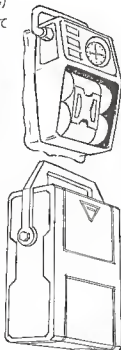


●育児官の使用するスクーター〈30話〉

ホバークラフト式で、速度は出ないが、小回りがきき、ジャブローでは足がわりに使用されている。

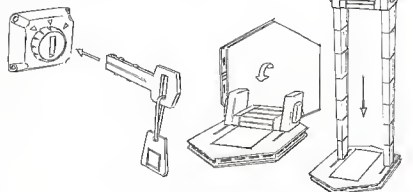


●育児室のサービスロボット〈30話〉
子供たちのおもりロボットで、ジュースやソフトクリームを腹から出す。



●バギーのエンジンキー〈30話〉

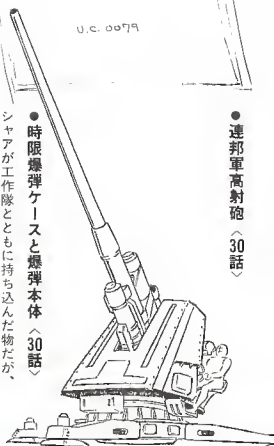
時限爆弾を捨てるためレツが動かそうとしたバギーのキー。レツ「こいつ／＼かかれ／＼かかれ／＼」



●ズゴックのハッチとタラップ〈30話〉

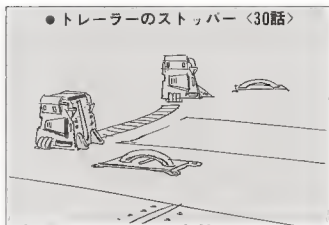
●時限爆弾ケースと爆弾本体〈30話〉

シヤアが工作隊とともに持ち込んだ物だが、GM工場に仕掛けた物はチビちゃんに発見されホワイトベースに仕掛ようとした物はアムロの連絡で失敗した。



●連邦軍高射砲〈30話〉

●トレーラーのストッパー〈30話〉

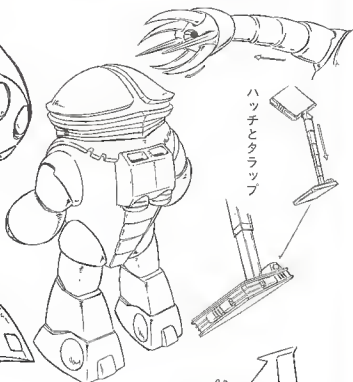
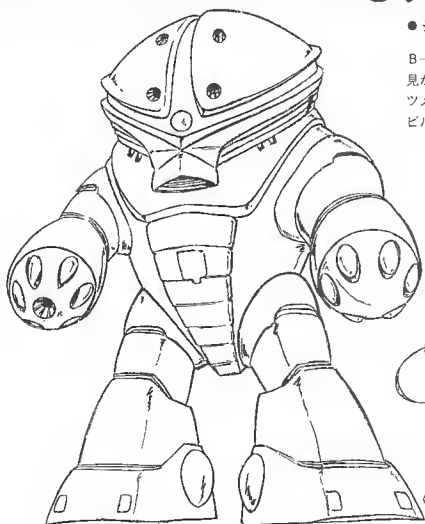


●メカニック設定4

●ジオン軍水陸両用モビルスーツ『アッガイ』

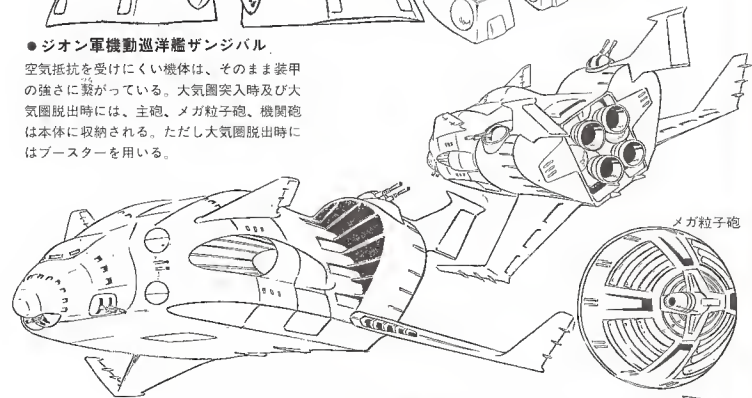
B-3ポイントからズゴックと侵入したモビルスーツ。見かけより動きは素早く、右手のバルカン砲のまわりのツメを伸ばし天井を使って逃げたりもする。水陸両用モビルスーツの中では一番カワイイといわれている。

右手を伸ばしたところ

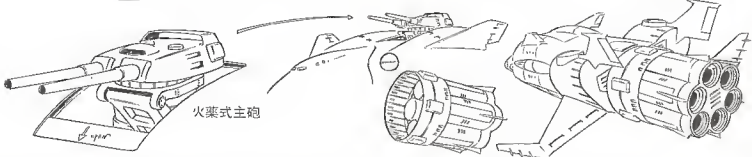


●ジオン軍機動巡洋艦ザンジバル

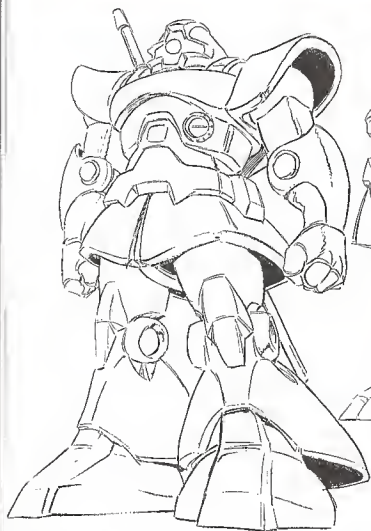
空気抵抗を受けにくい機体は、そのまま装甲の強さに繋がっている。大気圏突入時及び大気圏脱出時には、主砲、メガ粒子砲、機関砲は本体に収納される。ただし大気圏脱出時にはブースターを用いる。



メガ粒子砲

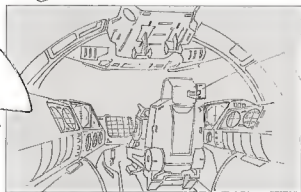
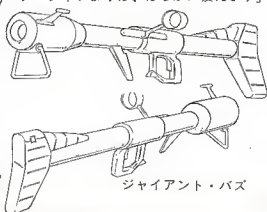


火薬式主砲



●リック・ドム 〈31話〉

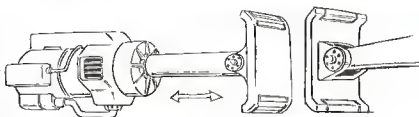
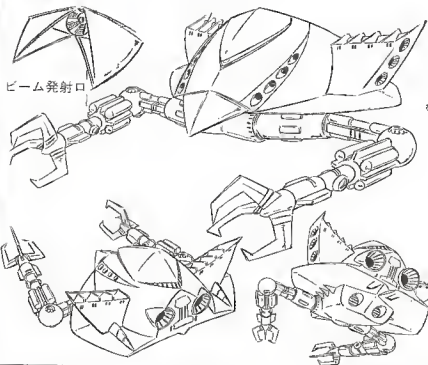
ドムのバーニアを強化して、宇宙用に改造したモビルスーツ。トクワン「ザク・タイプよりは、はるかに使えます」



cockピット

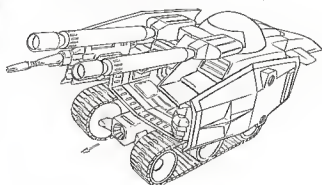
●ジオン軍モビルアーマー『ビグロ』 〈31話〉

実戦テスト中の宇宙用モビルアーマー。ミサイルとビーム砲を持ち、高速移動してアムロを苦しめた。トクワン「このモビルアーマーのビグロなら、高速戦闘力に関しては、モビルスーツなど、ものの数ではないという話です」、パイロットはトクワン。



●ドッキング・ロック 〈31話〉

ジャブローの宇宙船用ドックで、ホワイトベースを固定していたダンパーの一種。



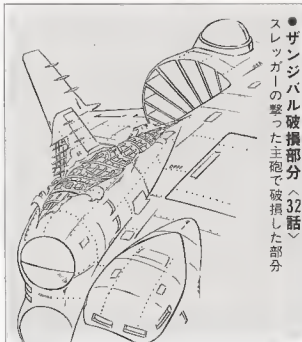
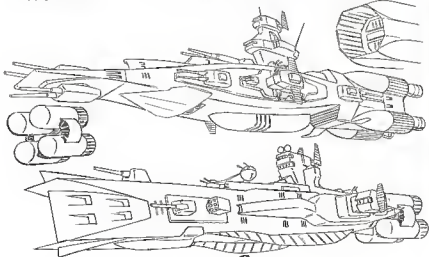
●Gブル・イージー 〈31話〉

GファイターAパーツ（cockピット部分）とガンダムAパーツ（ガンダム上半身）で構成されたもの。Gブルのコアブロックが無いもので、Gスカイの変型と合体すればGアーマーに変型できる。パイロットはセイラ。

●メカニック設定5

●ブースター付きのマゼランとサラミス <32話>

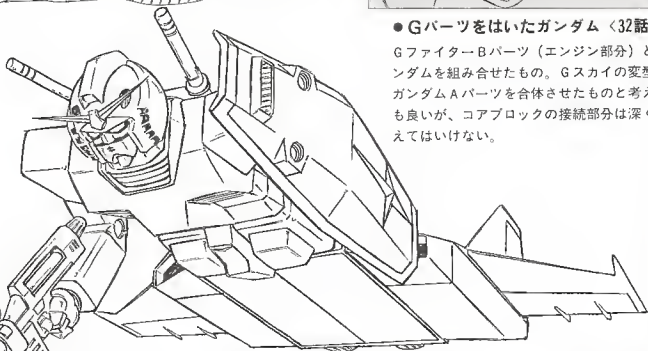
ティターン艦隊がジャブローから発進するのに使用したブースター。度宇宙に出しまえば二度と地球へ帰ってくることはできない。連邦の科学力が優れているらしく、船体に比べブースターはかなり小さい。



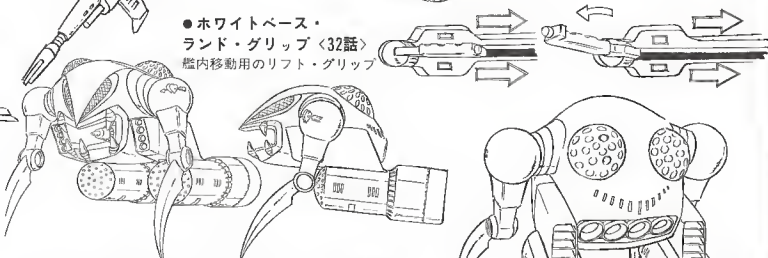
●ザンジバル破壊部分 <32話>
スレッジガーの撃った主砲で破壊した部分

●Gパーツをはいたガンダム <32話>

GファイターBパーツ（エンジン部分）とガンダムを組み合わせたもの。Gスカイの変型とガンダムAパーツを合体させたものと考えても良いが、コアブロックの接続部分は深く考えてはいけない。

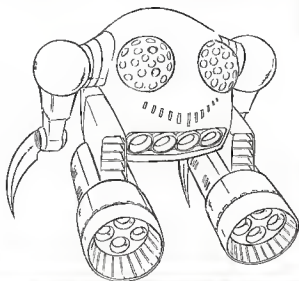


●ホワイトベース・ランド・グリップ <32話> 艦内移動用のリフト・グリップ



●ジオン軍モビルアーマー『ザクレロ』 <32話>

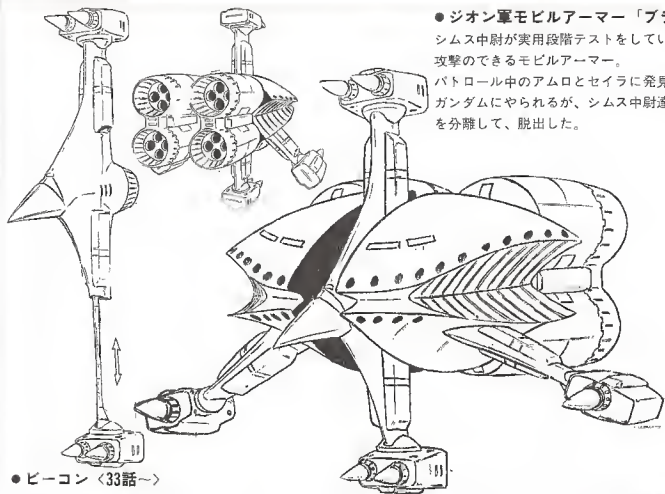
実用テスト前に放棄されたモビルアーマー。トクワンの仇討ちに、デミトリーが勝手に使用した。拡散ビーム砲は強力だったが、Gパーツをはいたガンダムにやられる。



● ジオン軍モビルアーマー「ブラウ・プロ」

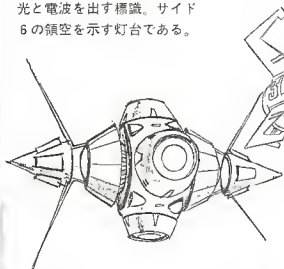
シムス中尉が実用段階テストをしていた多面攻撃のできるモビルアーマー。

パトロール中のアムロとセイラに見えられ、ガンダムにやられるが、シムス中尉達は船体を分離して、脱出した。

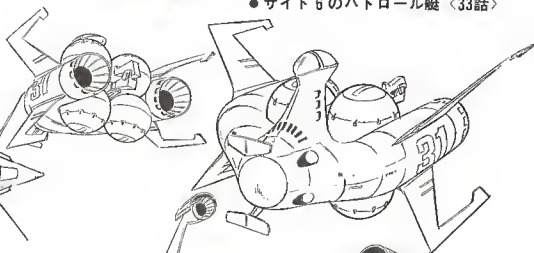


● ビーコン 〈33話〉

光と電波を出す標識。サイド6の領空を示す灯台である。

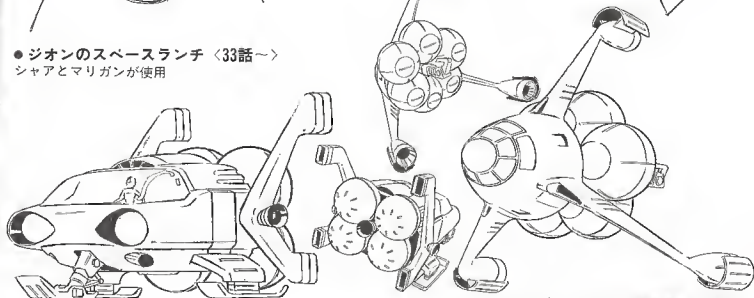


● サイド6のパトロール艇 〈33話〉



● ジオンのスペースランチ 〈33話〉

シャアとマリガンが使用

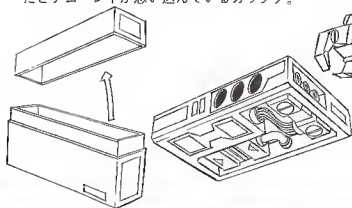


● ベルガミノKKの曳航艇 〈33話〉

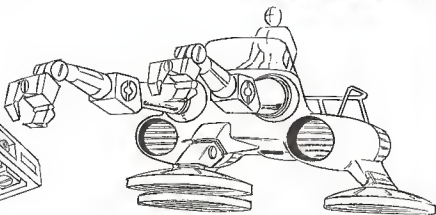
●メカニック設定6

●電子ユニットとその入れ物〈33話〉

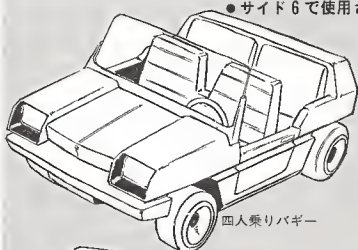
ジオンのモビルスーツの回路を参考に開発した、ガンダムの戦闘力を数倍にする記憶回路だとテム・レイが思い込んでいるガラクタ。



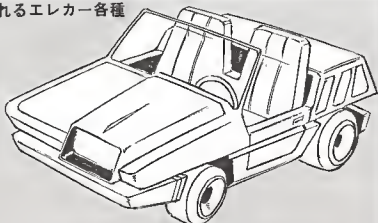
●サイド6 港湾作業用整備艇〈33話〉



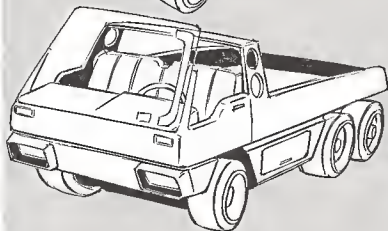
●サイド6で使用するエレカー各種



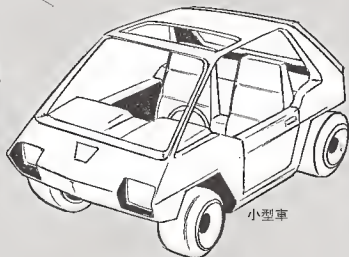
四人乗りバギー



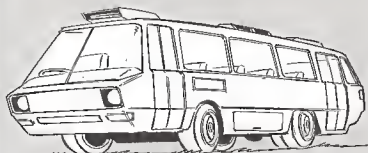
二人乗りバギー（ララアとシャアが使用）



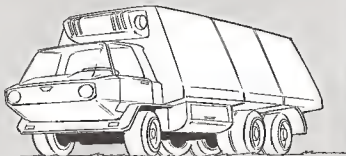
軽トラック



小型車



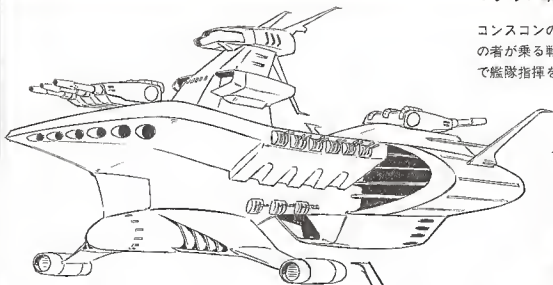
バス（テム・レイが乗っていた）



トラック

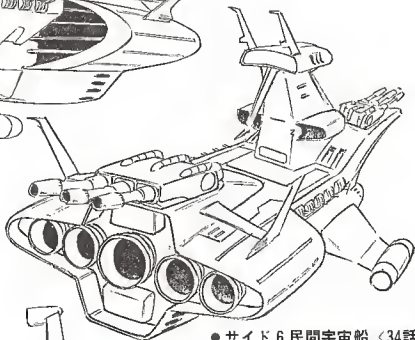
●ジオン軍重巡洋艦チベ<33話>

コンスコンの旗艦として登場。将位クラスの者が乗る戦艦。速度が出、火器が多いので艦隊指揮をするのに用いられる。

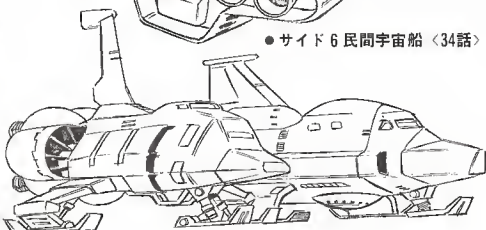
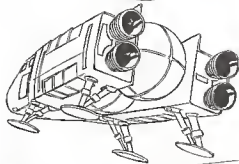
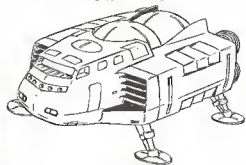


●カムラン機<34話>

カムラン・ブルームのプライベート機「ハルク」。これだけの船を持っていることからカムランがエリートであることが想像できる。



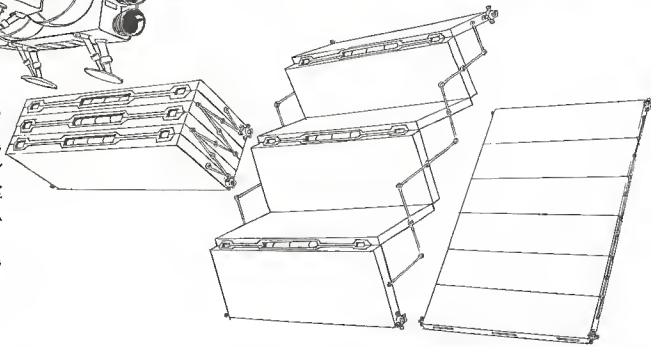
●サイド6民間宇宙船<34話>



●ソーラシステム・ミラー

(35話、36話)

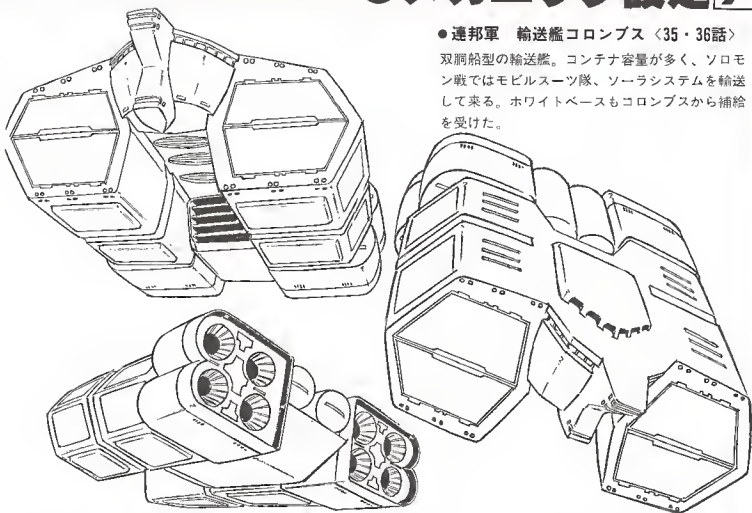
連邦軍の対要塞兵器。このミラーを宇宙空間に並べ、四隅のバーニアで方向を調整し太陽光線を集光してソロモンを焼いた。



●メカニック設定7

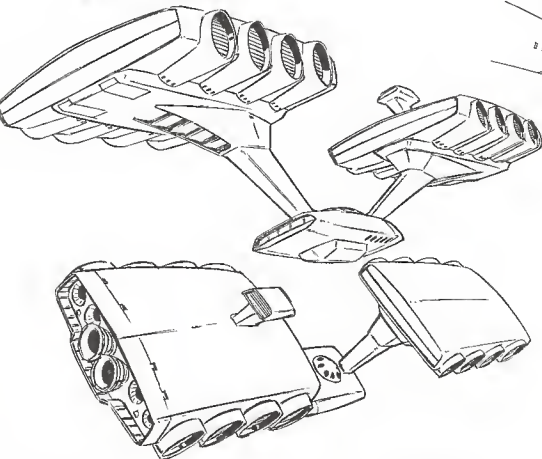
●連邦軍 輸送艦コロンプス〈35・36話〉

双胴船型の輸送艦。コンテナ容量が多く、ソロモン戦ではモビルスーツ隊、ソーラシステムを輸送して来る。ホワイトベースもコロンプスから補給を受けた。



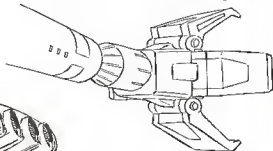
●ジオン軍大型輸送船バゾク〈35話〉

大型コンテナ2機をブリッジでつないだ船、ババア艦の6倍近い物資を輸送する。



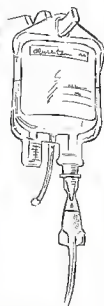
●スペースランチのツメ〈35話〉

シャアの乗ったランチがサイド6港内で使用したドッキング用のツメ。



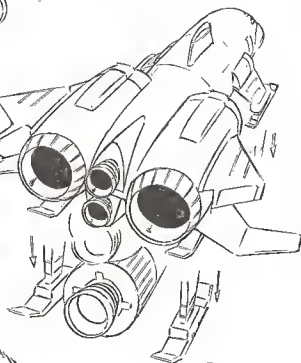
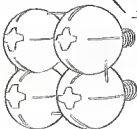
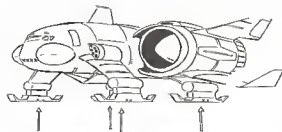
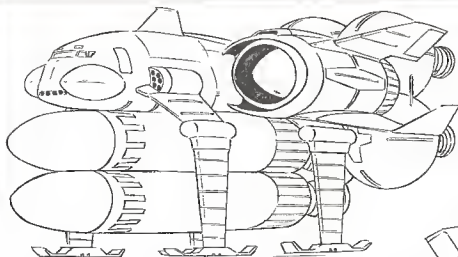
●輸血セット〈35・36話〉

ホワイトベースの備品。これはハヤトが負傷した時に使用したもののだからA・B型の血液が入っている。



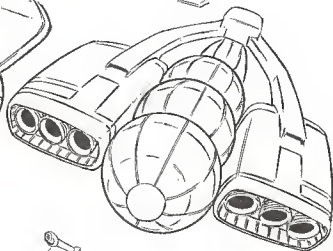
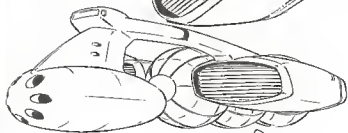
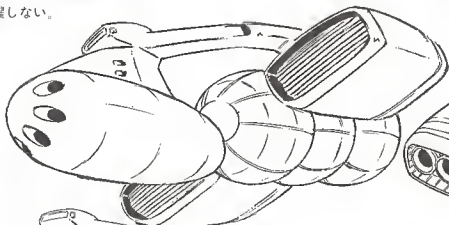
●連邦軍突撃艇バブリク〈35話〉

大型ミサイル2機を持つ突撃艇。ミサイルはビーム拡散用粒子を散布し、強力なビーム攪乱膜を張る。ミサイル発射後は戦闘機として使用できるが、あまり役には立たない。



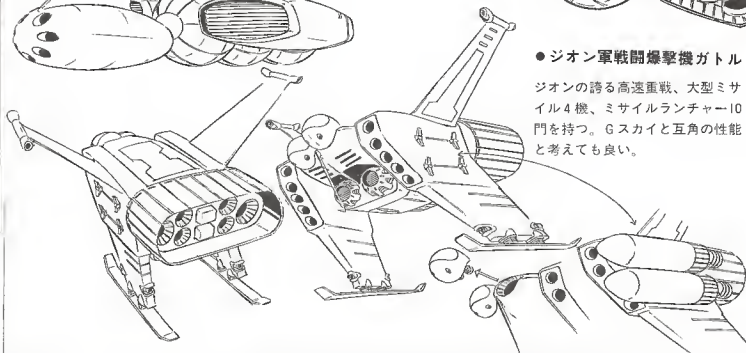
●ジオン軍ジッコ特撃艇

ジオンの小型艇、ほとんど活躍しない。



●ジオン軍戦闘爆撃機ガトル

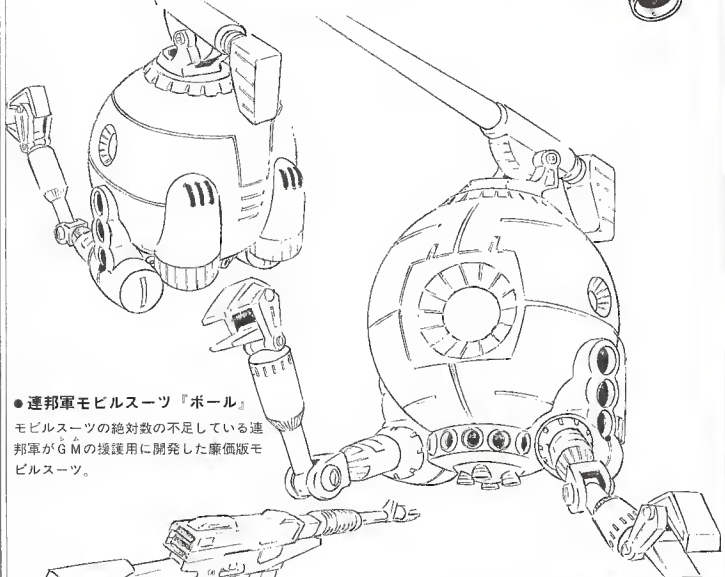
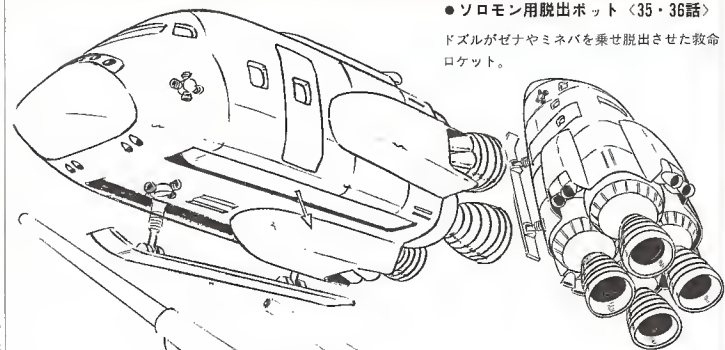
ジオンの誇る高速重戦、大型ミサイル4機、ミサイルランチャー10門を持つ。Gスカイと互角の性能と考えても良い。



●メカニック設定8

●ソロモン用脱出ポット〈35・36話〉

ドズルがゼナやミネバを乗せ脱出させた救命ロケット。

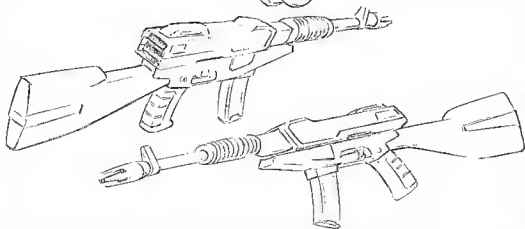


●連邦軍モビルスーツ『ポール』

モビルスーツの絶対数の不足している連邦軍がG Mの援護用に開発した廉価版モビルスーツ。

●無反動ライフル銃

ビッグザムを破壊したガンダムに、ドズルが乱射した火薬式無反動銃。ライフルは怖くないがドズルの顔は怖かった。



制作スタッフ ● 放映記録



第28話 大西洋、血に染めて

昭和54年10月13日放映

●脚本/山本優●絵コンテ/斧谷稔
●演出/関田修●作画監督/中村一夫
●作画/中村修(西城明・小林大介・坂野方子)●背景/アト・テイク・ワック(清水昭紀・加藤明美)●動画チエック/浜津守●仕上/ディーン(井上崎万紀子・金子広海)●特殊効果/上井通明●撮影/旭プロ(平田隆文)●編集/鶴淵友彰●現像/東京現像所●音響監督/松浦典良●効果/松田昭彦●録音/整音スタジオ●制作進行/望月真人●設定制作/円井正●AP/神田豊

第29話 ジャブローに散る!

昭和54年10月20日放映

●脚本/荒木芳久●絵コンテ/斧谷稔
●演出/貞光紳也●作画監督/安産良和
●作画/伊東誠・前島和子・戸川俊信・板野一郎●背景/アッパル(渡辺毅・渡部孝)●動画チエック/浜津守●仕上/シャフト(三橋曜子・鶴淵裕子)●特殊効果/土井通明●撮影/旭プロ(斉藤秋男)●編集/鶴淵友彰●現像/東京現像所●音響監督/松浦典良●効果/松田昭彦●録音/整音スタジオ●制作進行/植田益朗●設定制作/円井正●AP/神田豊

第30話 小さな防衛線

昭和54年10月27日放映

●脚本/山本優●演出/藤原良二●作画監督/安産良和●作画/多賀かずひら・服部卓・茨田佳子・栗野川智美●背景/アト・テイク・ワック(森博敏・那須野幸子)●動画チエック/浜津守●仕上/ディーン(五島みち子・柿崎春日)●特殊効果/土井通明●撮影/旭プロ(平田隆文)●編集/鶴淵友彰●現像/東京現像所●音響監督/松浦典良●効果/松田昭彦●録音/整音スタジオ●制作進行/望月真人●設定制作/円井正●AP/神田豊

第31話 ザンギバル、追撃!

昭和54年11月3日放映

●脚本/山本博之●絵コンテ/斧谷稔
●演出/又野弘一●作画監督/安産良和
●作画/青井芳信・広岡光昭・前島和子・戸川俊信●背景/アッパル(渡辺毅・渡部孝)●動画チエック/浜津守●仕上/シャフト(森山政子・千葉澄世)●特殊効果/土井通明●撮影/旭プロ(斉藤秋男)●編集/鶴淵友彰●現像/東京現像所●音響監督/松浦典良●効果/松田昭彦●録音/整音スタジオ●制作進行/望月真人●設定制作/円井正●AP/神田豊

第32話 強行突破作戦

昭和54年11月10日放映

●脚本/松崎健一●絵コンテ/斧谷稔
●演出/関田修●作画監督/富沢和雄
●作画/長崎重信・鍋島修・亀垣一・越智一裕●背景/アト・テイク・ワック(清水昭紀・加藤明美)●動画チエック/浜津守●仕上/ディーン(阿部みち子・工藤良子)●特殊効果/土井通明●撮影/旭プロ(平田隆文)●編集/鶴淵友彰●現像/東京現像所●音響監督/松浦典良●効果/松田昭彦●録音/整音スタジオ●制作進行/神田豊●設定制作/円井正●AP/神田豊

第33話 コンスコ強襲

昭和54年11月17日

●脚本/山本優●絵コンテ/斧谷稔
●演出/貞光紳也●作画監督/中村一夫
●作画/中村修(西城明・小林大介・坂野方子)●背景/アッパル(渡辺毅・渡部孝)●動画チエック/浜津守●仕上/シャフト(三橋曜子・鶴淵裕子)●特殊効果/土井通明●撮影/旭プロ(斉藤秋男)●編集/鶴淵友彰●現像/東京現像所●音響監督/松浦典良●効果/松田昭彦●録音/整音スタジオ●制作進行/植田益朗●設定制作/円井正●AP/神田豊

第34話 宿命の出会い

昭和54年11月24日

●脚本/山本博之●演出/藤原良二●作画/多賀かずひら・兵頭敏・板野一郎・前島和子・戸川俊信●背景/アッパル(渡辺毅・渡部孝)●動画チエック/浜津守●仕上/ディーン(中島晶子・神田久子)●特殊効果/土井通明●撮影/旭プロ(平田隆文)●編集/鶴淵友彰●現像/東京現像所●音響監督/松浦典良●効果/松田昭彦●録音/整音スタジオ●制作進行/望月真人●設定制作/円井正●AP/神田豊

第35話 ソロモン攻略戦

昭和54年12月1日放映

●脚本/松崎健一●演出/久野弘一●作画/伊東誠・広岡光昭・板野一郎・前島和子・戸川俊信●背景/アッパル(渡辺毅・渡部孝)●動画チエック/浜津守●仕上/シャフト(森山政子・古谷奈緒子)●特殊効果/土井通明●撮影/旭プロ(斉藤秋男)●編集/鶴淵友彰●現像/東京現像所●音響監督/松浦典良●効果/松田昭彦●録音/整音スタジオ●制作進行/望月真人●設定制作/円井正●AP/神田豊

第36話 恐怖! 機動ビグザム

昭和54年12月8日放映

●脚本/山本博之●絵コンテ/斧谷稔
●演出/関田修●作画監督/山崎和男・青井芳信●背景/アッパル(中村大介・里・桑村茂雄)●動画チエック/浜津守●仕上/ディーン(小林和恵・三枝幸子)●特殊効果/土井通明●撮影/旭プロ(平田隆文)●編集/鶴淵友彰●現像/東京現像所●音響監督/松浦典良●効果/松田昭彦●録音/整音スタジオ●制作進行/深田節雄●設定制作/円井正●AP/神田豊

第27話 女スパイ潜入

昭和54年10月6日放映

●脚本/山本博之●絵コンテ/斧谷稔
●演出/久野弘一●作画監督/山崎和男
●作画/多賀かずひら・服部卓・茨田佳子・栗野川智美●背景/アッパル(渡辺毅・渡部孝)●動画チエック/浜津守●仕上/シャフト(森山政子・長谷川清)●特殊効果/土井通明●撮影/旭プロ(斉藤秋男)●編集/鶴淵友彰●現像/東京現像所●音響監督/松浦典良●効果/松田昭彦●録音/整音スタジオ●制作進行/望月真人●設定制作/円井正●AP/神田豊

キヤスト&声優リスト



第28話 大西洋、血に染めて

●アムロ／古谷徹●フライト／鈴置洋孝●カイ／古川登志夫●ハヤト／鈴木清信●フラウ・ボウ／鶴飼るみ子●セイラ／井上瑤●シヤア／池田秀一●ミハル／間島里美●オムル／塩沢兼人●軍曹／二又一成
●ナレーター／永井一郎

第31話 ザンジバル、追撃／

●アムロ／古谷徹●フライト／鈴置洋孝●カイ／古川登志夫●フラウ・ボウ／鶴飼るみ子●セイラ／井上瑤●ハヤト／鈴木清信●シヤア／池田秀一●スレツガー／玄田哲章●トクワン／政宗一成
●ナレーター／永井一郎

第34話 宿命の出会い

●アムロ／古谷徹●フライト／鈴置洋孝●カイ／古川登志夫●ハヤト／鈴木清信●ミライ／白石冬美●ララー／潘恵子●スレツガー／玄田哲章●シヤア／池田秀一●カムラン／塩沢兼人●テム／清川元夢
●ナレーター／永井一郎

第29話 ジャブローに散る／

●アムロ／古谷徹●フライト／鈴置洋孝●カイ／古川登志夫●フラウ・ボウ／鶴飼るみ子●ミライ／白石冬美●セイラ／井上瑤●ハヤト／鈴木清信●マリガン／戸谷公次●シヤア／池田秀一●ウッディ／田中秀幸●アントニオ／二又一成
●ナレーター／永井一郎

第32話 強行突破作戦

●アムロ／古谷徹●フライト／鈴置洋孝●カイ／古川登志夫●フラウ・ボウ／鶴飼るみ子●ミライ／白石冬美●セイラ／井上瑤●ハヤト／鈴木清信●シヤア／池田秀一●スレツガー／玄田哲章●マリガン／塩沢兼人
●ナレーター／永井一郎

第35話 ソロモン攻略戦

●アムロ／古谷徹●フライト／鈴置洋孝●カイ／古川登志夫●ハヤト／鈴木清信●フラウ・ボウ／鶴飼るみ子●セイラ／井上瑤●ドズル／長堀芳夫●スレツガー／玄田哲章●シヤア／池田秀一●ワッケイン／曾我部和行●ゼナ／角谷美佐
●ナレーター／永井一郎

第27話 女スパイ潜入

●アムロ／古谷徹●フライト／鈴置洋孝●カイ／古川登志夫●ハヤト／鈴木清信●フラウ・ボウ／鶴飼るみ子●セイラ／井上瑤●シヤア／池田秀一●レヒル／池田勝●ミハル／間島里美●ミリー／松岡洋子●マリガン／塩沢兼人
●コノリ／二又一成
●ナレーター／永井一郎

第30話 小さな防衛線

●アムロ／古谷徹●フライト／鈴置洋孝●カイ／古川登志夫●フラウ・ボウ／鶴飼るみ子●ミライ／白石冬美●セイラ／井上瑤●ハヤト／鈴木清信●文官／二又一成●シヤア／池田秀一●育児官／加川三起●子供A／松岡洋子
●ナレーター／永井一郎

第33話 コンスコン強襲

●アムロ／古谷徹●フライト／鈴置洋孝●カイ／古川登志夫●フラウ・ボウ／鶴飼るみ子●ミライ／白石冬美●セイラ／井上瑤●シヤア／池田秀一●スレツガー／玄田哲章●カムラン／塩沢兼人●テム／清川元夢
●ナレーター／永井一郎

第36話 恐怖／機動ビガザム

●アムロ／古谷徹●フライト／鈴置洋孝●カイ／古川登志夫●ミライ／白石冬美●スレツガー／玄田哲章●ドズル／長堀芳夫●マ・クベ／塩沢兼人●シン／二又一成●バロム／滝雅也●ハワード／塩谷翼●ゼナ／角谷美佐
●ナレーター／永井一郎



総監督富野喜幸^秘ノート

○インタビュー 27話～36話の流れ！
○未公開資料 富野メカ・ラフスケッチ

ガンダム記録全集第四巻

スペシャル インタビュー



ジオン輸送機ファットアングルの第11話においてランバ・ラルへの武器補給の際に使用された本機は、第29話で試作重モビルスーツ・ゾックをシャアの許へ送る為に再び登場した。これはその富野氏のラフスケッチである。巨大な輸送機をマンガ的な誇張で面白いものにしよつとする意図が伝わって来る。

4巻は、ホワイトベースがジャブローで連邦の正規軍となり、この大戦の決め手となったソロモン攻略での活躍、そして連邦の勝利というあらすじなのですが、富野さんの意図されていたものとは？

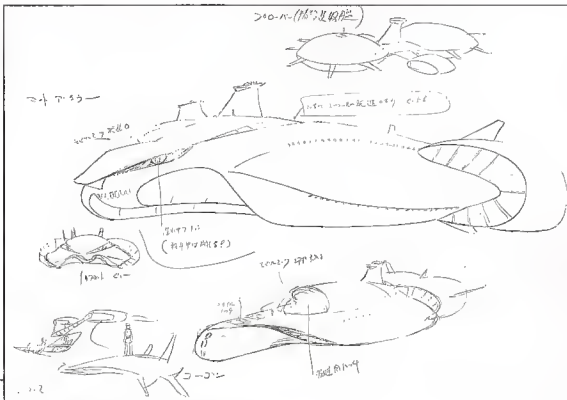
全体の流れとして、本来は民間人が軍に組み込まれていく過程を描きたかったですね。微用されたわけでもないのに駆り出されて、その時の能力と実論だけで本人の意思に関係なく、現実に行きわたることから具体的体験が与えられていく……その差別感を出したかったなと思っています。ただ振り返ってみると、僕自身に軍隊経験がないのでその感じが出ていない、それがイヤだな……というのが一番の感想です。

ガンダム全体のストーリーの中で考える、ひとつのプロセスとして軍をないがしろにできないかと思っています。これは、ひいては社会機構の代弁者でもあったのではないか、という気持ちで描いていたからです。

といったも、放送を終了してすでに半年という段階での印象は「すいぶんたくさんさんの

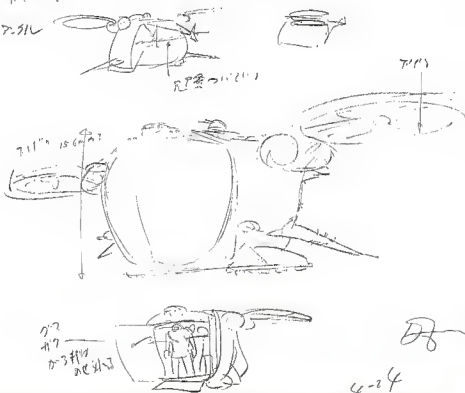
マッドアングラー

突撃機動軍大佐として再びW・Bの前に現れたシャア。その彼が指揮するジオン海軍の精鋭マッドアングラー部隊の陣容を示すイメーラフ。大西洋の狼ともいふべきシャアの先兵達は、そのイメーラジをほとんど崩す事なく大河原氏の手によってクリーンアップされ、ガンダム

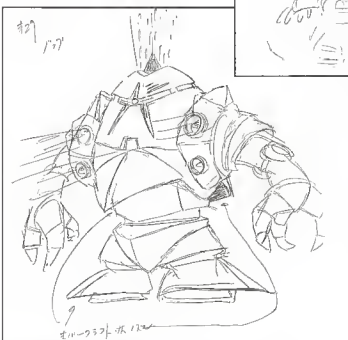


マッドアングラー

マッドアングラー

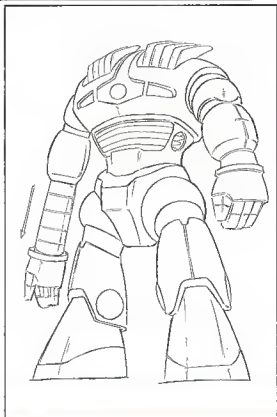


ゴック、ズゴック、ゾゴック
 大西洋を舞台にガンダムと死闘を演じたゴックをはじめとするジオン海軍の水陸両用モビルスーツ群のラフスケッチ。ズゴックのモニター・アイが複眼と指定されている事に注意。これではズゴックはゴックの変型という事ではなく終わったが、伸縮自在の腕などは後のアツガイに受け継がれている。



ゾック

水陸両用の試作超重モビルスーツ・ゾックのラフスケッチである。北米カリフォルニアよりシアアの許へ空輸されてきた代物で、その重量感他のモビルスーツの追従を許さぬ出来と言えよう。一見してわかる通り、実際に登場したゾックとの差異はほとんど皆無に等しい、と言っても言い過ぎではないようだ。



ゾゴック

本編では登場せずに終わった水陸両用モビルスーツの1タイプ。富野氏のラフから大河原氏がまとめあげたもので、モビルスーツには珍らしくカッター風の飛翔兵器を両肩及び腹部に内蔵している事にその特色を見ることができよう。

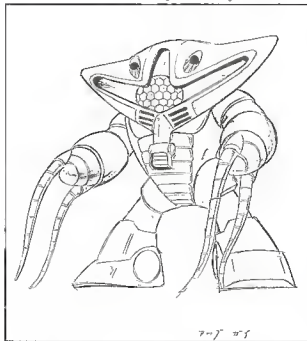
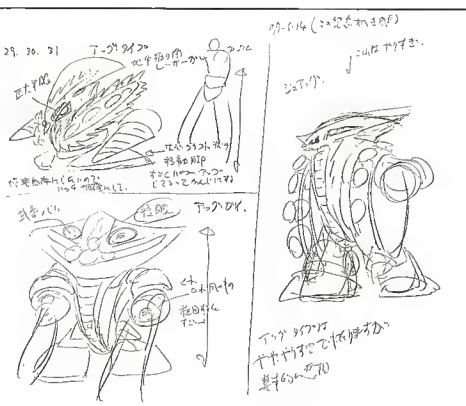
記録全集の2巻にも書きましたが、もうひとつのエピソードとして、ラアとシアアの関係を象徴するファイル・ムーヴとテム、カムランとミライ、アムロとテム、そしてラアとシアアの三組の人間関係が複合的に描かれたのは良かったなというか、むしろやってみたかった事だけに、やれた自分は幸せだな、と思います。

テム・レイの設定を当初から考えていたのは残酷だったのではないかと、という事も聞きますが、あいつはタイプAの人間をアニメの中に投映できた事は作り手として自己満足に近いものをもてました。先述したように、僕自身の体験からとずいたものとはいきませんが。

戦争がなければ、ミライと結婚していた(はずの)カムラン・ブルーム、サイド6に流れ着き、それこそ生き恥をさらしているようなテム・レイ。そういった世の中の人それぞれ位置付けを、第三者から見た形で描けたのではないのでしょうか。ただこれらのエピソードがかなりつらい話になっているのに、もうひとつ突っ込みが足りないのでは、と反省する感もあるのですが……

戦争がなければ、ミライと結婚していた(はずの)カムラン・ブルーム、サイド6に流れ着き、それこそ生き恥をさらしているようなテム・レイ。そういった世の中の人それぞれ位置付けを、第三者から見た形で描けたのではないのでしょうか。ただこれらのエピソードがかなりつらい話になっているのに、もうひとつ突っ込みが足りないのでは、と反省する感もあるのですが……

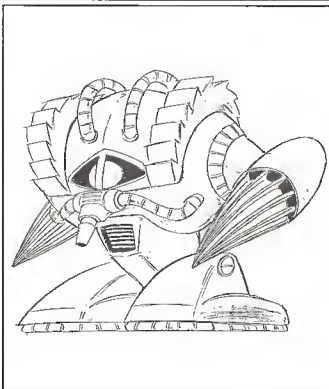
アックグタイプシリーズ
 名称、形状から言っても第30話のアックグタイプを産み落とすまでの産物と考えてさしつかえないだろう。注釈の部分に、この時期の敵モビルスーツ設定における富野氏なりの苦しさが見われているようにもとれる。総じてアックグタイプは地中推進型のモビルスーツであったようである。



アックガイ

名前からもボディ形状からも最も現アックガイに近いモビルスーツで、これもまた大河原氏の手により清書されたアックガイである。第30話に登場の予定だった事からもアックガイの基本原型と考えてかまわないだろう。両側に大きく張り出した頭に昆虫の複眼風の単眼がついている姿は異様だ。ラフによると両手の触手はヒートロッド的なもので、これを旋回させて相手を攻撃する設定であった。

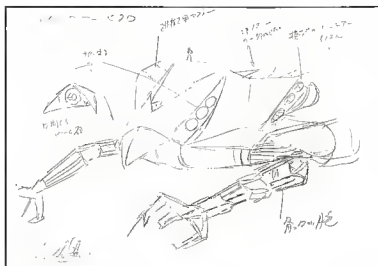
アック
 アックグタイプシリーズ3点のうちの1点。完全な地中型モビルスーツで、そのせむし様の形状は他のモビルスーツ群とは異なる印象を投げつけてくる。これは富野氏のラフを大河原氏が清書したもので、予定では第29話に登場の筈であったようだ。



こうしてエピソードをひとつひとつ思い出すと、けっこう印象深い話が多いんですけど、それらのエピソードがともうまぐろみすぎちゃっているんですね。だからカムラン・ブ

連邦軍の拠点としてジャブローを見せ、それからジオンの拠点であるソロモンを見せるまでの、単なる途中経過でのエピソードではないのがこのサイド6じゃないでしょうか。ある意味で大変臭いの強い話だったともいえるでしょう。

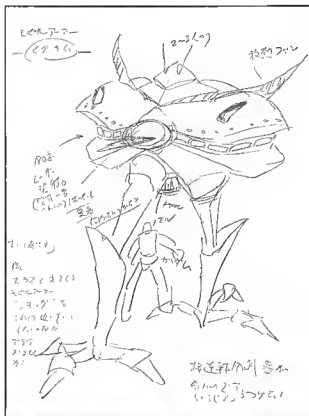
スレッガーが登場したために、ホワイトベースの乗員が本音を出すようになったとも思えるのですが。スレッガーというのはあて馬なんですよ。誰に対するのかは、最初に具体的に決めていなかったんですが、実際にドラマ作りをしていくとカムラン・ブルームのあて馬になっていったんですね。ところが、これに気付いたのは話が終ってからなんです。スレッガーは物語を進めていく上で、それほどウエイトをおいていません。にもかかわらず妙に浮きあがった存在になったのは、性格が明快だったことと、声優の玄田さんがとてもスレッガーのイメージに合っていて、当初の設定以上にキャラクターがふくらんでからなんです。カムランのひきかた役として存在するはずだったスレッガーが、これだけ良いキャラクターに成長したことは別に、やはり放送が終ってから気付いたのですが、もっとも一般的なカムラン・ブルームに僕の男としての欲望が入っていたんです。生き残ってほしいなあとか、もう少しはマシな男になつてほしいなあとか。知らず知らずの内に感情移入して作劇していたんですね。そういう事を今になって考えてみると、自分自身意外ですね。



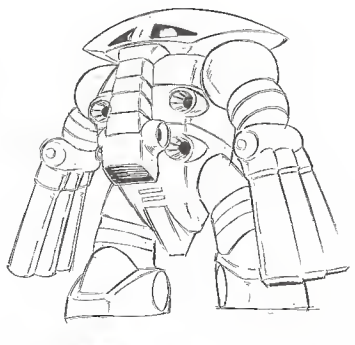
ビグロ

富野氏のモビルアーマー「ビグロ」のラフスケッチである。第31話で登場、宇宙空間でのスーツに対するアーマーの絶対的優位を証明してくれた。本機がもっと活躍する事を望んでいた向きも決して少なくはなかったろう。

ビグ・ザム
強力無比で無敵の機動ビグ・ザム。そのラフスケッチで、富野氏は当初、ジオングの前身としてビグ・ザムを考えていた様な節も見うけられる。



ジュアツグ(ラフ)
アックタイプ最後の一体ジュアツグは、もうひとつラフがある。前のラフのところに「これはやりすぎ」と書かれていることから、ラフを書き直したものだと思われる。前のラフとは頭部以外の身体が人間型に変わり、いうなれば一般モビルスーツの概念に近いフォルムとなった。



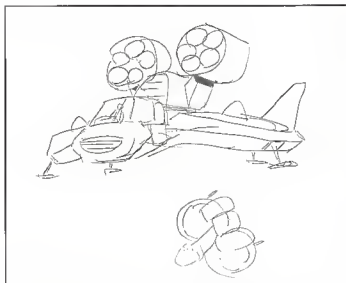
ジュアツグ(清書)

前のラフに改造を加えて清書した物。扇状の排気ノズルがさらに伸びて腹部にまで達しているのと、指に巨大なカノン砲状の物が装備されて全体的に重心が低くなった事が主な改造点である。



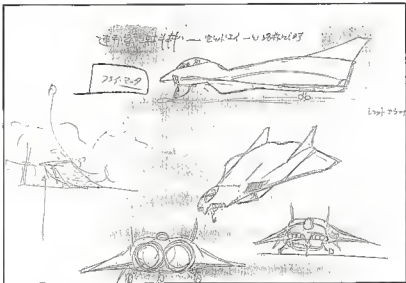
ルールの苦しみみたいなものとか、情けなさみたいなものが、もうひとつできていなくなっただけじゃないかと思ったり、シャアと拉拉アの関係も、もう少しドロリットと描けなかったなあと考えたり、テムとアムロの関係をもう少し絶対にできなかったかなあと、スレッガーの死に様とか、カツ・レツ・キツがなぜホワイトベースに残ったのか……などエピソードがきれいに流れ過ぎちゃって歯止めがなかったですね。だから印象がうすいのでしょうか……

カイとミハルの話のようにワンポイントがカチツと決まるストーリーじゃなかったからでしょうね。それにしても登場人物が多くて、それをみんな絡めてしまったというのは少し反省すべきだと思っています。といっても全体の構成から見ても、自分から言い出すのも少々抵抗がありますが、かなり人の絡みがうまくできていたブロックではなかったでしょうか。忘れていましたが、ドズルとゼナ、ミネバの関係も、もう少し描きたかったですね。あれはほんのさわりだけです……内容を話し始めたところだったのであなつてしまったのですけれどもね。



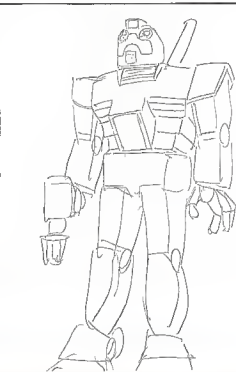
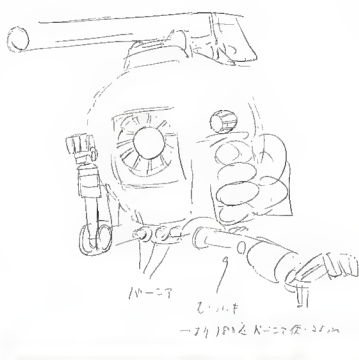
ファンファン

W・Bを守ろうとシャアのズゴックへ突撃、ジャブローに散ったウッディ大尉の乗ったおなじみの機体。そのラフスケッチである。



フライ・マンタ

第25話のオデッサの戦いで初登場し、第30話でもジャブロー防空戦闘機として活躍した。普通、C・Dからメカのラフスケッチを出す事は無い事が多く、まして3面図まで描いてくるとは、裏返して言うならばC・Dの富野氏の頭にかにしっかりとイメージがあったかを示している。



G^{MM}、ボール
ガンダムタイプの量産型モビルスーツ「G^{MM}」と同じく、G^{MM}の支援用として開発された簡易量産型モビルスーツ「ボール」の富野氏によるラフスケッチ。大もとのラインはほとんど変わっていない。



あれは、雲が薄いから光が透けて見えるんです。だからにじんで見えたんでしょう。きつと……。言い忘れていましたが、カムラン

が見えるのは、夜は雲がなくなるからですか？
——サイドの夜景で、反対側の陸地のネオン

が見えるような近い所にコロニーがあったらぶつかりそうで嫌でしょう。サイド6で惜しかったと反省しているのは、住んでいる人間が描かれていないことです。軍人を見た中立サイドの人間の反応を描けば、もう少し面白くなったかもしれません。

サイド6のコロニー群は互いにかなり離れていますね。
すぐに見えるような近い所にコロニーがあったらぶつかりそうで嫌でしょう。サイド6で惜しかったと反省しているのは、住んでいる人間が描かれていないことです。軍人を見た中立サイドの人間の反応を描けば、もう少し面白くなったかもしれません。

ないですね。すみません。

——27話と36話で好きなシーンはどこでしょうか？

ジャブローの上空で、ガウから次々にモビルスーツが出て来るでしょう。「ああ、ようやく戦争らしくなったな」と安心した記憶があります。このプロットは、ガンダムの中で一番おもしろくないプロットになったのではないかと。という不安がありまして。

サイド6のコロニー群は互いにかなり離れていますね。
すぐに見えるような近い所にコロニーがあったらぶつかりそうで嫌でしょう。サイド6で惜しかったと反省しているのは、住んでいる人間が描かれていないことです。軍人を見た中立サイドの人間の反応を描けば、もう少し面白くなったかもしれません。

サイド6のコロニー群は互いにかなり離れていますね。
すぐに見えるような近い所にコロニーがあったらぶつかりそうで嫌でしょう。サイド6で惜しかったと反省しているのは、住んでいる人間が描かれていないことです。軍人を見た中立サイドの人間の反応を描けば、もう少し面白くなったかもしれません。

サイド6のコロニー群は互いにかなり離れていますね。
すぐに見えるような近い所にコロニーがあったらぶつかりそうで嫌でしょう。サイド6で惜しかったと反省しているのは、住んでいる人間が描かれていないことです。軍人を見た中立サイドの人間の反応を描けば、もう少し面白くなったかもしれません。

サイド6のコロニー群は互いにかなり離れていますね。
すぐに見えるような近い所にコロニーがあったらぶつかりそうで嫌でしょう。サイド6で惜しかったと反省しているのは、住んでいる人間が描かれていないことです。軍人を見た中立サイドの人間の反応を描けば、もう少し面白くなったかもしれません。

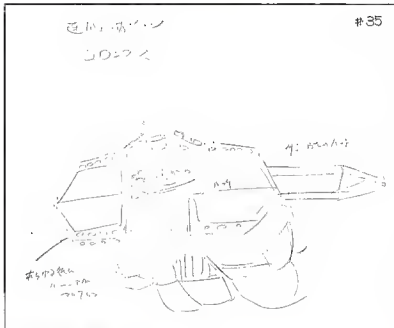
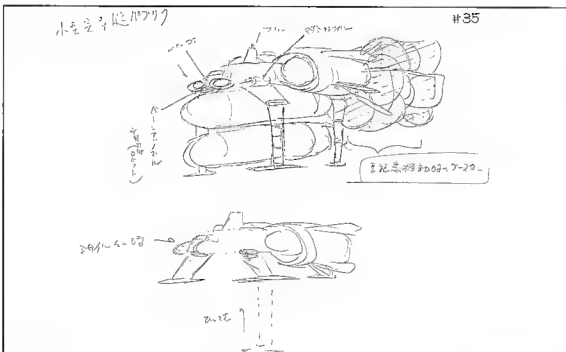
サイド6のコロニー群は互いにかなり離れていますね。
すぐに見えるような近い所にコロニーがあったらぶつかりそうで嫌でしょう。サイド6で惜しかったと反省しているのは、住んでいる人間が描かれていないことです。軍人を見た中立サイドの人間の反応を描けば、もう少し面白くなったかもしれません。

サイド6のコロニー群は互いにかなり離れていますね。
すぐに見えるような近い所にコロニーがあったらぶつかりそうで嫌でしょう。サイド6で惜しかったと反省しているのは、住んでいる人間が描かれていないことです。軍人を見た中立サイドの人間の反応を描けば、もう少し面白くなったかもしれません。

サイド6のコロニー群は互いにかなり離れていますね。
すぐに見えるような近い所にコロニーがあったらぶつかりそうで嫌でしょう。サイド6で惜しかったと反省しているのは、住んでいる人間が描かれていないことです。軍人を見た中立サイドの人間の反応を描けば、もう少し面白くなったかもしれません。

サイド6のコロニー群は互いにかなり離れていますね。
すぐに見えるような近い所にコロニーがあったらぶつかりそうで嫌でしょう。サイド6で惜しかったと反省しているのは、住んでいる人間が描かれていないことです。軍人を見た中立サイドの人間の反応を描けば、もう少し面白くなったかもしれません。

パブリック
連邦宇宙軍の小型突撃艇。第35話からのソロモン攻略戦で先陣を切って血路を開いた。パブリック本体は、この富野氏のラフから大河原氏の手を経て重量感のあるものともらしきフォルムとなった。

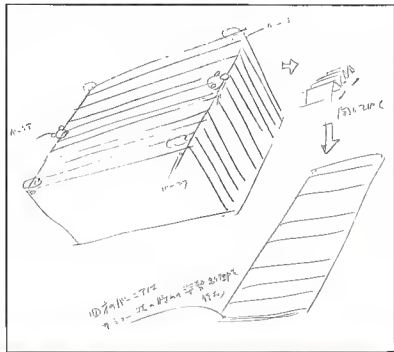


連邦補給艦コロブス

第35話にW・B物資補給に登場したコロブスのラフスケッチ。形状からW・Bタイプへの補給を考慮してデザインされたものだろう。

ソーラ・システム

ソロモン攻略戦において、連邦の要塞攻略の切り札ともなった新兵器。ラフスケッチの段階でバーニアによる動きの指定もなされていることに注意。



は、政府高官を父親に持つエリートです。いかに宇宙時代とはいえ、個人の宇宙艇を持つというのはかなりの金持ちであり、それなり身分なのでしょう。そうでなくては、ミライの家柄とつりあわないでしょ！僕はガンダムの中で「愛している」という言葉は一言も出ていないと信じていたんですが、カムランだけがミライに「愛してる」といってるんですよ。それを平気で言えるところがカムランの魅力のひとつではないでしょうか。

—— カイがソロモン戦で、セイラさんに冗談で言ってますね。

あれは始めから冗談ですよ。ただ、録音の時に古川君が本気でいってしまっていて三回くらい練習したのかな……彼が本気でいってしまった時に、「冗談じゃないよ！やめてくれ、ガンダムではそんな言葉は出ないんだよ」という意味の事をいった気配があります。

男女の愛ということでは、マチルダの婚約者ウッド大尉がいいます。

マチルダを殺そうと決めた時から本気で考えたんです。一人の人間が死んで、その後からその人を際立たせるにはどんな方法があるかなと考えたんです。思い出話を単純に挿入しても、マチルダの世界が広がらないだろうと思ったので、それで婚約者を最終的に出したわけです。ウッドの場合、視聴者も含めた全員が、

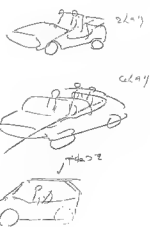
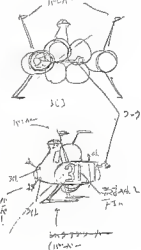
「ああ、この男だったら、マチルダの亭主になってもいいな」とゆるめるような人間でしたから、マチルダの私生活に対する各自の思いが広まったのではないのでしょうか。ウッドの絡む話は、もう二本くらい作る予定だったと気遣っています。

この四巻に納められている27話から36話は大変に象徴的だったのでしょうか。各話に色々

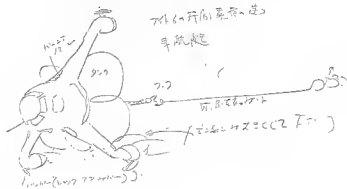
サイド6のメカニクス (電流駆動)

サイド6の乗用車

(電流駆動) 一つと二つあり



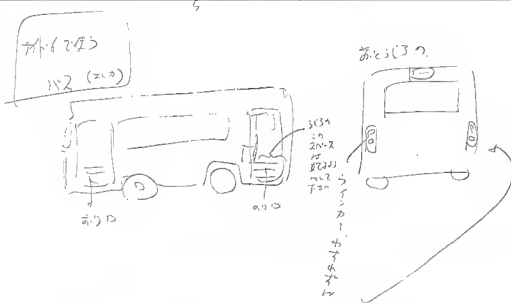
3種類あり



サイド6のバス (乗用車)



サイド6のメカニクス
サイド6での小道具ラフ。エレカー等の細かいデザインは大河原氏に任せられた様である。反面、パトロール機の方は色々細かい設定がなされているのが面白い。バスは、アムロと父の再会シーンの芝居上の指示がされている。



この四巻に納められている物語は、考えてみると重要な話かもしれませんね。作り手側としては、他のブロックと比較して一番印象が薄い、と思っています。(7月14日談)

ただニュータイプへの部分で少々やり過ぎたというのが、36話のドズルが死ぬ寸前のアレです。後悔してます。本当にリテイクしたかったんですけど、時間が足りなくて……あのシーンは山崎君がやったことだけど、許し難いなあ、僕自身あのシーンを見てビックリしましたよ。

ただニュータイプの部分で少々やり過ぎたというのが、36話のドズルが死ぬ寸前のアレです。後悔してます。本当にリテイクしたかったんですけど、時間が足りなくて……あのシーンは山崎君がやったことだけど、許し難いなあ、僕自身あのシーンを見てビックリしましたよ。

ただニュータイプの部分で少々やり過ぎたというのが、36話のドズルが死ぬ寸前のアレです。後悔してます。本当にリテイクしたかったんですけど、時間が足りなくて……あのシーンは山崎君がやったことだけど、許し難いなあ、僕自身あのシーンを見てビックリしましたよ。

ただニュータイプの部分で少々やり過ぎたというのが、36話のドズルが死ぬ寸前のアレです。後悔してます。本当にリテイクしたかったんですけど、時間が足りなくて……あのシーンは山崎君がやったことだけど、許し難いなあ、僕自身あのシーンを見てビックリしましたよ。

ただニュータイプの部分で少々やり過ぎたというのが、36話のドズルが死ぬ寸前のアレです。後悔してます。本当にリテイクしたかったんですけど、時間が足りなくて……あのシーンは山崎君がやったことだけど、許し難いなあ、僕自身あのシーンを見てビックリしましたよ。



— 27・28話のカイとミハルのエピソードは非常に印象的でしたが、カイ役として、ミハルの死後特に変化をつけましたか？

基本的に一人の人間とは単一平面な性格ではなく、実に多面的なんです。リアルに考えると生身の人間は単一には捕えられないから見ていた人はミハルの死後カイが唐突に強くなったように感じたのかも知れませんね。でも僕としては、カイの今までと違う面がたまにま出てきたんだ、と解釈しました。

— ガンダムと他のアニメを比べて、難しかったということはありませんか？

難しいとは思いませんでした。ただ低年層の視聴者にはストーリーを理解する点で、難しい話なのかもしれません。

でもそれはそれでいいんじゃないですか？

ライオンの吹える声を、大人はライオンの咆哮と捕え、子供はライオンが声を出したと捕える、その違いでしょう。子供は子供の感性でものを捕えるから、宇宙移民計画がどのなんてことが判らなくても、通じるところがあるのでないでしょうか。それよりもキャラクターをパターン化しなかったという点で異質なアニメだと思います。二枚目の中の三枚目、ヒーローの中の弱点というものが描かれていて、比較的人間に近いリアルな設定になっているところが新しいですね。

— 古川さんがつかんだカイのミハルに対する愛情というのは？

カイっていうのは表面的には饒舌な感じで

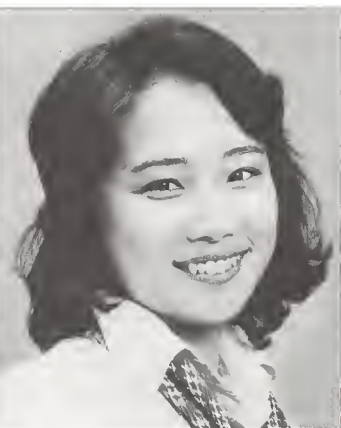
すが、自分の真意を伝える時には実に寡黙な人物で、斜に構えて自分の気持ちを表に出すところがあります。「バカヤロー」って言いながら「そうですかね」で済ませてしまう、その意味では彼の言動を表面的に捕えてしまうことはできないんです。理屈っぽく説明するのなら、青春の真直中で若い少年達が死と隣り合の状況におかれていて、その、第三者からは計り知れない彼らの立場の内面でカイはミハルを仲間として迎えた、という感じがするんです。だから言葉では簡単に説明できませんね。

その点ごく普通の気持ちで、「愛してるよ」とセイラに言ったつもりでしたけど、富野さんから本気で言わないでくれと言われて……

— ガンダムで印象に残ったことは？

僕自身が俳優として直面している、どうしても突破したい壁があるわけですよ。というのは、芸術とは前衛的なものでなければならぬ、常に最前線を切っていなければならぬ、常にかからずして、壁を突破しなければその前衛が保つていけないわけです。だからぶつかるとして壁を越えるその問題を、カイという人物を作る上での富野さんとのコミュニケーションの中で、彼に指摘されたことが強烈な印象として残っています。

演技的な僕の今の壁と富野さんから指摘されたものが同じことを指摘していたというあたり、富野さんはすごい人だと思いますね。このショックがかなり強かったんですよ。



ちっちゃな男の子の役をいくつか、それまで「ガンダム」でしてはいたんですが、「ガンダム」の全体像とか大ざっぱなストーリーは、ミハルをやらせていただいていた初めてわかりました。初めに富野さんとか松浦さんに色々説明をさせていただいたんです。

前もって聞いていたことは、「ガンダム」の大体のお話とか、ミハルの年齢や性格設定ぐらいでした。台本にも1話目には彼女自身もあまり出ていませんでした。2話目、3話目になって多く出てくるようになったので、やつとミハルが実際にはどんな女の子なのかわかったんです。彼女には両親がいません。家が豊かでないので小さな妹や弟を食べさせていくために、まだ若いにもかかわらず彼女は働いていかなきゃならないんです。でも、そんな設定とか、途中で死んでしまうということぐらいしか初めは知りませんでした。ですから最初は彼女がスパイであることや、カイとの出会いなどはあまり気にしないで、若い感覚を持った普通の女の子というつもりでやりました。かなり意識してミハルをやるようになったのは、彼女がホワイトベースに乗り込んでカイといういろいろあった頃からですね。回を追うごとに彼女のいろんな面が出てきましたけれど、私自身、すんなりと受け入れたことのできた人物でした。つまり作られた、わざとらしいキャラクターじゃなかったのです。確かにスパイをやっていましたけれど、その心の中はどこにでもいる普通の女の子と

同じだったと思っています。カイに対する自分の気持ちに素直に生きていこうとして結局はああいう風な死に方をしてしまったのですけれど、本当にスパイに徹していたら決してああはならなかったと思います。そんな素直なミハルだったからこそ私にもできたでしょうね。ですから「演じる」という心境ではありませんでした。アニメーションで声だけあてたというんじゃないくて、舞台で女の子の役になりきってやつたような感覚が心に残っていますね。

アフレコの雰囲気は和気あいあいとしていてとっても良かったです。若さしきがありました。また、ミハルをこういう風にやって下さいというような一種の強制はなかったですね。自由にやらせていただいたという印象が強いです。ただ、最後の回想シーンでカイに対してミハルが言う部分、その時だけは総監督の富野さんに「このシーンでは彼女が今まで押さえていた女の子らしさ、そういうものを十分に出して下さい」というような事を言われました。それ以外は一切自由でした。

私はミハルのようなティーンの女の子の役をしたのは初めてでした。今まではどうしても子供の役が多かったんです。そんなこともあってミハルの役にはのめりこみました。これは今でも忘れられません。ですからガンダムの反響を聞かれたときに、ミハルを覚えていてくれる人がいるたびに、怖いような気もしますし、責任を感じます。



スレッガーをやるのが決り最初に設定の絵を受け取った時、それには「ロッキ」のようなタイプの性格だと記してありました。でもその映画を残念ながら見ていないので、設定でだいたい感じをつかんでやりました。スレッガーには魅力がありました。豪快でスッカリしていて、同時にインテリ調でキザで、少しスレていて男らしくもあり、今までのアニメのキャラクターと比べ、ずいぶんいろいろな面を持った人間臭い人物だったんですね。だからストーリーをわきまえて、彼のかもし出すその場の雰囲気はいかに出すかに気を配りましたね。多面的性格特性の中でも特に男らしさという点は大事にしました。

人間やつぱり心ですよ。その意味で彼は二枚目だと思えます。でも、どんな二枚目でもつねにりりしいわけじゃないし、時には冗談を言ったりする人です。だけどいざという時には情熱家になって目標に向かっていくんじゃないかな。そんなところを僕は出したかったですね。

ソロモン攻略に出撃する直前に彼がミライをキスをかわすシーンは好きです。自分の思いを打ち明けるところもいいですね。僕達つたら僕なりの愛の打ち明け方があるように、彼にも彼なりのやり方があります。そこで彼ならまず、こうするなってわかるほど彼に徹するようになってね。ちよっとはにかなでいるけど、やつぱりあの愛の打ち明け方はキザっぽいんですよ。でも彼には打ち明けること

によってミライを苦しめるんじゃないか、との心配があったんです。幸せにするってことは自分の手で幸せにすることだと思っから、死んだら意味がないですよ。だから僕は堂々と真意を打ち明けたスレッガーは、包容力のある強い男だと思いますね。

「これが戦争なのよね」という一言はとても生きている感じがします。男つていざとなると生をかけて戦えるんじゃないかな。だから愛してるとは言わずに戦争の現状を受けとめたんでしょ。ここはできるだけサラツと言うように努めました。

彼はどうしても目立ってしまったんです。でもそれは注意しないとうとうしようもなくイヤミな男に誤解されやすいので気を使いました。でも彼にはつねに心に余裕があつて、まわりの出来事を一歩離れて見ている風でもありましたね。人間というのは余裕がないといひものはできないという良い例じゃないかな。

スレッガーというキャラクターは主役クラスまで十分にいけると思えますよ。実際やりやすかつたし、やつてて気分も良かったしね。それだけ魅力があつたんでしょね。

役者は自分にまわってきたキャラクターの生きざまを精一杯出さなきゃいけないんです。えり好みはできないけど、悪役にしろなんにしろ、人間の生きざまや感情がストレートに出せるキャラクターは好きです。その意味ではスレッガー役ができたことは、とても幸せなことでした。



最初スタッフの人に「そのままで大丈夫ですよ」と笑いながら言われました。まあ、僕も気の強い男っぽいタイプの人間ではないですからね。台本を読んで、あまり性格的に強い人ではないと一目でわかりました。カムランは、自分では気付かないけれどどこか自立心のない人間でしょうね。

ストーリー上どうなるのか、あらかじめ聞いていませんでした。1話目で終わるのかと思っていたら、また翌週出てきまして、ごちゃごちゃとやったり、なんかしたいんだあうんぬんとか、面白い男だと思いました。

カムランの印象というのは、よくいる人だなあって事です。普通、アニメのキャラクターはそれなりに注目する部分を持っていると、あつ、ごく普通の人が出てきたって、なにかそんな気がしましたね。ガンダムの登場人物はみんな人間臭い人間ですけど、カムランは強烈な個性のない人間でした。

彼の考えや行動には共鳴はしませんけれど、わかるような気はします。あまり作られたキャラクターではないせいとも知れませんが、以外とすんなりその役に入っていました。あまり意図的に、こうしよう、ああしようというようには作られていなかったんですね。

カムランとミライは婚約者同士だったのに、もう元に戻れないほど2人の心は離れてしまっていた。これは結局は2人の環境が違ってきたせいなのでしょうね。ミライは戦いの中

なのに、カムランは民間人のままで、しかもなにかといえれば父親に頼ろうとしていました。頼れる人なしには生きられないんですね。だからそんな弱さがミライには耐えられなかったんでしょ。それに対して、カムランは久しぶりにミライに会って、昔の彼女とは違う新たな魅力を持った女性に見えたのではないのでしょうか。ただ昔を引きずっていただけとは思いたくないですね。

カムランが「ガンダム」の中に登場して良かったと思います。僕は少ししか参加しなかったので間違っているかもしれませんが、普通の民間人もちよくちよく出てきたように思いますが、まともに出てきたのは彼ぐらいじゃなかったですかねえ。

「ガンダム」のキャラクターって、メイン人物のほとんどが人間として強いですね。みんな異和感を持ちながらも、結局は強さに目ざめていったわけですね。対するカムランは強さに目ざめるわけでもなく、弱いままで死ぬこともなかった人。でもこれが普通ではないですか。みんな強く大きくなっていますけれど、中にはこのようにならない人だっているんですよ。それはそれで仕方ないことではないかと思えますね。

途中からの参加で、当初は「ガンダム」の世界がよくわからなくて驚きました。でもそんな僕でも、マ・クベだけではなく、正反對のキャラクターともいえるカムランもできたのは幸せだったと思います。

機動戦士 **ガンダム記録全集** 5

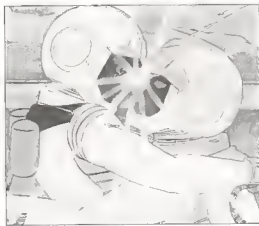
★豪華保存本／限定発行 ●全5巻堂々完結

本書の主な構成内容

- 第37～43話のビジュアルタイジェスト収録
- メインキャラクター、メカニックをカラーシー
にて紹介するキャラクターシート
- 登場するキャラクター、メカニック、美術設定資
料を満載
- 演出家・脚本家の本音を再現、もうひとつのラスト
・シーン
- メインスタッフの語る苦労話やガンダム思い出話
- Spot Light・ガンダム製作の裏方さんたち
- 製作スタッフ&声優コメント収録
- ★安彦良和によるオリジナル・カラーグラフィポスター

★大河原邦男オリジナル・カラーグラフィ

※本書の内容が若干変更になる事がありますの
でご了承下さい。

10月下旬
発売予定

予約申し込み方法

- お申し込みは本誌についている愛読者カードに、
必要事項を書いてお送り下さい。
- お申し込みになりますと、日本サンライズより代
金支払いの方法、及び本書の/インプレットを書面
にてお知らせ致しますので、それまでは現金を
送らない様お願い致します。
- 本書の発送は10月下旬以降になります。
- 尚、本書は限定発行ですので、万一、入手できな
い場合は御了承下さい。
- 本書についてのお問合せは日曜、祭日を除く平日
の午前11時より午後5時まで 03 (399) 8962日本
サンライズあてにお願い致します。

造本・体裁

- 判型 / B 5判 (左右18.2
×天地25.7cm)
- 頁数 / 全224ページ建て
- 用紙 / 両面アート (90kg)
上質 (90kg) を使用
- 造本 / ハードカバー、堅
牢上製本仕上げ
(角背、かがり綴じ)
- 色数 / 4色・128ページ、
2色32ページ1色
64ページ
- 印刷 / オールオフセット
- ★綴じ込みポスター

定価2,900円

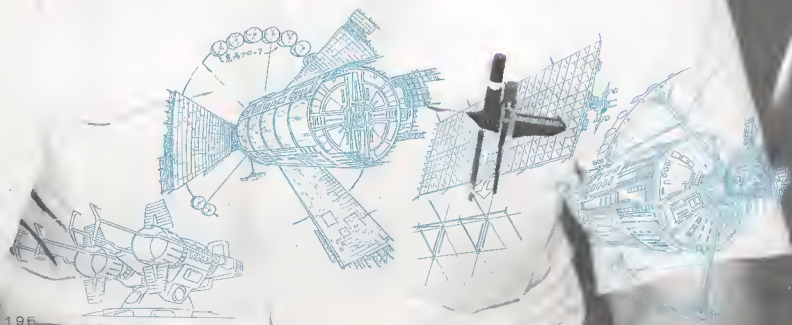
〈送料別途350円〉

※原則として記録全集をお買い上げの方
には図案内書をお送り致します。

※記録全集をお買い上げの方で、まだ1
～3巻を入手されていない方には、特別
製作いたしますので別途、官製はがきに
てお申し込み下さい。詳しい説明書をお
送り致します。

※お申し込みの方で18歳未満の方は、必ず
保護者の方の署名、捺印をお願い致し
ます。

松崎健一



そもSF考証とはなんぞや?と問われれば答えは「講釈師、見てきたような嘘をつき」これに尽きる。それもウソは大きい程良い。こういった作品の場合、小さな嘘はたいいてい押し潰されて見えなくなり、浮き立って見えた時は空々しさが増すばかりとなりかねないからである——まあ詐欺師と同じ要領という訳か?

とは言っても虚構の世界をもっともらしく構築しなければならないのだからウソ八百ばかりでなく、なんらかの根拠も必要である。
 (ミノフスキー粒子)を例に取って見よう。これが無ければガンダムにおけるモビルスーツの接近戦というのは全くの絵空事になってしまう。それは現代の航空機や艦船に代表される電子戦の状況を見れば明白である。即ちレーダーとミサイル——ビーム兵器も出現しつつある——そしてECM(電波妨害兵器)



ガンダムとグフのビームサーベル <19話>

やECM(対ECM兵器)といった電波と足の長い兵器とのロングレンジの闘いとなっているのが現状である。最早、人間の目だけが頼りの時代ではないのだ。ましてや宇宙空間である。探知能力と有効射程、破壊力だけが物を言う環境で近距離戦闘能力しか持たないモビルスーツなどお笑い草だ。

では、どうすればいいか?確かに現代のECM技術はより高度に発達するだろう。だがこれもECMとECMの追いかけっこでしかない。もっと広範囲に、しかも簡単には対抗策の取れないようなものはないか。そこで登場願ったのがミノフスキー粒子と名付けた空想の電波妨害物質なのである。

ミノフスキー粒子のヒントは意外と身近なところにあった。(電離層)である。電離層は太陽の紫外線によって大気上層部の原子がイオン化したものと考えられている。これが高



ホワイトベースのビーム砲 <10話>

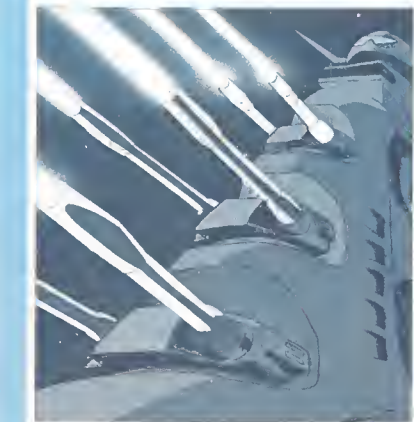
度一〇〇kmから四〇〇kmくらいのところに大別して二つの層を成している。この電離層が波長の長い電波を反射したり、部分によっては吸収したりする事は皆さんも御存知の通りである。このイメージを理論づけして拡大し戦略、戦術に利用出来るようにしたのがミノフスキー粒子なのである。

ミノフスキー粒子はかつて描かれなかった素粒子として登場する。その静止質量はほとんどゼロで正粒子は負に、反粒子は正に荷電している。そして質量がほとんどゼロの為、通常ほとんど全ての物質を透過する。ミノフスキー粒子は発生と同時にほぼ光速で広がってフォース(転換相互作用)と呼ばれる「力」によって正反粒子が一定の間隔をおいた立方格子状に整列する。この立方格子の作り出す電磁波作用によって超マイクロ波よりも波長の長い電波の伝承が妨害される。従って赤

●ガンダム・ミニ百科



ガンダムのビームライフル〈9話〉



ムサイのビーム砲（メガ粒子砲）〈3話〉

外線やレーザー探知機、可視光線内での目視あたりが残された探知手段となる。

てつとり早く言えば、ちょっと離れるとレーザーも電波による通信もダメという訳なのだ。勿論、近距離でなら妨害の程度が軽いからなんとか使えない事もない。だから画面の中でも無線機を使っていたし、距離によっては音声や映像にノイズが入った訳だ。そして遠距離通信にはレーザーを使い、赤外線探知器が幅をきかすのである（ちなみにミノフスキー粒子の名は総監督の富野が好きから来ている）。

さて、ミノフスキー粒子は完全に空想の産物だがガンダムにおいては数少ない例である。人によつては意外に思われるかも知れないが近未来を描いたガンダムの世界では現実から発展したと思われるものが多いのだ。その最

たるものは物語の発端にしたサイド7に登場代表されるスペース・コロニーである。

スペース・コロニーは実際にNASA（アメリカ航空宇宙局）とスタンフォード大学を中心に見共同研究を行った宇宙開発プロジェクトである。ガンダムに登場したスペース・コロニーの多くはこのプロジェクトの内、最大級の島3号と呼ばれるものを基本としている。

まあ、このタイプのスペース・コロニーに関しては他でも書いたしNHK教育テレビでも紹介されていたので、ここではこの程度にしておく。もつと詳しく知りたい場合は次のような本が出版されているので、そちらを参照していただきたい。

「宇宙植民島」G・K・オニール著

プレジデント社

「Colonies in Space」T.A. Heppenheimer

STACKPOLE BOOKS

（WARNER社のポケット版もある）

「TO THE EDGES OF THE UNIVERSE」

Don DeNiro Celestial Arts

「Space Settlements」NASA

「宇宙島への旅―地球脱出作戦」木村繁

朝日少年少女理科年鑑別冊21世紀のサイエンス」朝日新聞社

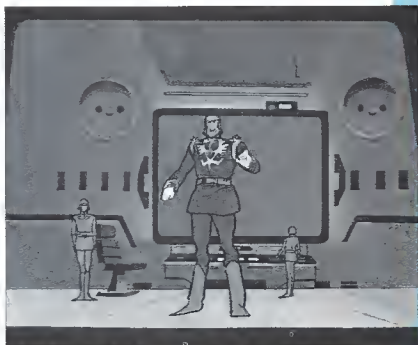
ただしサイド3のスペース・コロニーに関しては少々趣が異なる。サイド3のものは採

光用の窓が無い。この場合、円筒内の面積は全て利用出来るし、宇宙塵や有害な放射線の対策は比較的楽な上に強度が高くとれる。しかし、その反面エネルギー（太陽光）を直接利用出来ないのもロスも多くなる。発電衛星で一度太陽エネルギーを電気に転換し、コロニーに送電してから太陽灯を点さなくてはな

らないからだ。ついでに付け加えるならこの発電衛星も現在計画されているものの延長上にある。計画によると一辺が10km以上もある巨大な発電器である。

サイド3型のスペース・コロニーで重要なポイントはその強度と遮蔽性、そして外部に設置された発電衛星である。これはサイド3型のスペース・コロニーに軽度の改造を施す事によってソーラ・レイ、即ち直径6kmの巨大なレーザー砲を新たに建造する手間を省けずには得られるという事を意味している。

次にソーラ・レイと良く混同される連邦軍のソーラ・システム（本来、太陽系を意味するのだが、最近では家庭用太陽熱温水器の事も言うらしい）。これは宇宙空間に広げた多数の鏡をコントロールして太陽光を一点に集中させ、数千度の熱で敵を破壊しようというも



長距離レーザー通信（数千km）画像、音声とも非常に鮮明。

の。言うなれば、ただの巨大な凹面鏡のようなもので、現在反射鏡によって集光したエネルギーで発電しようという太陽エネルギー発電所と何ら変わるところは無い。思想的にはアルキメデスが鏡を使って船を焼いたと伝えられる昔にまで遡る事が出来る。

メガ粒子砲も全く荒唐無稽の光線砲という訳ではない。アメリカが発表した記事にソ連がビーム兵器を開発中である事を確認したというものがあつた。当然アメリカも同様の研究をしていると見なされる。その形式は様々でレーザーはもとより核爆発のエネルギーをそのままビーム兵器として応用するという乱暴なものまである。そしてガンダムにおけるメガ粒子砲はそのうち荷電粒子砲と呼ばれるビーム兵器の一種である。

荷電粒子砲はサイクロトロン（粒子加速器）

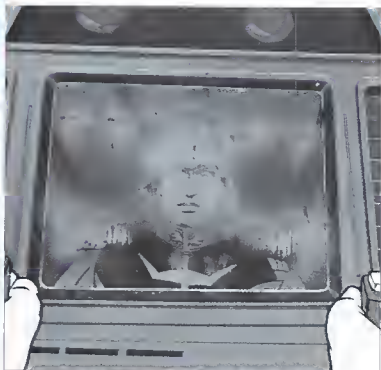


近距離電波通信（数km程度）画像、音声とも特に劣化なし。

と似ている。サイクロトロンは陽子とか重陽子を、正と負の電荷を交互に与えられるようになっている磁場によって高速度に加速して発射するものである。この加速された陽子なりアルファ粒子なりを弾丸として原子を破壊し、その構造を調べたりするのだ。

荷電粒子砲も原理的には全く同じで、重金属等の粒子を加速して発射するものだ。ただし、いかに加速してあるとはいえレーザーのような光速より遙かに遅い。しかも宇宙空間（真空中）でもその光点は捉える事が出来る。（真空中）でもその光点は捉える事が出来る。この種のビーム砲の弱点は太空中では極端に威力の落ちる事だ。例えばテレビのブラウン管に使われている電子ビーム銃は目的こそ違え、構造は荷電粒子砲と非常に良く似ている。撃ち出されるものが電子である事とエネルギーが段違いに低い事だけだ。そしてブラ

●ガンダム・ミニ百科



中距離電波通信（数十km）画像は時々乱れ、音声に雑音が入る。



ジオン軍、ソーラ・レイ

ウン管の中はほぼ真空である。発射された電子ビームは数十センチ離れた蛍光面にまで飛行する。では、この電子ビーム銃を空気中に出したらどうなるだろうか？飛び出した電子ビームは数センチと飛べないのだ。従って荷電粒子砲といえど大気中、ましてや雲や水中ではおさらである。と、ここまで書けば地球上でホワイト・ベースがサンジバルとその艦隊に追われた時、何故嵐の中に飛び込んで行ったかお分りの事と思う。

最後にモビルスーツだが、この基本発想は勿論ロバート・A・ハインラインの「宇宙の戦士」(STARSHIP TROOPERS・早川書房刊)にある。この物語に登場する機動歩兵の使用した強化服はいわば個人用万能戦車で、着用した人間のパワーを飛躍的に増幅して、しかも生の卵を潰さずにつかめる程デリケートに作動してくれる。そして強化服に装備されたコンパクトな探知機や各種の火器類と二基のジェットは生身の人間を超人に仕立て上げてくれる。もともと「宇宙の戦士」にはミノフスキー粒子のような物は登場しないから、あくまで行動範囲は地上に限定される。

こうして設定を積み上げてゆくと世界はそれなりの形を成してくる。これ等の設定は物語を動かす為のもののだが、時として作品自体をしるす手帳足城ともなりうる。作品の発展性を阻害する場合もあるし、アニメという大勢の共同作業ゆえに設定上の誤解や連絡ミスといった事態も起こりうる。ガンダムとして例外ではない。だからビーム・サーベルで固体のヒート・ホークを受け止めたらししてしまうのだ。

もともとミスであるところも、そうでないところも、あそこがどうここがどうと突いてくる人が良くいるという事は、こたわらなくてはならない、つまり言うに値しない作品ではないという証拠だろうが……。

協力 アー・ナンダスン

河森正治

チョイ役だったけど…

星山博之



何のアニメ誌だったか忘れたが「ガンダム」の批評の中で、ネオリアリズムを感じるという見方があった。

ボクは「うーん」と唸った。

その見方は一面あたっていると思う。

というのは、富野さんという作家の中にボク自身、その質を感じたことがあったからだ。彼が否定するかどうか聞いてみないと判らないが、少なからず、ネオリアリズムの影響は受けていると思う。

かくいうボクも、その影響を受けている。シナリオを書いてみたいという気にさせたのは実は、ネオリアリズムの代表作の一つに数えられるデ・シーカの「自転車泥棒」を見た時だ。

今の若い人は知らないだろうが一時代を象いたゴッフルにしろ、アントニオニにしろのちにボクが好んでみた映画の監督は、みなネオリアリズムの影響を受けた人たちだった。そんなわけで、ボク自身、富野さんと同じだと思うが、意識はしなかったが、作品にその色がでたのかも知れない。

「うーん」と、唸り納得させられたのは、この点である。

ネオリアリズム。という言葉がでたついでに言えば、その色を比較的感觉させたのは、「女スパイ潜入」ではなかったかと思う。

戦火の中、ミハルが、スパイ仲間と自転車でおち合うシーンがあった。これは富野さんのアイディアだが、かつての、イタリアンアリズム（ネオリアリズム）の映画を思わせるシーンであった。

この作品は、ボク自身「再会、母よ」と並ぶ好きな作品である。

また書けるかどうかは判らないが、前から



ミハルにはカイのやさしさが身にしみて、毛布をかけてやる <27話>



	146	147	148	149	150	151	152
ミハル	火曜がゆく、曜先上る ミハル、自転車かゆくスライド	私服のコノリー、自転車をか 「二台の自転車すればかう	はつと止るミハル	あつと、とまるコノリー	うしろの火曜がとぶ み・ゆするコノリー	ミハルの手、金をつくとめる せつはむいて、バックを出す	夢中から金の入った袋を出して
コノリー	「お急ぎですか？」これがコノリーとの合言葉だった。<27話>	「お急ぎですか？」これがコノリーとの合言葉だった。<27話>	「お急ぎですか？」これがコノリーとの合言葉だった。<27話>	「お急ぎですか？」これがコノリーとの合言葉だった。<27話>	「お急ぎですか？」これがコノリーとの合言葉だった。<27話>	「お急ぎですか？」これがコノリーとの合言葉だった。<27話>	「お急ぎですか？」これがコノリーとの合言葉だった。<27話>

ミハルがホワイトベースの潜入を命じられるシーンのAR 台本 <27話>

一度書きたいと思っていたことがあった作品だった。
一つは仲間を売るとシチュエーションだ。今までのテレビ・アニメの中で、レギュラー格の人物が、平気で仲間を売るというのはボククの記憶にはなかったシチュエーションだ。あつても、ゲストがするくらいのもんだつたと思う。
シデンが仲間を売る気になったのは、相手「ミハル」だったからといえる。
「ミハル」は、生活を第一義にして生きている。生きざまにおいて、何よりもまず食べるという「生活」があつた。
それをシデンが知った時、現実派のシデンは彼女に共感を覚えた。
ボクなりに判つていわせてもらえば、シデンはホワイト・ベースに乗るまでの人生は、うそばかりを見せられて来た若者だつたと思う。「にせもの」うそが価値を認められ社会に通用する時、人は「白らけ」を感じる。
そんなシデンが初めて、本物の「と感じたのがミハルだつたのだ。
好き嫌いではない、いい悪いでもない……間違いない。人間の存在感。を彼は感じとつたといえる。彼が「真実」を感じた時、シデンは仲間を売れたのである。たとえ、ためらいはあつたとしても……。
ボクは、シデンは「軟弱者」ではあるが、人一倍、感受性の強い人間だと思っている。ミハルも又、同じだ。
彼女自身、シデンを「軟弱者」だとは思つても、弱い人間だとは思わなかったのではなにか。むしろ、仲間を売るシデンにその時「強さ」を感じたのかも知れないと思う。
ミハルに關していえば、お金に一番こだわ



ミハルの連れてきた、見知らぬ訪問者に警戒するシル、ミリー〈27話〉



何気なく話題をホワイトベースに向け情報を探るミハル〈27話〉



ミハルの言動からスパイであることにカイは気づいた〈27話〉

っているが、実はお金を一番嫌っていたのではないか。ボクがいうのも変だが、この落差の中に、彼女への愛着を感じる。

この作品の中で、もう一つやりたいことがやれた気がする。

チョイ役だったけれど、ミハルの幼い弟妹の扱いからだ。

ボクは子供というのは俗にいう「天使のような」一面の他に、残酷性を備えた存在だと思っている。

ところが、これを書くまでは、ドラマでてくる子供というと、どうもお涙頂戴の「手」あるいは「同情」をひく形でしか扱われていない気がしていたのだ。テレビの時代劇にはその傾向が強い。

つまり、小道具。であって「人間」として扱われていない不満があった。「子連れ狼」のころから変わっては来ているけど……まだま

だ日本のドラマには多い気がする。

話を戻すと、ミハルの幼い弟妹は、お姉さんのしている仕事がどういうものか、うすうすは感じている子供だ。

決断している仕事だとは思っていないのだ。だからこそ、シデン（他人）が家を訪れた時一瞬、驚きの色をみせる。そして、積極的にお姉さんの仕事を支持しているようにも思える。

「お姉さん、そんな仕事はいけないことだ！」

といったしまわせるのが、今までの子供の描き方だとしたら、この作品では別な子供の一面が描けたのではないかと思っている。

そして、この点を害かせてくれ、表現してくれた富野さんに感謝している。

「自転車泥棒」がでたついでに、映画とは全く関係ないのだが、忘れられない話がある。

もう七、八年も前のことだ。今は演出家として活躍しているある後輩と酒を飲んでた時、映画の話になった。ボクは脚本を書きたいと思つたのは「自転車泥棒」を見てからだと言った。彼は若いしそんな映画を知らなかった。

もちろんボクだって封切でみたわけではない。数日後その後輩はボクの顔をみるなり「星山さんのいってた話と全然違うんだよね」といった。「何がボクは聞きかえした。話をし

ていくと両者全然かみあわなかった。話をし「自転車？」と彼が聞きかえした「そう父親が自転車を盗むんだ」後はそれきり黙りこくった。あとで聞くと勉強熱心な彼は本屋で一冊の本を手にとり買った。ボクに影響を与えた映画を知りたいと思つたのだという。

だが、彼の買った本は自転車ではなく「自動車泥棒」だった。



ガンダムの脚本家は四人いる。松崎健一氏はSF考証のメインスタッフでもあり、富野氏と二人でガンダムの世界を構築した人として知られている。星山博之氏はチーフライターとして、『再会、母よ……』の脚本家として名前を知られている。だがあとの二人、荒木芳久氏と山本優氏については、今まであまりにも光が当てられることがなかったのではないだろうか？

四巻では、この二人にスポットライトを当て、ガンダムの知られざる世界を覗いてみようと思う。脚本家と総監督のぶつかり合いがあつたからこそ、ガンダムが存在したはずなのだから…



『ガンダム』の思い出

荒木芳久



僕が、はじめて富野氏と一緒に仕事をしたのは、『ガンボット・3』である。

「ええと、神フアミリーというのがいるんですよ、何故か」

第二話から参加することになった僕に、富野氏はゆっくり囁んで含めるように、そして自分の考えを確認するように、『ガンボット・3』のテーマ、ドラマの世界について話してくれた。

語気は次第に熱をおびた。

「あの、勝平と香月は……？」

人物のキャラクターについては、もう一度確認の質問をしようと顔をあげた僕は、そのまま口をつぐんでただ富野氏の顔を眺めるはめになる。

それからあとは、話の世界がひろがるばかり。とどまることを知らない。

富野氏が息をついた。ゆっくり煙草に火を点ける。

今だと思つて、僕は頭の中を、クルクル探す。さっきの質問を思い出した。しかし、僕の口は開かなかった。その必要のないことに気がついたから……。

その時すでに、僕の頭の中には、『ガンボット・3』の世界が、富野氏の描こうとする狙いが、すでに叩き込まれていたのだ。そして早く帰ってシナリオを書きはじめたい意欲にさえかられ、腰が宙に浮いた。

凄じ情熱……迫力のある人だ。
「やりがいのある仕事に恵まれたぞ！」

僕は久びきに壮快感を満喫し、軽やかな足取りで帰つたことを覚えていた。

富野氏はそういう人だと思つた。いや、少なくともその時は……。

とにかく、僕は夢中で『ガンボット・シリーズ』を書いた。楽しい作業だった。

ところが、当初の僕の考えがいかに浅薄で甘かったか――。

シリーズの半分もいかないうちに僕はそのことを思い知らされ、ギョツとなったことを今でもはげしく覚えていた。

さて、この本は、『機動戦士ガンダム』の記録全集である。

その貴重なページを、冒頭から『ガンボット』の話やプライベートな感情で書いてしまい、ガンダムのファンの方々から叱られるかもしれない。

しかし、考えるまでもなく、『ガンボット・3』、『ダイターン・3』、『機動戦士ガンダム』と全て富野氏の手による一連の作品である。

『ガンダム』のファンであり、富野氏のファン――違う方がいたら失礼――であれば、『ガンボット』にも『ダイターン』にも、それぞれ思い出があるはず。多少のことは許してくれるだろう――などと、いささか勝手な理屈をつけて、書きはじめた。

もう一つ、『ガンボット』にはじまる三部作のある意味で、『ガンダム』が総決算ともいえる作品であるとするれば、光栄なことにも当初から参加させてもらえた僕には、前二作を全くのけものにして、『ガンダム』は考えられない。

正直言つて僕は（実は不勉強のため）、今までに放映された、いわゆるロボットのものと称される作品の多くを見てはいない。

それでも、『ガンボット』にはじまつた三連作が、今までの同種のものとは大きく違うこと

に気がついた。

社会の最小単位である「家族」を考え、社会構造の是非を考え、人間――人間性ではなく――の精神と肉体の因果におくめんもなく挑戦する。

文字通り、新しいタイプのロボットのものといえるだろう。

だからこそ、総決算ともいえるガンダムの中で、富野氏が『ニュータイプ』（新しいタイプ）の人間を出したい気持に到達したことも、僕にはわかるような気がする。

このことは、富野氏の意図は全く別のところにある、と笑われるかもしれない。しかし事実、ニュータイプ・アムロは登場した。

最初に書いた、僕の『富野氏観』の浅薄さの要因は、どうやらそのへんにあったらしいということに、実は、ガンダムを終了した今になって判つたのだからはずかしい。

ここまできて気がついたのだが、あいつ富野氏のことばかり書いていやがる――と、読者は思うかもしれない。その通りである。

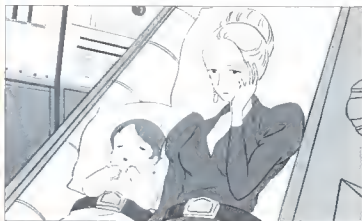
ただしことわつておくが、総監督・富野喜幸論を書くなど、おがましい気持ではないことを誤解しないで欲しい。同じ脚本家の星山氏が、うまいことを書いていた。

――OKされた脚本段階とフィルム化されたものが、かなり違つていた。

つまり、脚本が下書きとしか扱われなかったことへの不満と、脚本タイトルをだしている以上、フィルム化されたもので質問に答えなければならぬという、二重ギャップによるしん巻――なのだ――（ガンダム・記録全集第二巻）――と。

まさに、その通りなのである。

星山氏はガンダムについてそう振り返つて



脱出ボットでソロモンを離れたドスルの妻子、ゼナとミネバ〈36話〉



まばゆい光芒の中、アムロとララァは出会った〈41話〉



いるが、このことは、脚本家と完成作品とのかわりを云々する場合、ほとんどの作品について同じようなことが言える。

だからこそ、僕達脚本家は、決定稿を書きあげるまでに、監督を混じえた多くのスタッフと、わずかな見落しも残さないよう、とことんデイスカッションを繰り返す。

しかし、撮影、編集、アフレコ、デビュグ——と、完成直前まで現場つききりに責任を負わされるのが、監督である。監督の持つカラーが、体臭が、完成作品のいたるところからふんぶんと浸み出てくるのは、むしろ当然のことといえるかもしれない。

つまり僕達脚本家が、作品のことを語る時に、その監督の全てを十二分に理解しきれないと、読者からみてくい違いが生じる原因がこのへんにあるということである。

今、三連作を振り返ってみた。

ザンボット・3では、親子三代からなる一族の運命を核に、それを取りまく隣人達、社会とのかわりを通して、生きることの価値をみつめてきた。

光栄なことに、次の「ダイターン・3」では、企画段階から参加してもらい、第一話から書かせてもらおうということで、張り切って打ち合わせの席にのぞんだ。

喧々こうこう。

何日も激しいデイスカッションの連続だった。そして、お互いの世界観がかなり、第一話のシナリオ制作作業に入ったのだが——。

このシリーズでも、僕は自分の理解度の浅さ、甘さに、回が進むにつれ思い知らされることになる。

富野氏の世界は、予割以上に深かった。ザンボットの時がそうであったように、あれ

だけ熱をこめて富野氏が語ってくれた世界、夜遅くグッタリ疲れきった体をひきずって帰るほど、討論の席上で富野氏が口にした知識は、彼が描こうとしたその、永久に求め続けてやまないだろう、彼の底知れぬ世界のほんのごく一部、入口にしかすぎなかったのである。

「よし、それならこっちは」

僕は内心慌てながら、居直ることにした。富野氏と、とことん四つに組んでやろうと思ったのだ。

「ガンダム」の企画が決まり、脚本執筆の話があったのは、たしか暮れの亡年会の席上だったと思う。

ダイタンの最終回、破嵐万式が人知れず戻ったことを思わせる万式郎のたつた一つの窓の灯り。雨の中を、バスに乗るはずのギャリソン・時田の孤老な姿——。

そんなラスト・シーンを描きあげてからだいぶ日が経った冬の日である。

しかし僕の胸には、何故かダイタンのラストシーンが、昨日のことのように鮮明に焼きついていて時だった。

「……ええと、すでに人類はふえ過ぎていてですね、地球の周囲には人口の植民地が沢山あるんです」

富野氏の口から、ガンダムの世界観が例によって熱気に蒸気をたてながら次つぎと飛び出してくる。

僕はワクワクした。

表のカッコウさだけしか出さなかった今までの主人公と違い、裏表のある破嵐万式——。そして、人間とメガノイドの生きざまの違いからくる人間賛歌を描いてきた、ダイタンのあとだけに、今度はどんな世界をとなえようとするのか——。



出撃の前に“女”に戻るラファ <41話>

それが、あのとても大きく深く、機動戦士・ガンダムの世界だったのである。

僕にとって『ガンダム』は、『エイリアン』みたいなものだ、と言ったら笑われるだろうか？

広大な宇宙で、得たいの知れない生物に出会った、もう逃れられない。あなたの叫び声は、誰にも聞こえないのだから――。

あれである。

そのことは逆に、とてもなくどこでかい課題を与えられたことにもなる。

相手がでかければ、たった一人の脚本家にすぎない僕の小さなミスなど、へとも思わな

いだろう。

そう居直ったら急に勇気が出た。

なりふりかまわず、見栄も外聞もなく、体当たりした。僕の目標は、戦争の状況でもなく帝国の興亡でもない。ましてや、専門的なSFの設定すら、時として無視した。

僕の目標は、その時その時僕の前に立ち塞がる、不可解で巨大な一人一人の人間だったのである。

僕が頼もうとすると相手は逃げる。僕がふてくされてそっぽを向くと、相手はあざ笑うごとく追ってくる。

そして結果は、相手の正体がしつかりと掴めないまま、僕が敗北するのだった。

だから、未だに謎を残したままの阿姆ロ・レイも、ブライト・ノアも、カイ・シデンもハヤト・小林も、リュウ・ホセイも、ミライ八洲も、セイラ、フラウ、シャア、ララァ、マクルグ……みんなに未練がある。

キッカ、カズ、レツですら、一人一人を主人公にして、ガツチドリラマを作ってみたかった。

戦いの中の青春群像を描く作品だけに、その一つすら実現できなかったことが残念である。

イセリナ、クルスドアン、エルラン、ウツティなどを主人公にした篇章ともいえる作品が多かっただけに、このシリーズの人物の多さが悔まれる。

これが、ガンダムに対する、ただ一つの不満といえるかもしれない。

『ガンダム』の記録全集が出る、と聞いた時、僕は正直言って嬉しいと思った。それも多くのファンが熱望しているとなれば――僕もある意味でファンの一人だから――なおさらである。

僕は、脚本を書く時、一つひとつのどんな作品にも、その時の全ての情熱を注ぎ込みたいと思っている。

成した作品が必ず満足いくものばかりとは限らない。むしろその反対で、不評、批判をかうものの方が多いのかもしれない。

しかし、テーマを考え、構成をねり、原稿用紙に向かっている時は、自分でも驚くほど情熱を燃やしている。たとえ、書きあげると同時に、いつもながらそれとわかっていても、のへたさ加減に腹がたつとわかっていても。

そのくせまた、性懲りもなく、この次こそは、と、次の作品に情熱を燃やすことで、自分をなぐさめることにしている。

だから、たとえひとからどんなに悪く評価されても――実は、密かに涙ぐましい努力を続けているにもかかわらず、なかなかうまくない――僕の作品歴は、そのまま僕のかかわった『情熱』の歴史でもあるわけだ。

映画でも、音楽でも、アルバム集でも、もしかして大切な恋人からのラブレターでも。

自分の人生の一時期に情熱を燃やしたものであれば、人がその軌跡をいつまでも保存したいと思う気持を、僕は決してめめしいとは思わない。むしろ、自分の人生への情熱を保ち続けられることは、たんに思い出とか懐古趣味といった言葉ではかたづけられない、素晴らしいことだと思っている。

もともと、ラブレターとなると、人によって事情は違ふかもしれない。裏切られたり、失恋したり、厭な思い出があれば少しも早く記憶から消し去りたいと思うだろうから。

とにかく、そんなわけで、『ガンダム』記録全集。ができることは、ガンダムに対してのさまざまな思ひはともかく、素晴らしいことだとはじめに思った。ことにそれがテレビの作品のばあい、一瞬にして消え去ってしまうのだから――。

ガンダム街

山本 優



ぼくたちは走りながらモノを考える習性がついている。貧しい習性である。

たちだまって、あの作品があだだったとかこうだったとか、考えるのが、あまり意味をなさない仕事の環境にいる。

ひとつの作品が街だとすると、ぼくにあって「ガンダム」は通り抜けた背ろの街で、今は別の街でキョロキョロしながら、なんとか面白い「通り」をみつけてひと騒ぎできるかなど、気はそっちのほうへ向いている。

でもガンダムの噂は隣りの街にも奇妙にどこにいて、

「あんた、ガンダムの街にいたことがあるそうですね？」

といったふうの妙な扱いをうけて当惑する。今の、ぼくと「ガンダム」はそういう関係である。

あまり馴れた事ではないので「どんな街でしたか？」と聞かれると、どう云おうかとハタと困ってしまう。

○入口

その「街」はアニメ地方の各間、ロボット系地質の一带にあつて、サンライズ族が新しい街を造ろうと基礎工事をやっていた。

助役の山浦さんという人がやってきて、「面白い仕事があるんだけど、やってみないかね」と誘ってくれた。

ぼくは「ライター」という看板をぶら下げて周辺の「街」で出かせぎ人夫よろしくウロウロしている。いわば渡り職人である。

なつかしい人だった。

ぼくは、かつてサンライズで育ててもらった事があつたし、「ゼロテスター」や「ライディーン」で仕事のコツを教えてもらったものだった。

「現場監督はトミノさんなんだがね……」と意味ありげに山浦さんはつけ加えた。ライディーンの「街」で、ぼくとトミノさんがちよいと険悪な間になった事を覚えていたのだらう。

ぼくはちよつとイヤな予感がしたが、あれはもうずいぶん昔のことだし、こたわるのもがきつばい。

そこでトコトコと山浦さんのあとについていくことになった。

○仕事はじめ

あの顔があつた。トミノさんである。

ニコニコしていた。柔和な感じで友好的？な滑り出しであつた。

「工事」の図面と資料が検討された。同業者に星山さん、荒木さん、松崎くんがいてディブルを聞んだ。松崎くんをのぞいて初顔あわせである。

「ガンダム」の街がおぼろげながら分つてきた。資材がすばらしい。工事の構想も今までのロボット街工事のやり方とは一風ちがつている。

トミノさんの眼をみる。新しい輝きがあつた……と思つた。

「面白そうだな」

ぼくは内心、ワクワクしてくる自分を感じた。「資材の切り方で凄いいものが出来るゾ」

○第一工事

第一話が完成して、初号試写を観る。

現場の熱気が伝わってきて、まず圧倒される。トミノさんの演出の研がまず感覚的に伝わってきた。安彦氏のキャラも見事に芝居していたし、メカの動きも新しい。



アムロとララは互いの思惟が交わり、2人の運命を悟った〈41話〉



ビッグザムを上段から切りつけるガンダム〈36話〉



ミライを平手打ちしたスレッガー〈34話〉

「いけるな」とぼくは嬉しくなった。

親子って、山浦さんが「どお？」と聞いた。

「うん……」そのあと、ぼくは「凄い」といいかけたが、たぶんいわずに興奮をおさえて鎮めたかったと思う。

その喚起力はすばらかった。

「これなんだ。こうしなくちゃいけない」

ぼくはそう想いつつ、まだ興奮のさめないうちに、別の「街」のオーナーに云った。

「ガンダムの第一話のオン・エアは絶対観ておいたほうがいい。何かあるよ」

ぼくは忙しげに彼にビデオにとっておくことをすすめた。

だが彼は、さしたる興味も示さずに、ビデオもとらなかつた。そしてついに、今に至るまでガンダムの最初の喚起力とは無縁の人となっているに違いない。

ぼくはしばらくして、基本的にその後と仕事をすることをやめた。もともとガンダムのその一件のせいばかりではないが。

○中間工事

まずは「新しい興奮」で、快調な滑り出しであった。

脚本のチーム、メイトに星山さんと知り会

えたことは、仕事を楽しくすることになった。彼はよくない「やさしい触覚」を備えたひと

とで、トミノさんが一区切ごとに出してくる「叩き台メモ」をはさんで話しあうのが、ぼ

くの楽しみのひとつになった。

あらぬ冗談をとばしながら、トミノさんはじめガンダムの奥の深さをさぐろうとした。

ぼくの「イヤな予感」はこのころ完全に吹きとんでいて、ガンダム街の「おいしい」通

りを捜そうと夢中になりかけていた。そのいくつかはオン・エアされていた。が、多少の不満が

残った。

山浦さんが云うには、トミノさんがぼくの事を「変った」といつているという。ぼくもトミノさんは「変った」と思っていた。

変な云い方になるが、そこでお互い、ある何かを認めあつたのだ。と、当時は錯覚した。

このころ、テレビ大陸の「ヘキ地、アニメ谷」に奇妙な風が吹き込んでいた。

「アニメージュ」をはじめとする、現場の外でのマスメディアの人気展開である。

ガンダムがそのターゲットにあげられた。

今まで、ヘキ地の穴のなかでモソモソ動いていた原始人が突然カメラのフラッシュを浴びてオタオタしはじめたのがその現象の本当のころだと思ふ。

戸惑いつつも、いやらしくはにかみながら顔をさらしたのは、ぼくだけではなかったはずだ。

そしてたぶん、これはヘキ地の谷間にとって歓迎すべき風であった。

フィルムとして完結する様々なスタッフの生かされなかつたウラムが、生で主張しはじめる舞台ともなった。

ガンダムの街で生かされなかつた自分の

「ガンダム」の顔と安彦氏が表現出来たのは、ある意味ですばらしい事なんだとぼくは思ふ。

そして、記録されるファッショング（保存）効果は、新しく次に生まれる作品の内容に関

して類似性に流れる創作センスに出口をつきつけることになるだろう。監視効果である。

アニメに限らずテレビの大方の作品は、どこか昔の邦画の作り方と似ている。

いわずに一定期間に一定の作品を流してさえいけば安心していい。

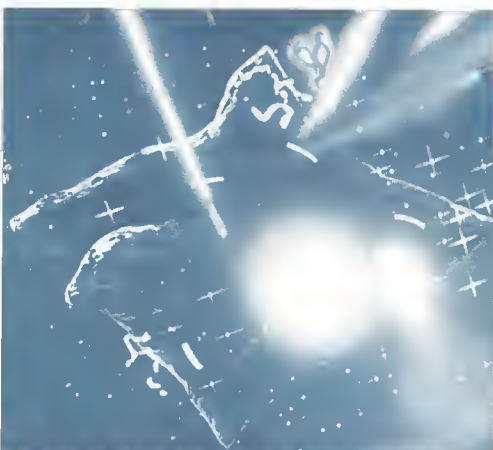
とくに野心を試みは主流から排され、あたりさわりのない最大公約的の興味の数を



スレガーに心を打明るミライ <36話>



ラアのエルメスはビットを自在に操る <40話>



宇宙要塞ソロモンが連邦の手に渡ったことは、戦争の大局を大きく変えた。 <35話>

満せば事たりた。

たとえばあまりよくはないけれど、「水戸黄門」的視聴率の魔術によって、かたくなに頭を凍結する人種が、創作エネルギーに棒をはめ、それでよしとする。

キャラクターが変り、舞台が変わると十年一日のドラマのドグマを変えることは夢にも思わない人種が、視聴者の欲求と現場のエネルギーの間で、知らず妨害している。

そしてしばらくはそうした主流は変わらないはずだろう。だがガンダムはそうした流れに力及ばずとも斬り口をつける挑戦となるべき作品であった。脚本にも新たな視点が要求される。

それで想い出すけれど、はくは親しいライターの友人と、一杯やるためにある盛り場の一軒に入ったとき、

僕の友人は、愛すべき愚かさで、自分はシナリオ・ライターであると名乗った。で、数週間して、顔を覚えていた女子大生のアルバイト嬢が「ああ、こないだのコピー・ライターさん」といつて微笑った。

僕の友人は一瞬、驚然とした。これは素晴らしい皮肉である。云った本人は皮肉つつもりはなかったが……

プロと自称するほどの仲間たちは、ぼくを含めて、あるパターンを頭の芯に据えている。それを「引出し」というのだが、早い話が、かつての素晴らしいドラマのエッセンスを、人物と舞台をおきかえて「焼直し」するにすぎない。なかには引出しの多きでもてる人がいて、愚かなプロ根性といわなければならぬ（これは演出家の一部にもいえることである）。

谷間に吹き込んできた。現場。外の風がそういう情性を少しでも吹きとばしてくれ

ば、生きのこる創作エネルギーは、おのずから送り手と受け手にとって楽しいものになるはずなのだ。工夫と触覚なしには生きのこれない。腐肉をあさる「恥」は、もつべきだと思ふ。けれど、それが当分、先のことであるならそのための地道なアプローチをしなから、土俵から逃げずにとどまることなのだ。

土俵の外で評論家のしり顔をするのはどうも卑怯なことではない。カッコつけるな！で、「ガンダム」は、そうした新しい斬り口をつける喚起力を秘めていたし、事実ある意味で損な戦いをして毀譽褒貶を浴びている。

だからこそ、青春群像の今ふうムードの芯に、作品のセンタリングが必要であった。ばくも、たぶん星山さんや他のライター仲間も、流れの途中でその辺が気になってきて稿に入る前の「ドミノ・プロット」の叩き台ミーティングを進めていたはずであった。

「イヤな予感」が頭をもたげてきたのは、この時であった。

○しらせ

脚本と完成フィルムの間には、あるモメントが働く。

絵コンテ、演出、現場の工夫、とりわけC・Dの感性である。

脚本はどういうすべでフィルムが完成されないからといってライターは文句はいえない。(現状では)脚本はある意味で喚起力の提出だからである。あるシークエンスなり、あるセリフが現場の喚起力によってひろがり、置きかえられることは、脚本と演出の楽しいつばぜり合いでもある。だが、これはフガイな綱張り礼儀なのだ。

しかし、おのずから総合作業のなかでの最低のルールがある。

人物の捉え方各話の基本的な構図、底にあ



るセンタリングの流れ、それらはすべて合意の上で受け渡しが行われるのである。

そのために打ち合せがあり、稿を重ねる必然性がある。

ある演出族のなかには「シナリオ通りやるのは演出的無垢である」といった風の奇妙なアニメ各の信仰があるらしい。

ともあれ、はくのアブローチした「ガンダム」のシークエンスなりセリフは、それなりに部分鄭重な扱いをうけて生き残っていたが、回を進めることに怪しくなってきた。

トミノの感性的な会話表現は、独特のファッション性をもっていたい、刺激されるころは少なくなかったが、ひとつ判りにくい飛躍があった。

そして、それはトミノさんの狙いであったのかもしれないが、外装のムード的ファッション性をすかしてみると、果して成功したとは思えない。

ただぼくなりにそれに迫ろうとした。が、許容感性を超えて、翳るでるふう。会話にさらに置きかえられたのを聞いてみると、顔の裏側からはすかしくなる思いがすい分したので覚えている。

トミノさんの表現法を借りると「その異和感」は絶大であった。」

このあたりから、ぼくは作品のかかわり方に今ひとつビッタシない奇妙な感じがあった。しらけたのである。

○大監督

トミノさんはもしかすると大物なのかも知れない。浅薄なぼくには理解しがたい何かがあるのだろうか。

しらけたとはいえ、ぼくはまだガンダムの街にいた。仕事を再開すると、また何かウズ

ウズする。そういう魅力はまだ十分に満ちていて、キャラクターのそれぞれに離れがたい何かがあった。

ぼくはガンダムの街の恋にふれたかった。そんなとき、トミノさんの手品がはじまった。

「ニュー・タイプ」が出はじめたころだったかな？と思う。

ぼくたちライターとの打合せ図面と別な図面をもっていて知らないところで調整しているのかな？と思われるほど打合せの合意点とフィルムの志向性が奇妙にズレて流れている感じだった。邪推に近い不信心である。

「大監督」にあらがちの「これはおれのフィルムである」という、独善としないこともなかった。が、もしかすると、その秘密を打ちあけるに足る能力がぼくらライターにないと嘆いていたのかもしれない。

そうだとすると申し訳ないことである。

事実ぼくは「テキサスの攻防」の改訂に対してチョンボをやった。逃げ腰になって「お預けした」のである。残り話数の短縮の報が届いたゴタゴタのなかであったと思う。だが残りノルマの「シャリアブル」でぼくは最後のアブローチをした。トミノさんに懐中をみせてもらいたかったのである。

かなりノットが、シャアとララア、アムロとの対置。ララアとアムロのニュータイプ的接近と、近づけぬシャアの虚無感の影といたった構造へのアブローチは見事にはずされてしまっていた。表面的な合意であった。

そこでぼくは「ニュー・タイプ」の足がかりを見失なうて、まったく判らなくなってしまう。

こうなると、ライターほど無力でアホな生きものはない。

○出口

打ちあげパーティの席で、ぼくは最終話をみた。現場スタッフの熱気の伝わるなかで映っている「ガンダム」は、いいムードだった。アニメ的な表現は確かに他のロボットものと一線を画する出来映えだった。

だが、事あり急にスタートしてきたガンダムの本質が、どこかではぐらかされたんじゃないかと思つて淋しかったのは、ぼくだけだったのだろうか。

翔ぼうとして一生懸命跳んだけれども浮いてしまったんじゃないか？(トミノさんは自分にむけられたそのツケを知っているはずだ)

そんなグチも出るほど語るに足る作品ではありました。

ぼくはというと、またとこそあの街の路地に首を突っ込んでいて、きいたふうな口を叩くほどの資格はないけれど。

「じゃ、いやな街だったのか？」と聞かれると、

「いや、なかなかいい街でしたよ」

と素直にみとめて話したいと思う。

アニメの土壌は時代にそつてもつともつとひろがつてゆくだろう。

そんなとき、「ガンダム」の投じた話題性と谷間のオビエオン・リッターたらんとしたトミノさんの努力が実つて、もつと魅力的な広大な土地がみえてくるのかも知れない。

現場のみなさん、ほんとうにおつかれさまでした。

ぼくは、別の「街」でかりにドブさらいを甘んじてやるとしても牙だけはしつかり研いでおくつもりである。(55・7・13)

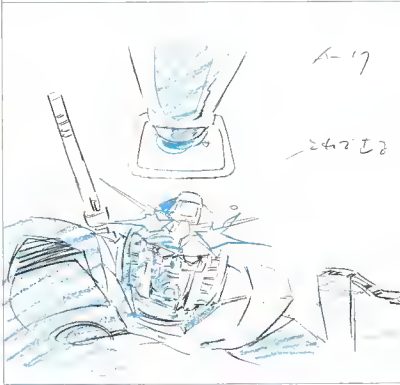
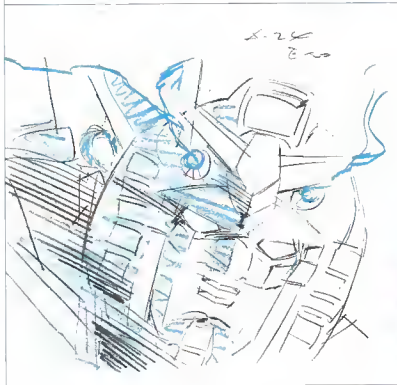
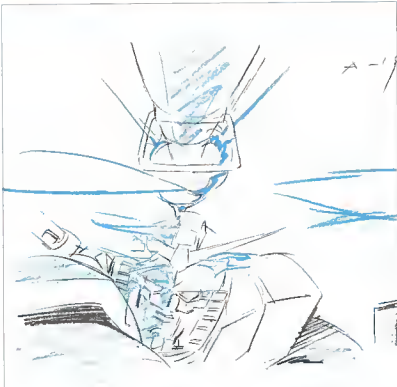
安彦良和作画ノート



機動戦士ガンダムの作画監督としての思い出話を中心に未公開原図を一挙公開！

○ 本編使用直筆原画





「作画監督」のこと 「ガンダム」のこと

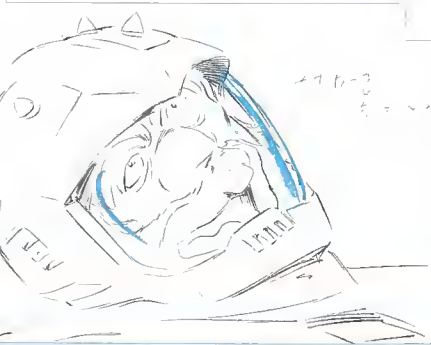
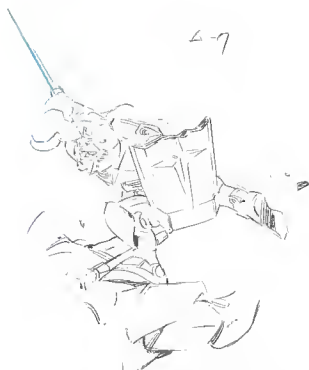
安彦良和

(いざや分感別「ほくなつてしまふ」のだけれと)

もうずいぶん以前から云われていることだが、作画監督というのはどこまでも矛盾に満ちた職種である。大変に重要でありながら、そのくせえらく馬鹿らしい。滑稽なまでにみじめくさい仕事である。だからこの仕事をつきつけられるとたいがいアニメーターは尻こみをする。わざわざ志願してそれをやらうなどという人はとうの昔に「物好き」の部類に入ってしまったが、それでも「この仕事」に頼らなければマシな作品は造れないという事情は変らない。変らないどころかその辺はますます逼迫して来さえている。これは本当に、まったく困った事態なのだ。

「ガンダム」では久しぶりにこのやっかいな仕事につき合ってみた。作品世界で根づいた気に入っていただけに無用な心理的ストレスはさほどでもなかったが仕事はやはりシンドかった。あまつさえ、シンドさにめげて最後は名譽の戦傷者になってしまった。そして痛感したのはまたしても「この仕事」の矛盾的性格の、そのたいそうなしたたかさだった。

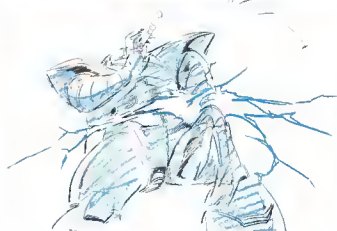
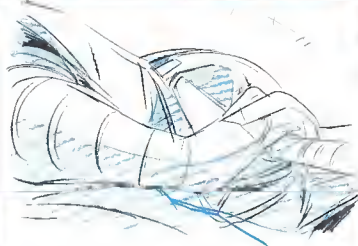
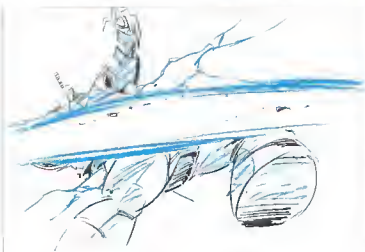
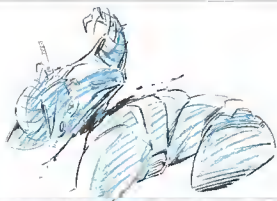
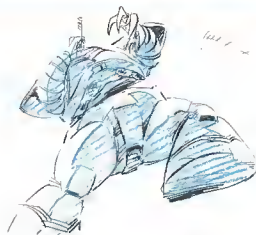
アニメーターの力量が均質で、しかもそれが一般的に要求される水準を大方充足しているというような状況なら、なにも作画監督などというような野暮職をしつらえる必要はない。実際往年のデイズニー・プロダクションにはこんな名を冠した持ち物は無かったという。さすがである。しかしどこかの異境での、



無縁に近い高みを引き合いに出しても所詮は
せんないことだ。ここは只現実を、目の前
のガムの事情を凝視するしかない。作画監
督は厳然として必要なのだ。否、それど
ろではない。少しばかり誇張して云うならば作
画監督とは今日「作画者」の便利な代用品に
すらならうとしているのだ。

誇張ついでにここからの話は全部、幾分ハイ
トーンの愚痴語りにしてしまおう。

巻では目下アニメがブームとかで、実際
これの「当りモノ」は担当程度商業的にも
てはやされてもいる。だがそれと同時に（こ
れは誰でもが容易に気付くことだが）アニメ
界とそれをとり巻く環境世界の道義性は確実
に低下しつつある。マニアを喰いモノにする



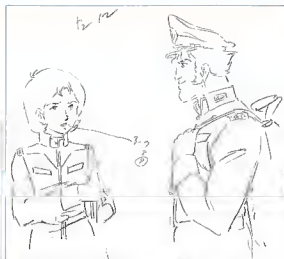
こんな状況下でひたすら良心的（やさしい）であり続けるということはとてもムズかしいことだ。とりわけ徒労が大半といっていいような実労働（じらう）と日夜向き合いつばなしの我々のような下働き族にとって、それは殆ど至難の業とさえいっている。

何よりも僕はアニメーターだ。だから例をアニメーターの場合にあてはめてみよう。荒む心を制して一枚の原画を余計に描くことはムズかしいことだ。その原画に「気分」を乗せることは尚更ムズかしいし、後に続く動画や仕上げのスタッフ達の苦労をおもんばかって判りよい指示や内容を現すことはもっとムズかしい。ともすればコンテの要求をも割愛したくなる。心情は「最少限の表現」へと走りがちになる。それが即ち「リミテッド」なのだ——などという変な悟りを持ち込むようにもなり、最後には納期のベタベタな遅れにも無頓着になる。なんとも「こんな世の中なのだから自然」などと云いのがれてしまえ

キワモノ商法は堂々まかり通っているし、そうした商法に毒されたマニアの一部は完全なコソ泥と化してスタジオのバンクセルを盗み出したりにしている。明々白々なリビートフィルムがどう見ても新作と見紛うような悪宣伝に飾られて木戸銭をとり、汗水たらしで働いた現場スタッフをふみつけにして得体のしれないブローカーや顔役がアブク銭をかせぎまくっている。「カオ」や「コネ」、もしくは意図的なことなれ主義に乗ったとか思われないような企画が相も変らず「公共の」電波を占有し、実働スタッフは依然として「単純労働」としての勘定のもとにそうした現場へと狩り出されていく。——やるせないのだ。全くイヤになってしまう。

横を向くミライ

b



「よろしく。ミライ・ヤシマです」



手を出すスレガー



中目八千



ブリッヅに帰ってきたミライを見るブライト

第31話「ザンシバル、追撃」より



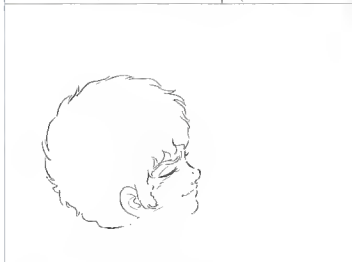
「ハハノ俺もついていたな。こんなきれいなお嬢さんと御一緒できるなんて」

困ったことだ。元来愚痴っぽい性格だから
ごたくを並べだすととまらなくなる。(編集
氏との約束の紙数はもう尽きてしまっ
ても本来の注文にあった内容について
は一言も触れていない。)——もういい
加減にしよう。これだけでも作画監督
などという意味ありげな職種の実態は、
現今のアニメ情

更に悪いことには、部分的にはあるが作
画監督の存在はある面であってスタッフの道
義の退行を促してさえない。簡単な話だ。彼
が「道義の一手引き受け」をやっているかのよ
うに鑑賞されるからである。とんでもない話
なのだがこれが現実には案外と多い。用紙の
スミに。作画監督よろしくね。なんて不
どきな伝言を見た覚えのある作画監督者は少
くない筈である。こうなるとなんの為の持ち
場かがまるで判らなくなる。この世に存在し
ていて自分は一体誰の役に立っているのだな
どと大仰に悩まなくもなる。——等最初に
「矛盾に満ちた」なんて奥まった形容をし
た理由の一つは、例えばこうしたことでもあ
るのだ。

作画監督というポジションは「作画」とい
う領域に於て制度的に用意された「良心」で
あるといつていい。作監と個別スタッフが互
いに高め合う、というような往年の理念的な
在り方は現在殆どカガをひそめてしまひ、そ
れは一層、道義的な退行現象に対する歯止め
役そのものとなり果てて来ている。アニメ
ターに受けが悪い訳である。

ガンダムに乗るのを嫌がるアムロをプライトがなぐりつける。ひとりの少年が闘いを拒否したところで、生き残るためには全員が関わらねばならなかったのだ。第9話「翔べノガンダム」より



報との関わりの下でどうであるかということも含めてかなり良くお判りいただけたこととと思うからだ。

只、苦楽を共にしたガンダムスタッフの名譽の為に以下はどうしてもつけ加えておかなければなるまい。

ガンダム作画班に見えた道義は僕がかつて経験したどの作品のそれよりも良好だった。(幾人もの人達からは僕は少なからぬ心理的な励ましをさえ感じた程だ) 何よりもその証は僕の「留守中」の作画水準に於て識ることが出来ると思う。

＊

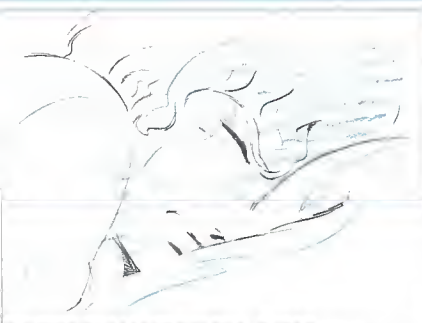
無論問題は無い訳ではなかった。幾人もの人達が空しい後味だけを残して去っていったしまったし、幾つかの仕事は中途で投げ捨てられてしまったし、幾つかのトラブルはあったし、幾つかの場合、仕事上のコミュニケーションはついに果たされずに終わってしまった。

それでも概して総印象は悪くなかった。悪いしこりを比較的にネにもつ反面、良い想い出をも忘れたがらない性質の僕としては、やはりこの仕事の収支には満足すべきだと思っている。

「ガンダム」の作画作業は案じられた程の「貧乏クジ」ではなかった。そしてそれは、いずれにせよこれを最後に「作画監督」などという仕事はもうやるまいと心決めていた僕にとつてとても辛いことだった。

一朝一夕には消えぬ客の悪癖は依然として愚痴である。しかし今は只、そんな情況下では得られる限りの、最大限といつてもいい満足を与えてくれたあの仲間、あの仲間、そして見も識らない沢山の人達の励ましに對して、感激、また感謝の心境である。

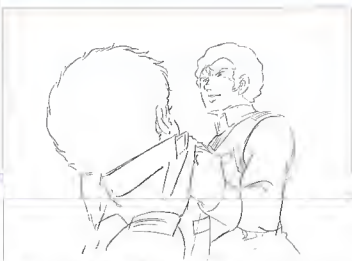
(7月11日)



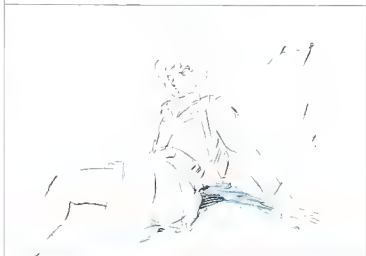
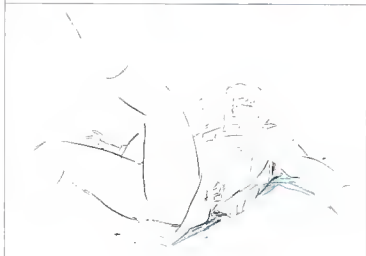
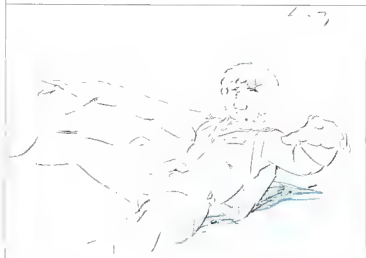
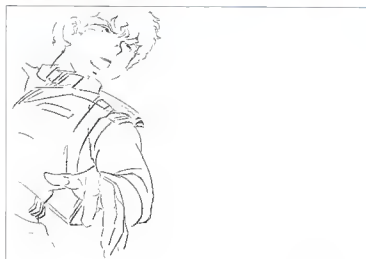
闘いにつく闘いで心身ともに疲れきったアムロ 第9話より



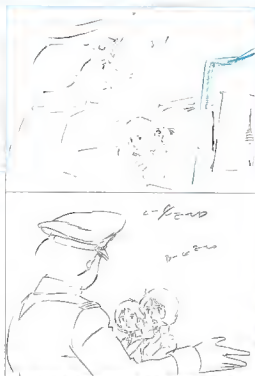
ゴッパに父親の話を出された直後のミライ。立ち上って敬礼する時にブライトの反応を見ている 第29話「ジャブローに散るノ」より



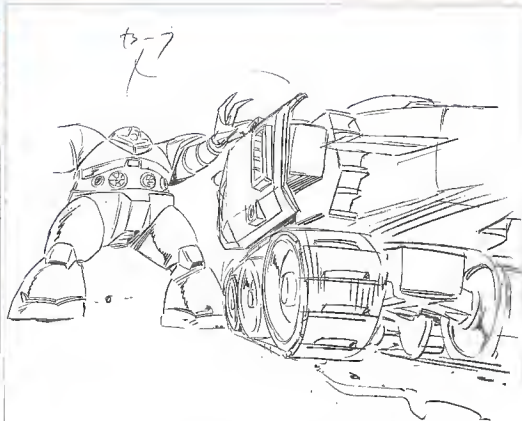
連邦軍兵士に殴られるアムロ、リンゴ売りのおばさんにかむ兵士
に文句をいってこうなったのだが…… 第13話「再会、母よ…」より



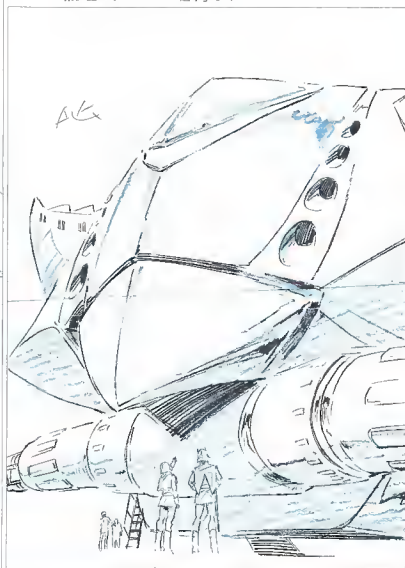
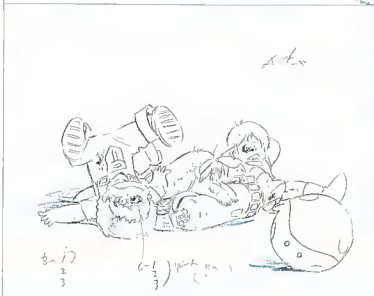
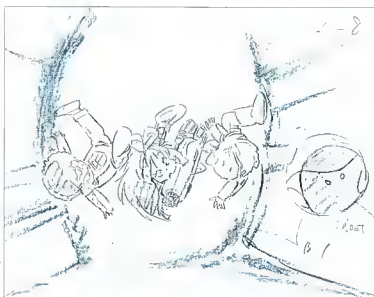
侵入してきたゴックに向かう、アムロとセイラの乗ったGブル 第29話「ジャブローに散る」より



キッカたちを見に行く途中、菅見宮から三人の脱走を知らされ、驚くフラウ
第30話「小さな防衛線」より



トクワンからモビルアーマー「ビッグロ」の説明をきくシャア
第31話「サンジバル・追撃」より



C-137 作業員に捕えられる三人

人間がいるノと知って逃げ出そうとした三人の前に、作業員のひとりラムジが立ちふさがる。

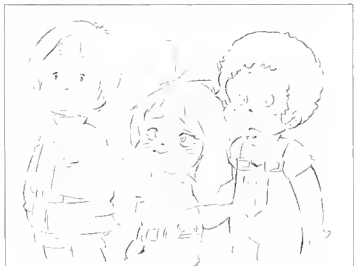


身を寄せ合う三人

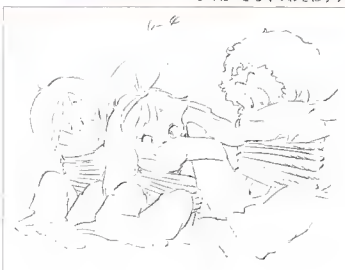
第30話「小さな防衛線」

カツ、レツ、キッカが主役ともいえる話だけに、かれらの原図が多い。その中から子供らしい表情のカットを選んでみた。

C-130 おびえるキッカ。「あっ足んこノ」ホワイトベースに向かう途中で逃げこんだGMの工場。そのGMの足もとを走るジオン軍の作業員を発見した瞬間である。キッカは続けていう。「だっ…だって、ほ、本当に動いたのよ。本当よ。本当に動いたのノ 人かも知らないわよ」



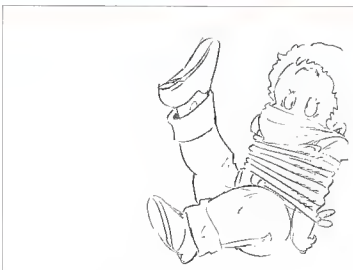
しばられたカズ、レツ、キツカ



レツの「ほめてくれ」というジェスチャー



その反動でたおれるレツ



ブーツを飛ばし右足の指を出すキッカ



14-14

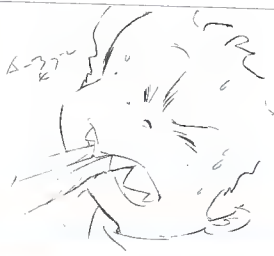
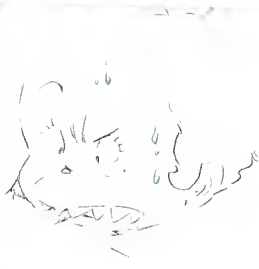
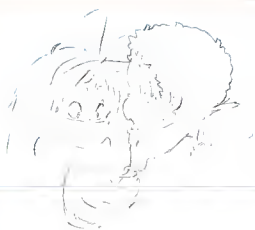
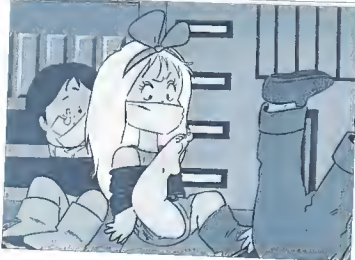
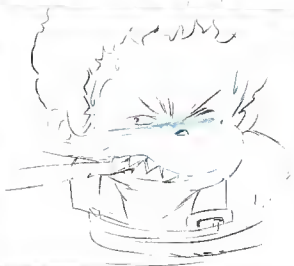
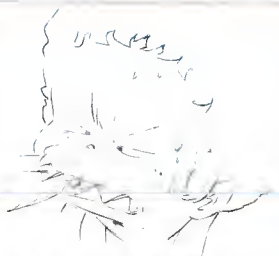


キッカが右足を使って、レッツのさるぐつわをさげる

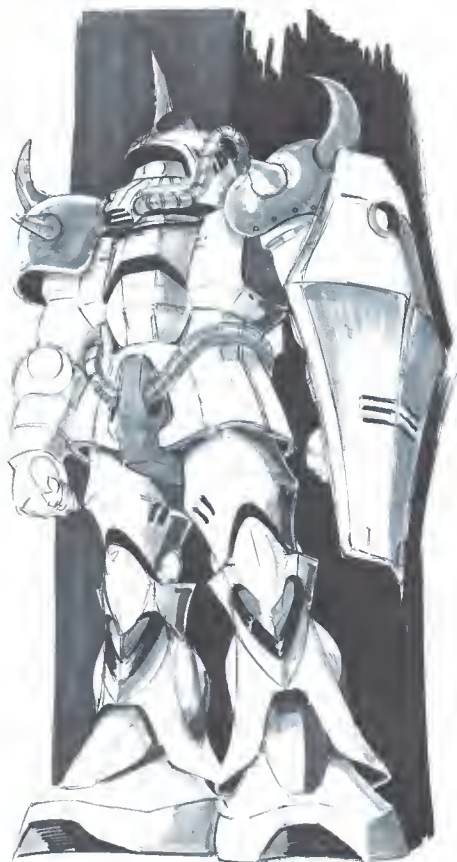


そのブーツに当たるカッ

ロープをかみ切るレッツ。しばられた三人が互いに協力してロープをほどく名シーン



レッツは自由になった口でカツのロープを……



機動戦士ガンダム・記録全集⁴

昭和55年8月16日発行

発行者／岸本吉功

発行所／株式会社日本サンライズ

〒167 東京都杉並区上井草 2-35-11

電話／東京(03)399-8962

編集者／株式会社銀英社

印刷・製本所／小宮山印刷株式会社

●許可なく本書の転載複製を禁ず。

落丁・乱丁本のお取替えは直接、小社までお送りください。(送料は小社で負担します。)

定価 2,900円

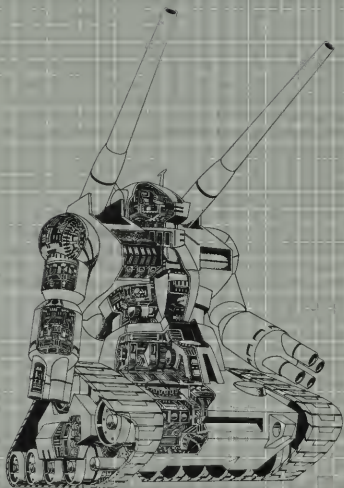
G
ガンダム
UNDAM

記録全集 **4**



MOBILE SUIT GUNDAM





Presented by
NIPPON SUNRISE

機動戦士

Ζ

Ζ

Ζ

記録全集

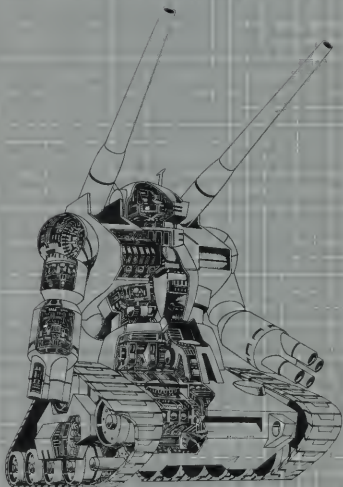
4

G 機動戦士
ガンダム
GUNDAM

記録全集 4



MOBILE SUIT GUNDAM



Presented by
NIPPON SUNRISE

機動
戦士

力
大
記
録
全
集

4